岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第487集

本宮熊堂(もとみやくまどう)B遺跡第27次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

2006

岩手県盛岡市

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

本宮熊堂B遺跡第27次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成16年度に発掘調査された本宮熊堂B遺跡第27次調査の調査成果をまとめたものです。調査の結果、雫石川右岸の河岸段丘縁辺部に立地する奈良～平安時代の集落跡であることが明らかになりました。住居跡からは、煮炊きや盛付け、貯蔵などに使用した土器をはじめとし、鉄製の鋤先などの農具も出土しており、この地域の集落構造を考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年３月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　　言

1　本報告は、岩手県盛岡市本宮字熊堂38－5ほかに所在する本宮熊堂Ｂ遺跡第27次発掘調査の結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て、盛岡市から委託を受けた(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡各次略号は、以下のとおりである。

　　遺跡登録台帳番号……ＬＥ16－2118

　　遺跡略号……ＯＫＯ－04－27

4　野外の調査期間・調査面積と調査担当者は、以下のとおりである。

　　調査期間　　平成16年８月６日～９月14日

　　調査面積　　3,661㎡

　　担 当 者　　小松則也・福島正和

5　調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

　　整理期間　　平成16年11月１日～平成17年３月31日

　　担 当 者　　小松則也

6　座標原点の測量は、次の機関に委託した。

　　座標原点の測量……㈱吉田測量設計

　なお、第27次調査の基準点設定については第25次調査の「補２ Ｘ＝－35290.000、Ｙ＝25600.000、Ｈ＝124.937ｍ」を基点とし、各基準杭、補助杭を打設した。

7　本報告書の作成にあたり、盛岡市教育委員会からご指導とご協力をいただいた。

8　野外調査にあたっては、盛岡市、紫波町、雫石町、滝沢村の方々に多大なるご協力をいただいた。

9　調査成果の一部は、これまでに『現地公開資料』や概報を発表しているが、本報告書の内容が優先するものである。

10　土層観察の土色は、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄：1992）による。

11　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行のものであり、図中に図幅と縮尺を記している。

12　本遺跡から出土の遺物および調査に関わる資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 2

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2

1　遺跡の位置 …… 2

2　地理的環境 …… 2

3　周辺の遺跡 …… 6

Ⅲ　調査の方法と室内整理 …… 8

1　野外調査の方法 …… 8

2　室内整理の方法 …… 10

Ⅳ　検出遺構と出土遺物 …… 12

1　基本層序と遺構配置 …… 12

2　出土遺物の掲載基準 …… 13

3　遺構と遺物 …… 13

4　遺構外出土物 …… 48

Ⅴ　まとめ …… 58

1　遺構 …… 58

（1）第25次調査との関係 …… 58

（2）調査区及び遺構の特徴 …… 58

（3）まとめ …… 60

2　遺物 …… 60

（1）土師器の細分比較 …… 60

（2）酒美平遺跡Ⅱとの遺物比較 …… 61

（3）まとめ …… 65

報告書抄録 …… 94

図版目次

第1図　岩手県図・遺跡位置 …… 1

第2図　地形分類図 …… 3

第3図　周辺の遺跡図 …… 4

第4図　本宮熊堂B遺跡各次調査全体図 …… 7

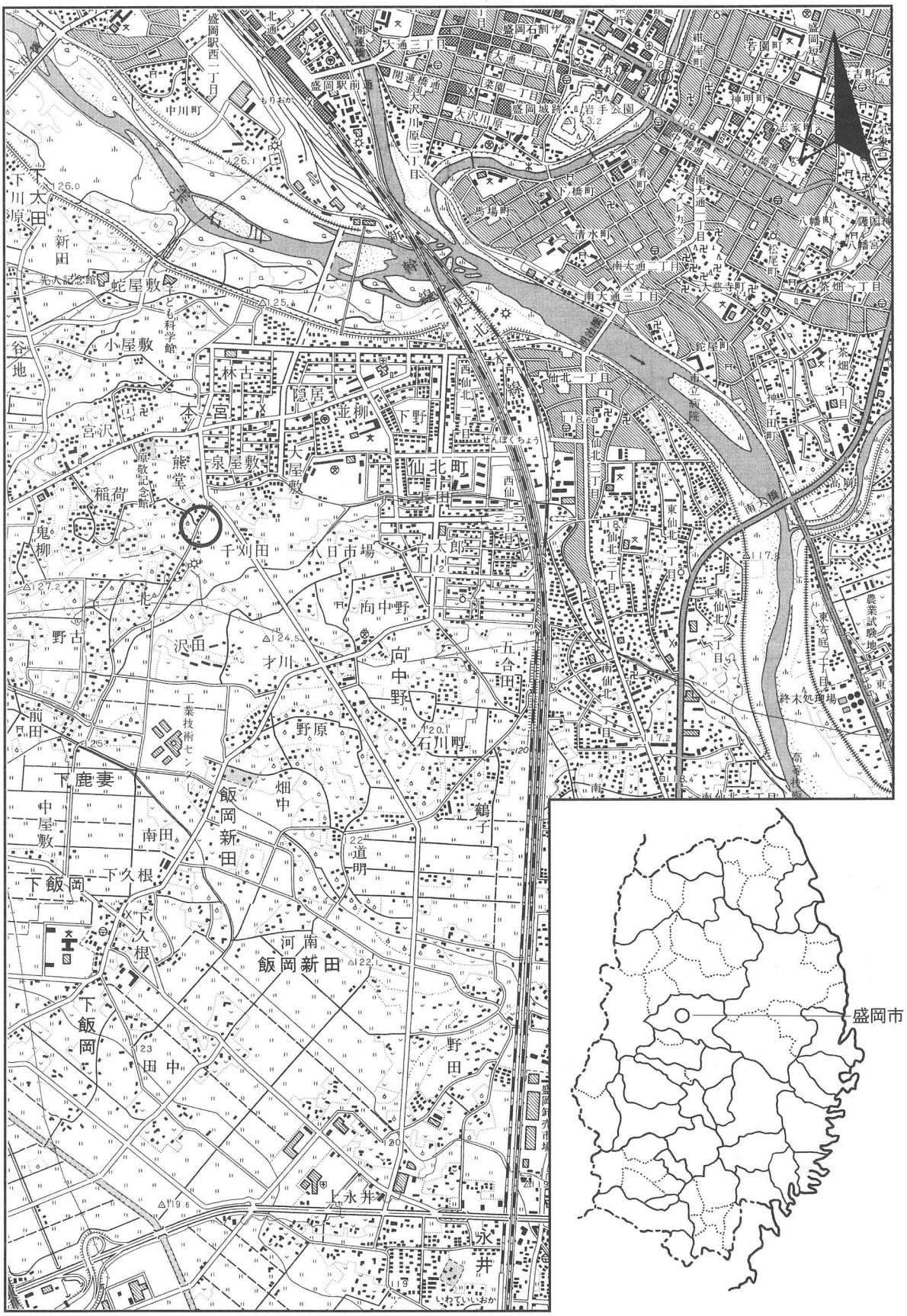
第５図　グリッド配置図・調査区図 …… 9
第６図　凡例 …… 10
第７図　遺構配置図 …… 11
第８図　基本層序 …… 12
第９図　ＲＡ084竪穴住居跡（１） …… 14
第10図　ＲＡ084竪穴住居跡（２） …… 15
第11図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（１）…… 17
第12図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（２） …… 18
第13図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（３） …… 19
第14図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（４） …… 20
第15図　ＲＡ085竪穴住居跡 …… 22
第16図　ＲＡ085竪穴住居跡出土遺物 …… 23
第17図　ＲＡ086竪穴住居跡 …… 24
第18図　ＲＡ086竪穴住居跡出土遺物 …… 25
第19図　ＲＡ087竪穴住居跡（１） …… 27
第20図　ＲＡ087竪穴住居跡（２） …… 28
第21図　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（１） …… 30
第22図　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（２） …… 31
第23図　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（３） …… 32
第24図　ＲＡ088竪穴住居跡 …… 33
第25図　ＲＡ088竪穴住居跡出土遺物 …… 34
第26図　ＲＡ089竪穴住居跡 …… 35
第27図　ＲＡ089竪穴住居跡出土遺物 …… 36
第28図　ＲＡ090竪穴住居跡 …… 37
第29図　ＲＡ090竪穴住居跡出土遺物（１） …… 38
第30図　ＲＡ090竪穴住居跡出土遺物（２） …… 39
第31図　ＲＥ016住居状遺構・出土遺物 …… 40
第32図　ＲＤ187土坑 …… 41
第33図　ＲＤ188土坑・出土遺物 …… 41
第34図　ＲＤ189土坑 …… 42
第35図　ＲＤ190土坑 …… 43
第36図　ＲＤ190土坑・出土遺物 …… 44
第37図　ＲＧ110・138溝跡 …… 46
第38図　ＲＧ138・139・140溝跡 …… 47
第39図　ＲＧ138・139溝跡出土遺物 …… 49
第40図　遺構外出土遺物 …… 50
第41図　第25・27次遺構全体図 …… 59
第42図　ＲＡ084・087竪穴住居跡遺物出土状況… 62
第43図　ＲＡ084・087竪穴住居跡土器集成図 … 63
第44図　ＳＩ17・18竪穴住居跡土器集成図 …… 64

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 5
第２表　遺物観察表（１） …… 51
第３表　遺物観察表（２） …… 52
第４表　遺物観察表（３） …… 53
第５表　遺物観察表（４） …… 54
第６表　遺物観察表（５） …… 55
第７表　遺物観察表（６） …… 56
第８表　遺物観察表（７） …… 57
第９表　土器細分一覧 …… 61

写真図版目次

写真図版１　空中写真（１） …… 67
写真図版２　空中写真（２） …… 68
写真図版３　土器集合写真 …… 69
写真図版４　表土除去・調査前風景 …… 70
写真図版５　基本層序 …… 71
写真図版６　ＲＡ084竪穴住居跡（１） …… 72
写真図版７　ＲＡ084竪穴住居跡（２） …… 73
写真図版８　ＲＡ085竪穴住居跡 …… 74
写真図版９　ＲＡ086竪穴住居跡 …… 75
写真図版10　ＲＡ087竪穴住居跡（１） …… 76
写真図版11　ＲＡ087竪穴住居跡（２） …… 77
写真図版12　ＲＡ088竪穴住居跡・作業風景 … 78
写真図版13　ＲＡ089竪穴住居跡 …… 79
写真図版14　ＲＡ090竪穴住居跡 …… 80
写真図版15　ＲＥ016住居状遺構 …… 81
写真図版16　ＲＤ187・188・189・190土坑 …… 82
写真図版17　ＲＧ138・139溝跡 …… 83
写真図版18　ＲＧ110・139・140溝跡 …… 84
写真図版19　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（１）… 85
写真図版20　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（２）… 86
写真図版21　ＲＡ084（３）・085・086竪穴住居跡出土遺物 …… 87
写真図版22　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（１）… 88
写真図版23　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（２）… 89
写真図版24　ＲＡ087（３）・088竪穴住居跡出土遺物 …… 90
写真図版25　ＲＡ089・090竪穴住居跡、ＲＥ016住居状遺構出土遺物 …… 91
写真図版26　ＲＤ188・190土坑、ＲＧ138・139溝跡出土遺物 …… 92
写真図版27　遺構外出土遺物、ＲＤ190土坑出土銭貨 …… 93



1:25,000　盛岡・矢幅

第１図　岩手県図・遺跡位置

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画（いわゆる盛南開発）は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、現在の既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成２年９月に岩手県、盛岡市、旧都南村の三者が地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成３年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成３年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、本件に関しては盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定し、(財)岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。当遺跡第27次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成16年度の事業として確定した。　　（盛岡市都市整備部盛岡南整備課）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺 跡 の 位 置（第１図）

本宮熊堂Ｂ遺跡は、岩手県盛岡市本宮字熊堂38－5ほかに所在する。国土地理院発行の５万分の１の地形図「盛岡」（NJ－54－13－14）の図幅に含まれ、北緯39度41分06秒、東経141度07分38秒付近に位置する。調査区はJR東日本盛岡駅の南西1.7㎞付近で、雫石川によって形成された自然堤防上に立地している。標高は124m前後で宅地として利用されてきたが、近年は道路及び更地になっていた。

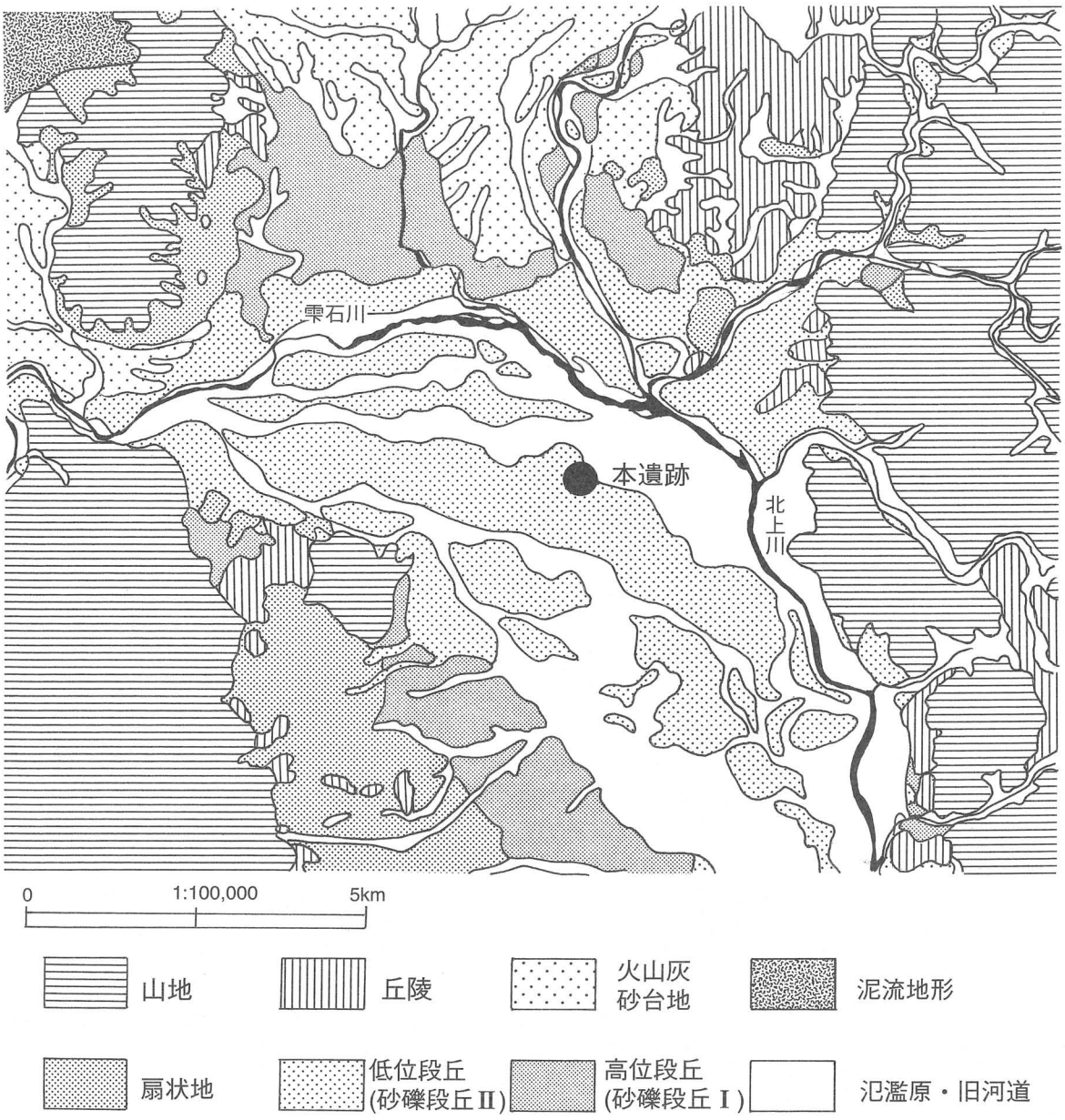
2　地 理 的 環 境

盛岡市は東西に迫る山々に挟まれた盆地を中心に広がる、緑と水の街である。市街地からは北西にコニーデ火山特有の裾野を東側に広げる岩手山（標高2,038.2m）、北東側に姫神山（1,124.5m）、南東側に霊峰早池峰山（標高1,917m）を望むことができる。また、白鳥が飛来する北上川とその支流中津川・梁川・雫石川が合流し、力強く南下を始める地点でもある。

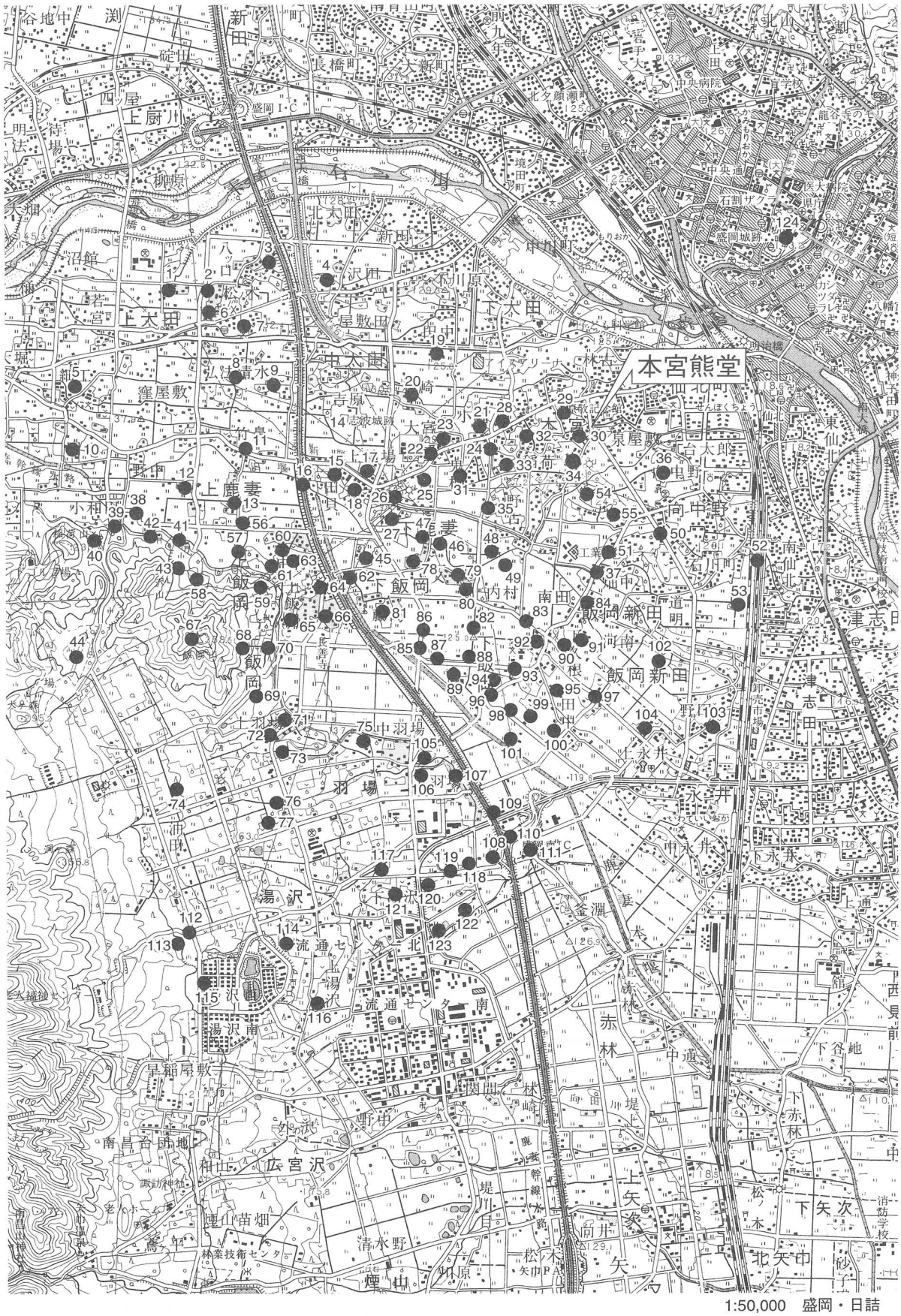
北上川は東北地方最大の１級河川で、主流部の延長294㎞、流域面積10,250k㎡藍支流数216を有し、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾に注いでいる。古代より人と物の流れは北上川により司られ、時には荒れ狂う自然の恐ろしさを人間に知らしめ、またある時にはその豊かな恵みを人々に分け与えてきた大河である。流域は、盛岡市北部の四十四田峡谷と一関市弧禅寺峡谷を境にして上・中・下流に分けられており、盛岡市は中流域上部にあたる。中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いにより対照的な様相を呈している。新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し、西岸に大小の扇状地が複合する広い平野部を作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって解析され段丘化している。これに対して老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵縁片部に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。北

上川流域の第四系及び地形の研究は中川久夫他の業績が大きく、中流域の段丘を上部から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類した。中流域北部ではこれらに相当するものとして石鳥谷段丘、二枚橋段丘、都南段丘が設定されている。

本遺跡の所在する北上川中流域北部右岸では、大規模な平野と奥羽脊梁山脈から供給される多量の堆積物による扇状地が形成されており、雫石川以南北上川以西には雫石川の下刻・堆積作用により高位から順に「砂礫段丘I」「砂礫段丘Ⅱ」「砂礫段丘Ⅲ」の沖積段丘面が形成されている。低位の「砂礫投丘Ⅲ」面には雫石川の河道変遷に伴う４期にわたる旧河道が確認されている。文献資料によれば、志波城は雫石川の水害が原因で廃絶したとされており、発掘の結果からも志波城北辺部分は雫石川の旧河道によりきられて消失していることが確認されている。さらに小河川の河道痕跡が網目状に入り組んでおり、小規模な自然堤防状の微高地を形成する。本遺跡を含めた古代遺跡の多くは「砂礫段丘Ⅲ」面の微高地や扇状地の縁辺部に位置している（註１）。



第２図　地形分類図



第３図　周辺の遺跡図

第１表　周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	種別	時　代　／　備　考	No.	遺　跡　名	種別	時　代　／　備　考
1	細田	散布地	平安／土師器	63	高館	集落跡	縄文／縄文土器(中)・石器
2	松ノ木	集落地	平安／土師器	64	大柳Ⅰ	散布地	古代／土師器・須恵器
3	ハツロ	散布地	古代／土師器／住居跡	65	大柳Ⅱ	散布地	古代？／土師器
4	八掛	集落跡	古代／土師器／住居跡／土坑	66	館野前	散布地	縄文／縄文土器(後)
5	太田蝦夷森古墳	古　墳	奈良／土師器／刀・玉／和同開弥	67	飯岡山館	城館跡	中世
6	館	集落跡	平安／土師器／住居跡／城館跡／堀	68	飯岡赤坂	散布地	古代
7	上野屋敷	散布地	古代／土師器	69	いたこ塚	祭祀跡	近世
8	畑中	集落跡	古代／土師器	70	赤坂Ⅱ	散布地	平安？／土師器
9	小沼	集落跡	平安／土師器・緑粕陶器／住居跡	71	羽場館	城館跡	中世／空堀
10	一本木	集落跡	平安／土師器／住居跡	72	羽場百目木	散布地	縄文／縄文土器(中)
11	五兵衛新田	集落跡	古代／土師器	73	砂子塚	散布地	古代／小塚
12	天沼	集落跡	古代／土師器	74	アイノ野	散布地	縄文／縄文土器(晩)
13	竹鼻	集落跡	古代／土師器	75	因幡	散布地	縄文・古代／縄文土器・土師器
14	志波城	城柵跡	平安／土師器／掘立柱建物跡／門跡	76	木節	集落跡	平安
15	田月	集落跡	古代／土師器／住居跡	77	福千代	集落跡	奈良
16	竹花前	集落跡	古代／土師器・線粕陶器／住居跡	78	二又	散布地	古代／土師器・須恵器
17	新堀端	城柵跡	縄文・古代／縄文土器(晩)土師器	79	内村	集落跡	平安／土師券・常滑
18	石仏	集落跡	古代／土師器	80	中屋敷	散布地	古代／土師券
19	田中	散布地・	平安／土師器	81	藤島Ⅰ	集落跡	縄文・古代／縄文土器・土師器
20	林崎	集落跡	平安／土師器／掘立柱建物跡	82	深淵Ⅰ	集落跡	平安／住居跡
21	小幅	集落跡	平安／土師器／住居跡／堀	83	高屋敷	散布地	古代／住居跡
22	大宮	集落跡	古代・中世／土師器／住居跡	84	法領権現塚	祭祀跡	時代不明
23	大宮北	散布地	平安／土師器／住居跡／土坑／溝跡	85	飯岡林崎Ⅱ	集落跡	古代／土師器・須恵器・硯／住居跡
24	鬼柳Ａ	集落跡	古代／土師器	86	飯岡林崎Ⅰ	集落跡	平安／土師器
25	小林	集落跡	古代／土師器	87	上新田	集落跡	平安／土師器／住居跡
26	水門	集落跡	古代／土師器	88	深淵Ⅱ	集落跡	平安／住居跡
27	上越場	集落跡	古代／土師器	89	上新田Ⅰ	集落跡	平安／住居跡／上新田と重複
28	宮沢	散布地	平安／溝状遺構	90	下久根Ⅰ	散布地	縄文・古代／縄文土器・土師器
29	本宮熊堂Ａ	散布地	縄文／縄文土器(晩)／住居跡等	91	石持	散布地	古代／土師器・須恵器
30	本宮熊堂Ｂ	集落跡	奈良～近世／土師器／住居跡／土坑	92	高屋敷Ⅱ	散布地	平安／土師器・須恵器
31	鬼柳Ｂ	集落跡	古代／土師器	93	酉	集落跡	平安／土師器／住居跡
32	稲荷	集落跡	古代／土師器・須恵器／溝跡	94	西田	集落跡	平安／須恵器
33	鬼柳Ｃ	集落跡	古代／土師器	95	下久根Ⅱ	散布地	縄文・古代／縄文土器
34	野古Ａ	集落跡	古墳末平安／土師須恵／住居溝跡土坑	96	熊堂Ⅰ	集落跡	縄文・古代／縄文土器・土師器
35	野古Ｂ	散布地	古代／土師器	97	松島	集落跡	古代／土師器・須恵器
36	台太郎	集落跡	奈良～近世／土師器／住居跡／溝跡	98	熊堂Ⅲ	集落跡	平安／土師器・須恵器／住居跡
37	矢盛	集落跡	平安／土師器／住居跡／土坑／溝跡	99	熊堂Ⅱ	集落跡	平安／土師器・須恵器／住居跡
−38	蟹沢下	散布地	古代／土師器	100	田中	集落跡	平安／土師器・須恵器・石器
39	ニッ沢	散布地	縄文・古代／土器(中・後)／土師器	101	南谷地	集落跡	平安／土師器・須恵器／住居跡
40	小和田館	城柵跡	中世／堀／郭	102	夕覚	散布地	古代／土師器
41	蟹沢	散布地	縄文・古代／縄文土器・土師器	103	株屋	集落跡	古代／土師器・須恵器
42	ヘビ堂	散布地	縄文・古代／縄文土器・土師器	104	葛本	散布地	古代／土師器・石器
43	オミ坂	散布地	縄文・古代／縄文土器・土師器	105	新井出Ⅰ	散布地	古代／土師器・須恵器
44	大ケ森	散布地	縄文・古代／縄文土器・土師器	106	新井出Ⅱ	散布地	古代／土師器・須恵器
45	辻屋敷	集落跡	古代／土師器	107	新田	集落跡	平安／土師器・須恵器
46	西田Ａ	集落跡	古代／土師器	108	間渡Ⅰ	散布地	古代／土師器
47	上越場Ｂ	集落跡	古代／土師器	109	下羽場	集落跡	平安／土師器・須恵器・緑釉陶器
48	西田Ｂ	集落跡	古代／土師器・須恵器	110	下湯沢	散布地	古代／土師器・須恵器
49	前田	集落跡	古代／土師券	111	大島	散布地	古代／土師器・須恵器
50	向中野館	城柵跡	古代／土師器中世／堀／土塁	112	湯壷	散布地	縄文／縄文土器(晩)・石器
51	細谷地	集落跡	平安／土師器／住居跡・陥穴／溝	113	湯壷経塚	経　塚	中世／常滑
52	南仙北	集落跡	縄文・古代／縄文土器・土師器	114	後島	散布地	縄文／縄文土器・石器
53	向中野幅	集落跡	古代／土師器	115	湯沢	散布地	縄文／縄文土器(前・中・後)
54	飯岡沢田	集落跡	古墳末～中世／土師須恵／古墳周溝環濠住居	116	島	墳　墓	時代不明／小塚
55	飯岡才川	集落跡	平安／土師須恵／円形周溝掘立柱建物跡住居	117	小田Ⅰ	散布地	古代／土師器
56	中村	散布地	平安／土師器・須恵器	118	間渡Ⅱ	散布地	古代／土師器・須恵器
57	月見山	散布地	縄文・古代／土師器	119	間渡Ⅲ	散布地	平安／土師器・須恵器
58	山中	散布地	縄文・古代／縄文土器・土師器	120	森子	散布地	古代／土師器
59	飯岡館	城柵跡	中世・縄文／縄文土器(中)／空堀	121	小田Ⅱ	散布地	平安／土師器
60	堤	散布地	縄文・古代／縄文土器／土師器	122	湯沢大館	城館跡	古代～中世／土師器・須恵器
61	高館古墳群	古　墳	奈良～平安／土師器・蕨手刀	123	洛沢	散布地	古代／土師器
62	藤島Ⅱ	散布地	平安？／土師器	124	盛岡城	城館跡	中世～近世／瓦・陶磁器／その他

3　周辺の遺跡

盛岡市内における遺跡は、岩手県遺跡台帳平成７年度によれば、521箇所余が登録されている。第３図は本宮熊堂Ｂ遺跡周辺の主な遺跡の分布を示したものである。これらの遺跡分布状況を見ると、雫石川左岸と右岸では相対的な様相を示している。左岸の台地上には、大館遺跡群をはじめとする縄文時代の集落群が数多く分布している。それに対し右岸の低位段丘面上には、縄文時代の遺構は陥し穴状遺構が散在する程度となり、僅かに本宮熊堂Ａ遺跡から縄文時代晩期の竪穴住居跡が発見されたにすぎない。しかし、古代の遺跡は多く、八掛遺跡などの８世紀時代の集落跡や太田蝦夷森古墳群、803年に造営された古代城柵である志波城や林崎遺跡などの集落跡が数多く分布している。

このような遺跡の分布域の相違は立地する地形面と大きく係わるものと考えられる。遺跡周辺の沖積面は、雫石川の度重なる氾濫や流路の変更によって、旧河道や自然堤防が入り込む地形であり、地図上でも水田の区割り等から読み取ることができる。遺跡の周囲は、近年の盛岡南新都市計画整備事業により、宅地整備や道路建設などの区画整理がめざましく進み、従来の水田や自然堤防上に立地する畑や集落などの田園の景観が変わりつつある。以下は平成16年発掘調査が行われた周辺遺跡の発掘概要である(平成16年度発掘調査報告書による)。

（14）志波城跡

本遺跡の北西約２kmに位置する太田方八丁遺跡は、昭和51・52年に東北縦貫自動車道建設に伴う調査が行われた。その後に盛岡市教育委員会による範囲確認調査を経て、所在地が不明であった古代城柵『志波城跡』と認定された。昭和55年度から59年度に亘る５カ年計画による発掘調査によって、陸奥の国最北端の城柵跡としての独自性が明らかになり、昭和59年に国指定史跡となった。発掘調査は昭和55年から毎年継続して行われており、平成17年度迄に第97次調査を数えている。平成５年度からは史跡保存整備事業も着手され、櫓および築地塀の復元工事が行われている

（29）本宮熊堂Ａ遺跡

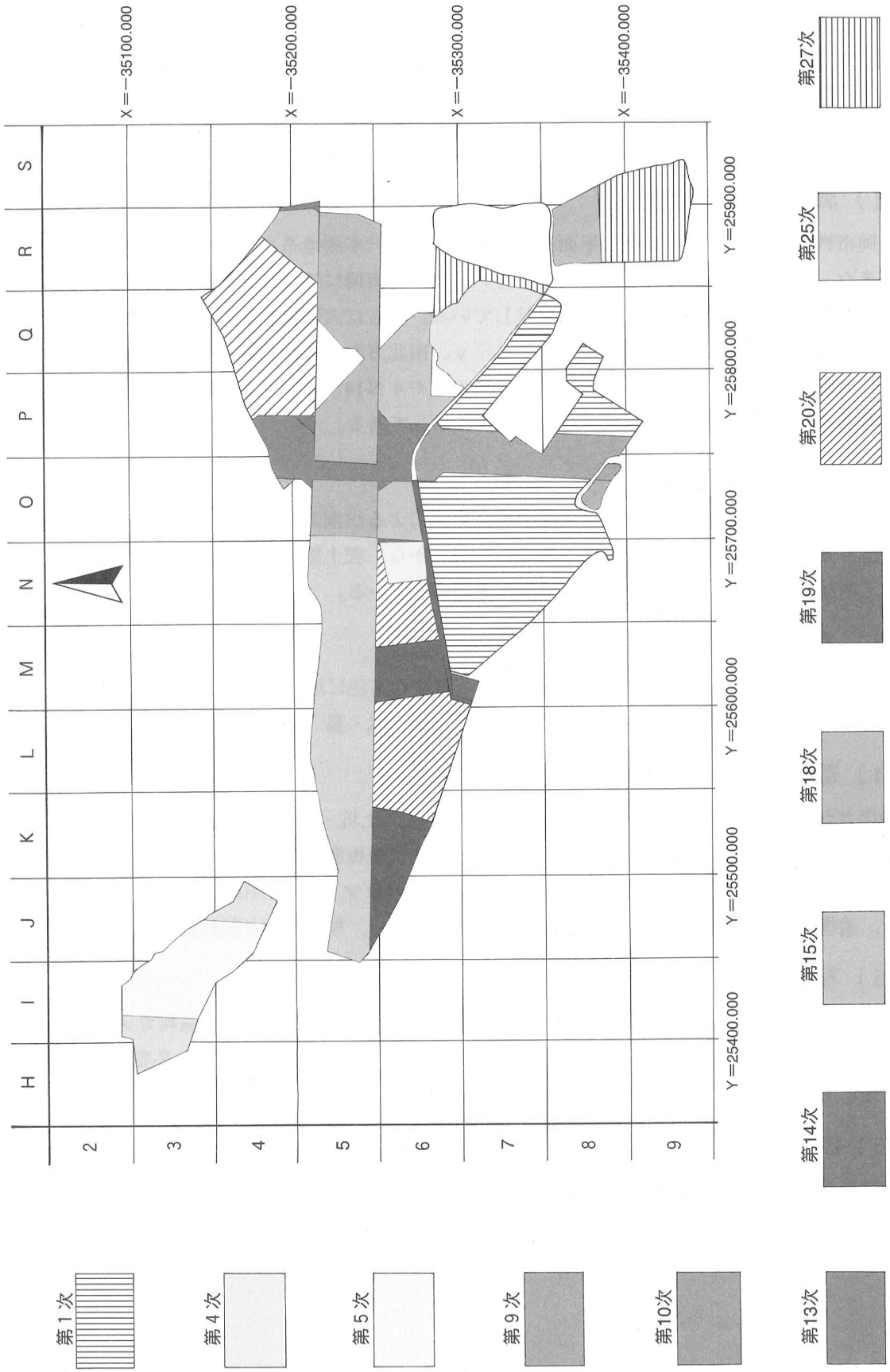
盛岡市の南西部、JR仙北町駅の西約1.5㎞に位置し、雫石川右岸の標高123m前後の河岸段丘上に立地している。調査前は宅地跡であった。平成16年度の調査は第24・26次調査を数える。26次調査の検出遺構は竪穴住居跡（縄文晩期後葉)、土坑、集石土坑、焼土跡、溝跡である。出土遺物は、縄文土器（甕・壷・台付浅鉢・浅鉢)、土製品（土偶・土版・耳栓)、石器（石鏃・石匙・石錐・箆状石器）等多種にわたる。第24・26次調査の旧河道から動植物遺体を検出している。

（36）台太郎遺跡

盛岡市の南西部、JR仙北町駅の南西約900mに位置し、雫石川右岸の標高120m前後の河岸段丘上に立地している。調査前は水田、畑地、道路と宅地であり、建物の基礎や配水管工事の影響等で遺構の残存状態はあまりよくなかった。平成16年度の調査は第53・54次調査を数える。検出遺構は竪穴住居跡（縄文晩期　古墳末～平安時代)、住居状遺構、土坑、溝跡、井戸跡、柱穴状土坑である。出土遺物は、縄文土器、土師器や須恵器などの土器（関東系土師器1点有)、中～近世の陶磁器、鉄製品（紡錘車・鉄鏃)、土製品（紡錘車・勾玉)、石器・石製品（石鏃・敲磨器類・紡錘車）などである。

（34）野古Ａ遺跡

盛岡市の南西部、JR仙北町駅の南約1.5㎞、雫石川右岸の標高124m前後の河岸段丘上に位置する。調査前は主に宅地や畑地として利用されていた。平成16年度は第23・24次調査が行われた。検出遺構は、竪穴住居跡（奈良時代・平安時代)、溝跡及び土坑を検出した。出土遺物は、土師器や須恵器な



第４図　本宮熊堂Ｂ遺跡各次調査全体図

どの土器のほか、鉄製品（鋤鉄・銛先）などがある。平安時代に属する土器の中に墨書・刻書土器も見られた。

Ⅲ　調査の方法と室内整理

1　野外調査の方法

（1）調査区の区制設定

盛岡市教育委員会の方針に準じ平面直角座標第Ｘ系（日本測地系）に合わせてグリッド設定を行った。また、一辺50×50ｍの大区画に区割を行い、北から南側にアラビア数字大１～25を付し、西から東側にアルファベットの大文字Ａ～Ｏを付している。さらに大区画を２×２ｍの625小区画に細分し、東西方向に西からアルファベットの小文字ａ～ｙ、南北方向に北から数字の１～25を与えている。調査区の名称は大区画と小区画の組合せで、４Ｎ１ａや４Ｎ14ｊというように呼称する。調査区内における各基準点と補助杭の成果値は、遺構配置図に示してある。

（2）粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち岩手県教育委員会生涯学習文化課による試掘調査が実施されており、今年度第27次調査区も遺物の分布がある程度把握されていたことから、表土除去と粗掘りは重機を使用することとし、その後に人力（鋤簾掛け）で遺構検出作業を行っている。

（3）遺 構 の 命 名

検出された遺構の命名については盛岡市教育委員会の方法に準じており、下記のとおりに行った。

竪穴住居跡‥‥ＲＡ　住居状遺構‥‥ＲＥ　土　坑・墓　壙‥‥ＲＤ　溝　跡‥‥ＲＧ

（4）遺構の精査と実測

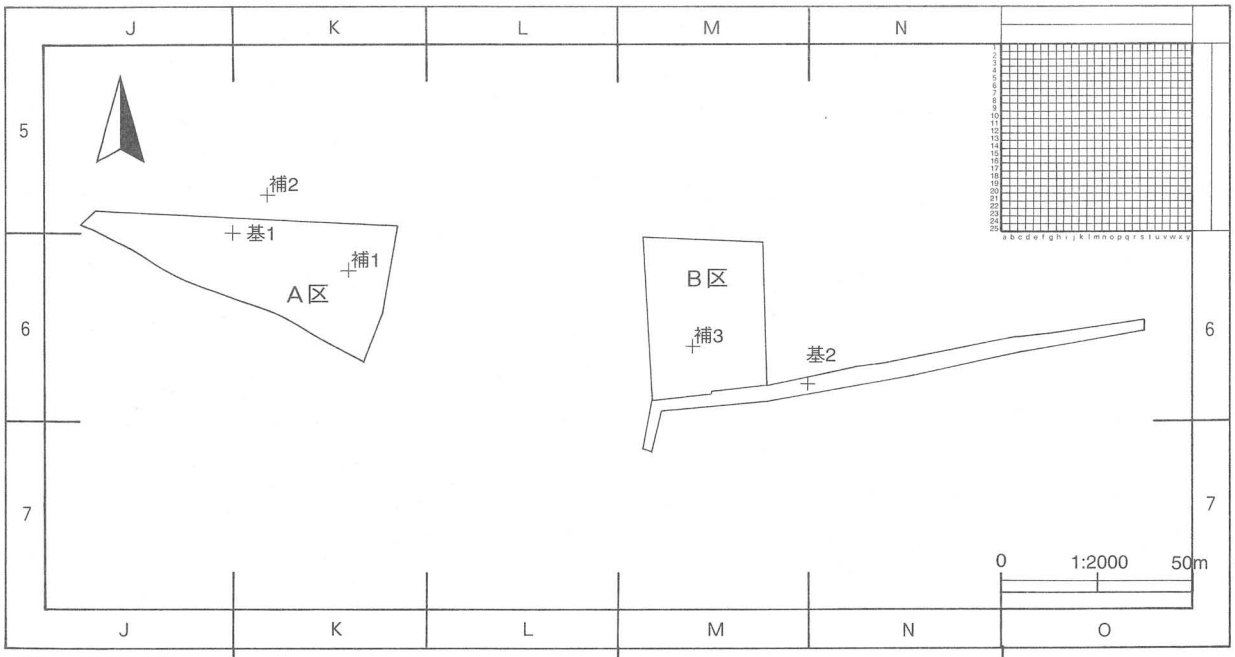
検出された竪穴住居跡・竪穴状遺構の精査は４分法、土坑・墓壙の精査は２分法で実施している。遺跡の平面実測は従来の簡易遣り方測量で行い、溝跡は平板測量を使い平面図を作成した。各遺構の実測図縮尺は、1/20を基本に実測したが、竪穴住居跡のカマド部は1/10、溝跡の平面図は1/40で実測した。遺構内から出土した遺物は必要に応じて番号を付し、写真撮影と記録後に取り上げている。

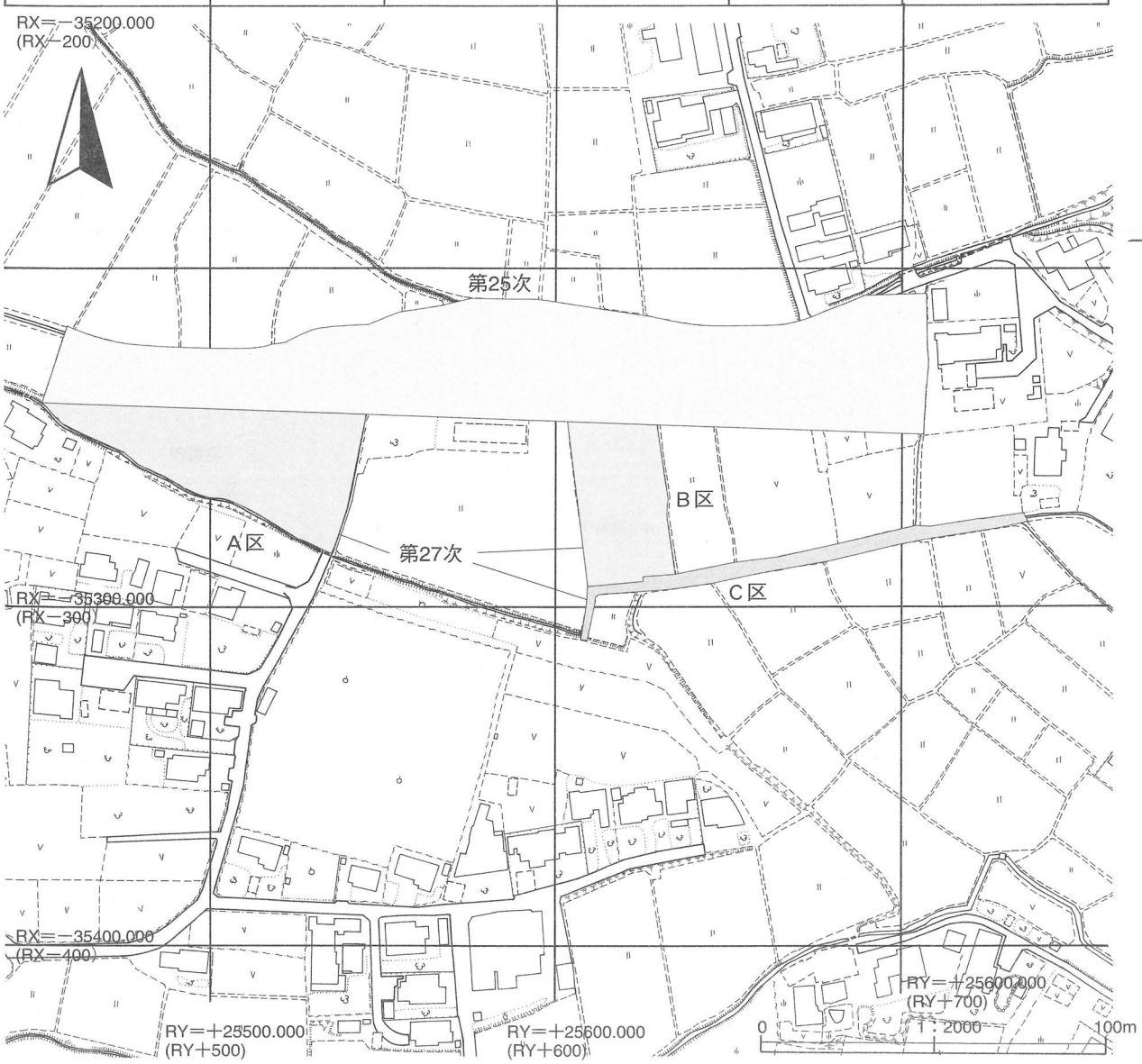
（5）写 真 撮 影

野外調査における写真撮影は、６×７㎝判カメラ１台（モノクロ）と35㎜判カメラ２台（モノクロ・リバーサル）を使用し、遺構検出、遺物の出土状況、断面、掘り上げ等を必要に応じて行っている。他にデジタルカメラ１台をメモ的に活用した。

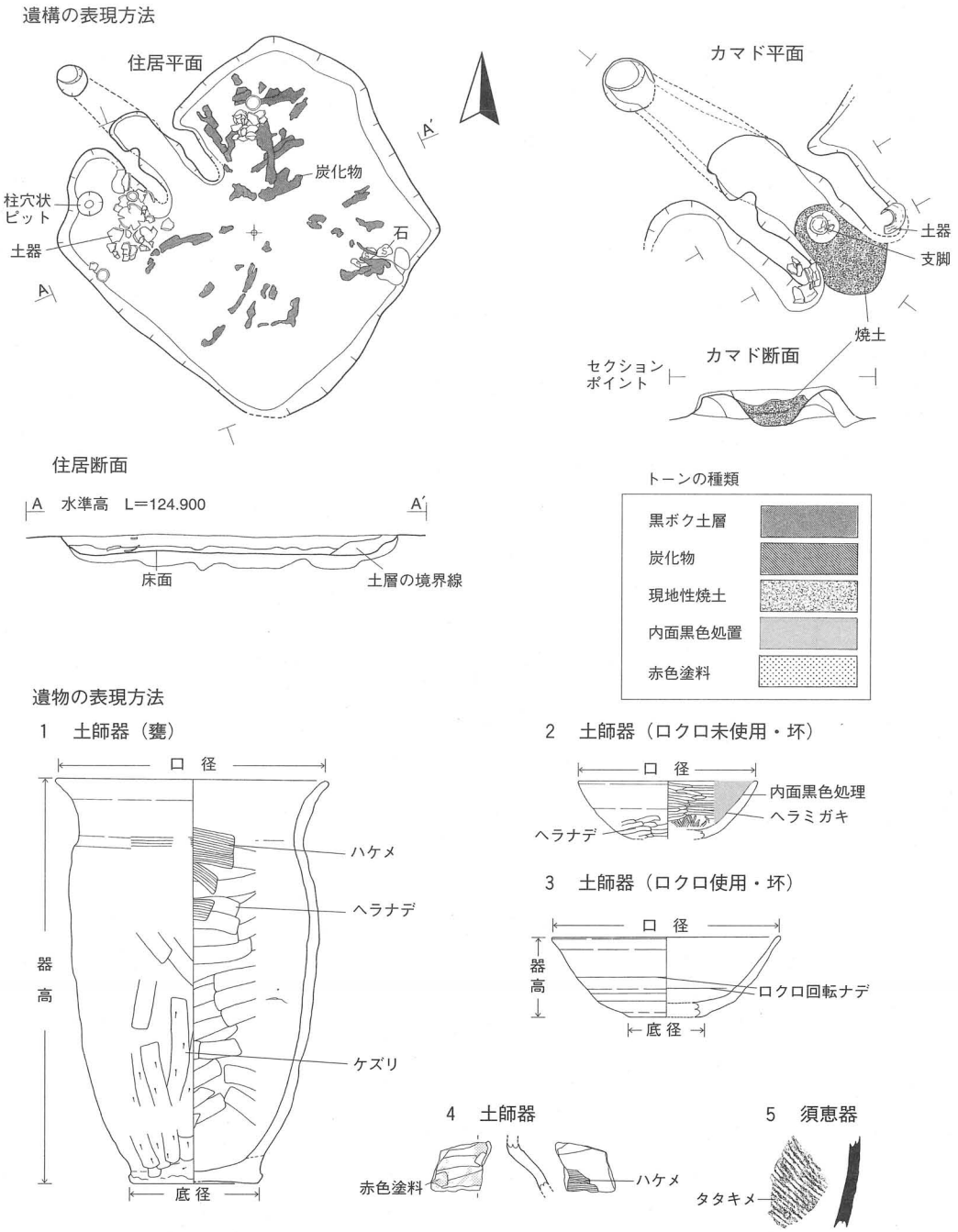
（6）広 報 活 動

啓蒙活動の一環として、平成16年10月30日(土)に第25次調査と合同の現地説明会を行った。





第５図　グリッド配置図・調査区図



第６図　凡例

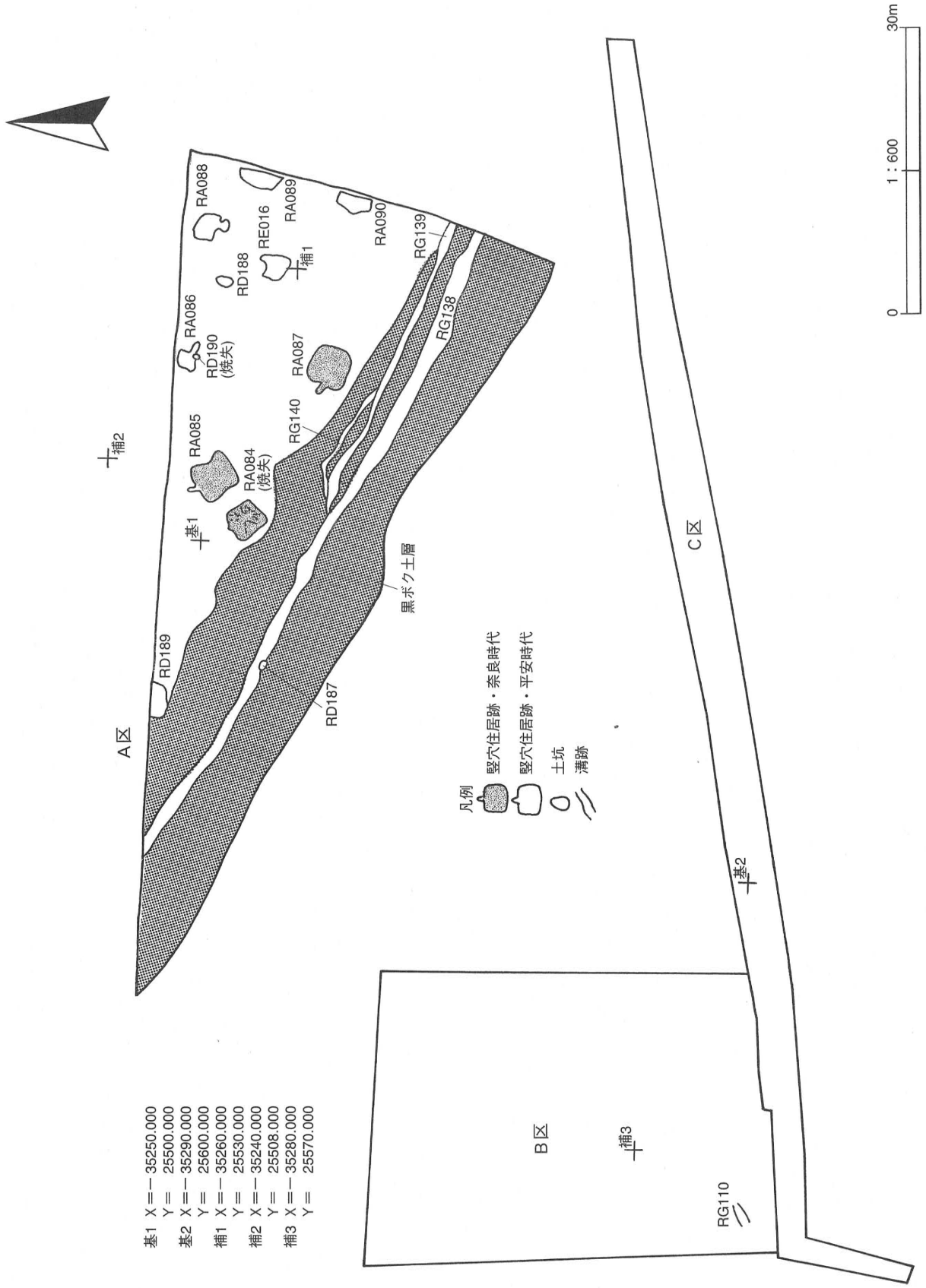
2　室内整理の方法

（1）作　業　手　順

遺物の整理作業は①水洗、②注記、③各遺物の仕分け・登録、④接合復元、⑤拓本、⑥写真撮影、⑦実測、⑧トレース、⑨遺物図版作成の順に行っている。遺構の整理作業は①原図の点検・合成、②第２原図の作成、③トレース、④遺構図版作成の順に進めた。また、これらと並行し各種の計測、分析、原稿の執筆を行った。

（2）遺　構　図　版

各遺構図版は次の縮尺を原則とし、各図面にスケールを付している。遺構配置図は1/600、竪穴住


A区
B区
C区
RA088
RA089
RE016
RA090
RG139
RD188
補1
RA086
RD190
(焼失)
RA087
RG138
RG140
RA085
RA084
(焼失)
補2
基1
RD189
RD187
黒ボク土層
基2
補3
RG110
凡例
竪穴住居跡・奈良時代
竪穴住居跡・平安時代
土坑
溝跡
0
1：600
30m
基1 X＝－35250.000
Y＝ 25500.000
基2 X＝－35290.000
Y＝ 25600.000
補1 X＝－35260.000
Y＝ 25530.000
補2 X＝－35240.000
Y＝ 25508.000
補3 X＝－35280.000
Y＝ 25570.000

第７図　遺構配置図

居ＲＡ・ＲＥは平面・断面1/40、カマドは1/20、土坑及び墓壙ＲＤは平面・断面1/40、溝跡ＲＧは平面1/40・断面1/20である。

（３）遺 物 図 版

掲載遺物図版の縮尺率は、土器・陶器、拓影・石器・鉄製品1/3、銭貨原寸とし、図版に縮尺を掲載している。土器や石器の調整技法等の表現方法は実測凡例に記した。

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

１　基本層序と遺構配置

今次調査区はＡ区、Ｂ区、Ｃ区に分かれるが、遺構・遺物はＡ区に集中する。Ｂ区からは溝１条（ＲＧ110）のみを検出した。Ｃ区に遺構はなく遺物は土器の小破片が２点だけの出土である。したがって、遺構・遺物が集中するＡ区の層序を基本土層として扱うこととした。

Ａ区中央部分の南北に長さは24.5ｍの基本土層ベルトを設定した。

Ⅰ層　砂利、川砂利、砂礫（現表土）

Ⅱ層　7.5YR3/1黒色シルト主体に7.5YR4/6褐色鉄分混入　粘性なし　締り極強（旧表土）

Ⅲ層　7.5YR2/2黒褐色シルト主体に7.5YR4/6褐色鉄分混入　粘性なし　締り強（耕作土）

Ⅳ-１層　10YR2/1黒色シルト　極小砂粒混入　粘性なし　締り強（黒ボク土）

Ⅳ-２層　10YR2/1黒色シルト　極小砂粒混入　十和田ａテフラ溝跡埋土含む　粘性なし　締り強（黒ボク土：検出面）

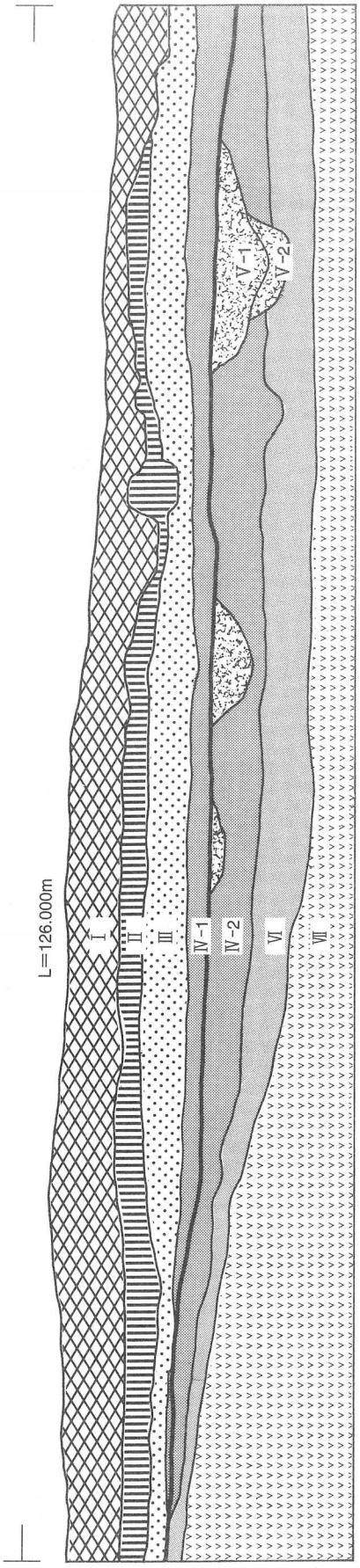
Ⅴ-１層　10YR2/3黒褐色砂質シルト　十和田ａテフラ含む　粘性あり　締り弱（溝埋土）

Ⅴ-２層　10YR3/4暗褐色粘質シルト　10YR2/3黒褐色粘質シルト混合　粘性あり　締り弱（溝埋土）

Ⅵ層　10YR3/3暗褐色粘質シルト　粘性あり　締り強（漸移層）

Ⅶ層　10YR4/6褐色粘質シルト　粘性あり　締り中（地山ローム層：検出面）

Ⅰ層は現表土でアスファルトを剥がした後の砂利である。Ⅱ層は堅く締り鉄分の沈着を含む。旧表土である。Ⅲ層は黒褐色シルトの旧耕作土である。Ⅳ層は黒色シルトに極小砂粒が混入する。いわゆる黒ボク土層である。Ⅳ-２層は十和田ａテフラを含み第１検出面とした。Ⅴ-１層とⅤ-２層は溝跡の埋土である。Ⅵ層は黒ボク土層



第８図　基本層序

から地山ローム層に移行する漸移層である。Ⅶ層は褐色粘質シルトの地山ローム層で第２検出面である。黒ボク土層が存在する面ではⅣ-２層を検出面とし、黒ボク土層が存在しない面ではⅦ層を検出面とした。

層は北から南方向に最大で110㎝の高低差をもって下降する。Ⅳ層黒ボク土が埋土する範囲は河川の浸食により生じた旧河道跡である。

今回の調査では７棟の竪穴住居跡を検出した。３棟が奈良時代の竪穴住居跡、４棟が平安時代の竪穴住居跡である。奈良時代の竪穴住居跡は旧河道の縁辺付近に存在し、平安時代の竪穴住居跡はそれよりも北方向にやや離れ５～30㎝高いところに存在する。奈良時代RA084とRA087の竪穴住居跡は比較的残存状況がよく遺物も多く出土しているが、やや高いところに位置するそれ以外の竪穴住居跡は大きく削平や攪乱の影響を受けていて遺構・遺物の残存は良くない。

２　出土遺物の掲載基準

出土遺物は大コンテナ（40×30×30㎝）で土器６箱である。そのほとんどが土師器で占められ、須恵器または陶磁器は数点である。出土遺物を接合復元し、口縁部または底部が残存し実測可能な遺物を基本的に掲載することとし、体部のみの遺物であっても次の基準に該当する場合は掲載することとした。

①残存率が30％以上であること
②器種等が稀であること
③調整等が際立つこと

掲載した遺物は土師器の立体37点、破片93点、須恵器の破片２点、陶磁器１点、土製品２点、石器は１点、鉄製品７点、古銭６点、計149点である。不掲載遺物量は竪穴住居跡・竪穴状遺構から3,429g、土坑から712g、溝跡から2,824g、合計6,965gであった。遺構外遺物量は表採や攪乱等から2,993gであった。不掲載遺物量は合計で9,958gであった。以上はA区からの出土である。B区の出土遺物はない。Ｃ区の出土遺物は土師器の小破片１点、須恵器の小破片１点、計２点であったが体部の小破片（３～５㎝）であったため不掲載とした。

３　遺 構 と 遺 物

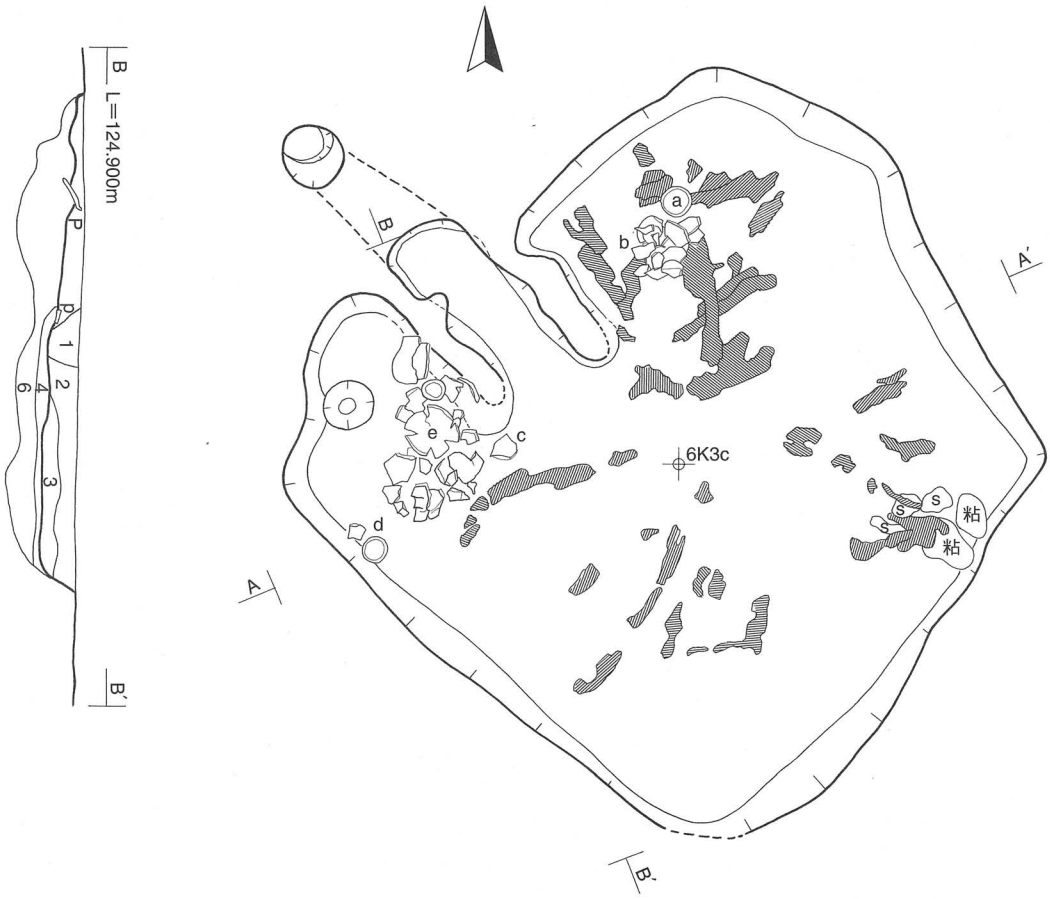
ＲＡ084竪穴住居跡

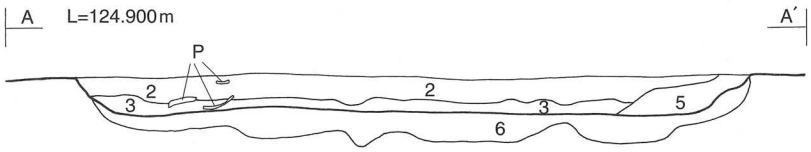
遺　構（第９・10図、写真図版６・７）

Ａ区６Ｋ３ｃに位置する。床面の標高は12.42ｍである。黄褐色ロームでの検出であり埋土はシルトであった。プランの境目は不明瞭であったこととプランの南端部分は、旧河道の黒ボク土と接触するため平面全体の確認が難しく切り合いの可能性も考えられた。よって、トレンチを入れ埋土断面で土層を確認する必要があった。竪穴住居跡の断面位置が中心を大きく外れているのはそのためである。

規模は長径が東西に3.51ｍ、短径は南北に3.1ｍ、深さは最大で35㎝を測る。平面形はほぼ隅丸方形を呈している。埋土は黒褐色シルトと灰黄褐色シルトに大別される。

カマドは北西の壁に設置され、カマドの両袖の先端部分は土器芯材によって構築している。両袖のほぼ中心には、支脚として用いられた甕（10）が伏せた状態で設置してある。煙道の長さは支脚からの1.4ｍで、幅は30～35㎝と推定される。煙出しの径は32～35㎝、深さ42㎝を測る。煙道埋土からは天井部が崩落した焼土を確認している。燃焼部の規模は長径65㎝、短径28㎝、厚さ15㎝を測る。褐色

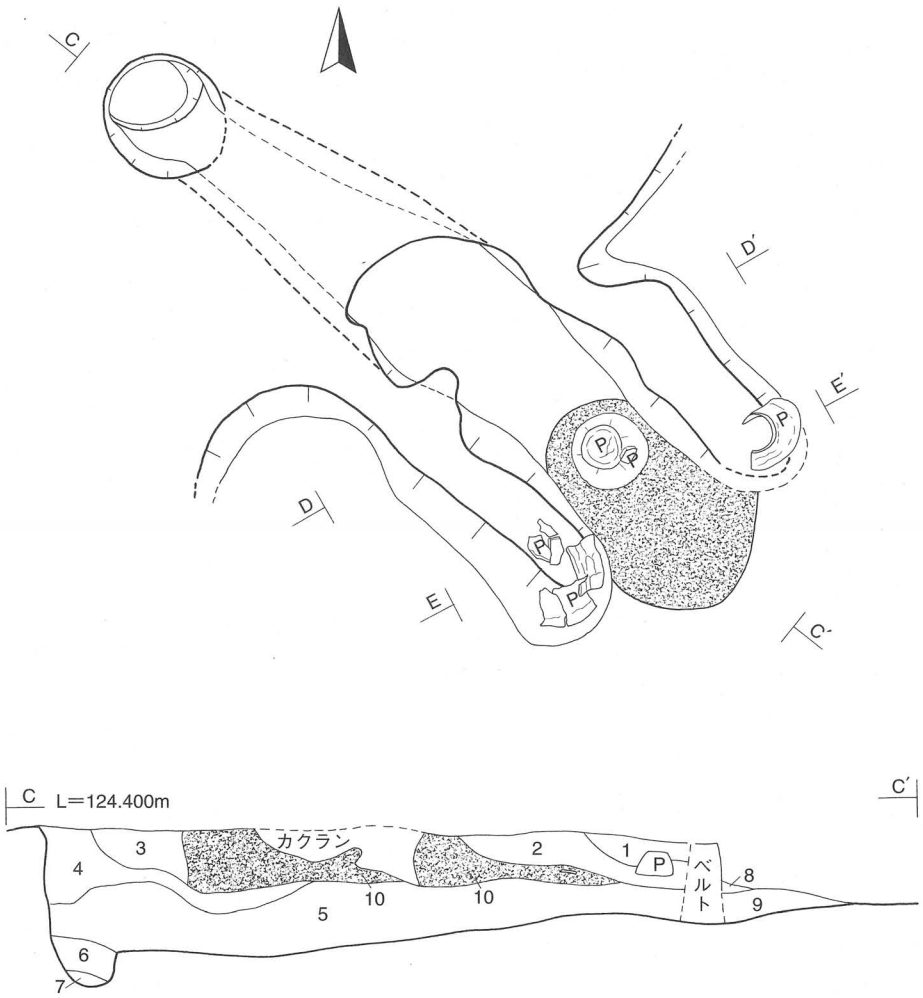




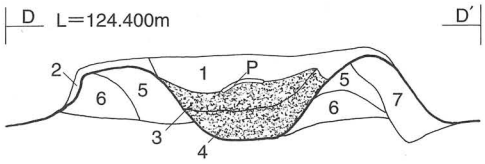
ＲＡ084 A―A′ とB―B′ 共通
1：10YR3/1 黒褐色シルト　微量砂混入　粘性なし　締り強
2：10YR3/2 黒褐色シルト　地山ブロック少量混入　粘性なし　締り強
3：10YR3/2 黒褐色シルト　炭化物・焼土多量混入　粘性ややあり　締り中
4：10YR3/2 黒褐色シルト　地山ブロック・焼土ブロック多量混入　粘性ややあり　締り中
5：10YR4/2 灰黄褐色シルト　焼土ブロック混入　粘性ややあり　締り中
6：10YR4/2 灰黄褐色シルト　粘性ややあり　締り中

0　1：40　1m

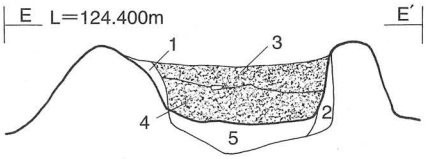
第９図　ＲＡ084竪穴住居跡（１）



R A084 カマドC—C′
1 :7.5YR3/3 暗褐色シルト　焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
2 :10YR3/1 黒褐色シルト　炭化物・焼土・地山ブロック混入
3 :10YR5/4 にぶい黄褐色シルト　褐色シルトブロック混入　粘性なし　締り中
4 :10YR3/1 黒褐色シルト　炭化物・焼土ブロック混入
5 :10YR2/2 黒褐色シルト　炭化物・焼土ブロック多量混入　粘性ややあり　締り中
6 :10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　炭化物混入　粘性なし　締り中
7 :10YR2/1 黒色シルト　炭化物多量混入　粘性なし　締り中
8 :7.5YR4/6 褐色シルト　焼土ブロック混入　粘性ややあり　締り中
9 :7.5YR3/3 暗褐色シルト　炭化物・焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
10:10YR4/2 灰黄褐色シルト　焼土ブロック多量混入　粘性なし　締り中



R A084 カマドD—D′
1 :10YR3/1 黒褐色シルト　炭化物・焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
2 :10YR4/3 にぶい黄褐色シルト　焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
3 :10YR4/2 灰黄褐色シルト　焼土ブロック多量に混入　粘性なし　締り中
4 :10YR2/2 黒褐色シルト　炭化物・焼土ブロック多量混入　粘性なし　締り中
5 :10YR4/6 褐色シルト　炭化物・焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
6 :10YR4/6 褐色シルト　(地山？やや汚れあり)　粘性なし　締り中
7 :10YR3/2 黒褐色シルト　炭化物・焼土多量混入　粘性なし　締り中



R A084 カマドE—E′
1 :7.5YR4/3 褐色シルト　焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
2 :7.5YR3/4 暗褐色シルト　焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
3 :7.5YR3/3 暗褐色シルト　焼土ブロック混入　粘性なし　締り中
4 :7.5YR4/6 褐色シルト　焼土ブロック 混入　粘性ややあり　締り中
5 :7.5YR3/3 暗褐色シルト　炭化物・焼土ブロック混入　粘性なし　締り中

0　1：20　50cm

第10図　R A084竪穴住居跡（2）

砂質シルトの床面は堅く締っている。床面には40個程度の炭化材（ケヤキ・ナラ）が中央から隅の方向に散乱して検出された。年輪が確認できるほどの材で、散乱の様子から焼失住居跡であると思われる。また、住居跡の東壁際に灰白色の粘土塊が２つ検出されたが詳細は不明である。

出土遺物（第11～14図、写真図版19～21）

遺物はカマド付近から集中し土器類が多く出土している。甕が15個、坏が４個、破片が３点である。他に土製紡錘車１点が出土している。

１はカマド袖左付近の床直上より出土した土師器球胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、口唇部をヨコナデで、頸部に明瞭な２本の稜線が巡っている。外面体部上半の調整はミガキで、内面が回転ナデである。底部に木葉痕がある。遺物の中で最も大きい土器であり、輪積痕から３回に分けて成形されたものと思われる。

２はカマド袖右付近の床直上より出土した土師器球胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存する。口縁部はヨコナデでほぼ直角に屈曲し立ち上がり、３本の稜線を持つ。外面上半部の調整はハケメである。輪積痕が２ヶ所に見られ、数回に分けて成形したものと思われる。

３はカマド煙道埋土から出土した土師器球胴甕である。体部から底部にかけての剥片である。外面体部に僅かにヘラナデ調整が見られ、胎土は粗い。底部は木葉痕である。

４はカマド周辺から出土した土師器球胴甕である。体部から底部にかけての剥片である。外面体部にハケメが、内面にヘラナデ調整が見られ、胎土は粗い。底部は木葉痕である。

５はカマド袖左付近から出土した土師器長胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、調整は内外面ともにヘラナデである。胎土は粗く、外面にはススが内面にはコゲが付着する。

６は土師器長胴甕で、口縁部から体部下半にかけて残存する。調整は外面がケズリで内面はヘラナデである。器厚は他の土師器に比べ厚く、胎土・焼成共に良好である。土器は伏せた状態でカマド右袖の芯材として使用されていた。

７は唯一の土師器鉢で、カマド左袖付近から出土している。頸部から肩部にかけて明瞭な段を持ち、外面はケズリの調整である。内面はヘラナデの後に指で押した押捺痕の調整が見られる。

８はベルト埋土から出土した土師器小甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、内外面ともに明瞭なハケメ調整を施している。器厚は薄い。

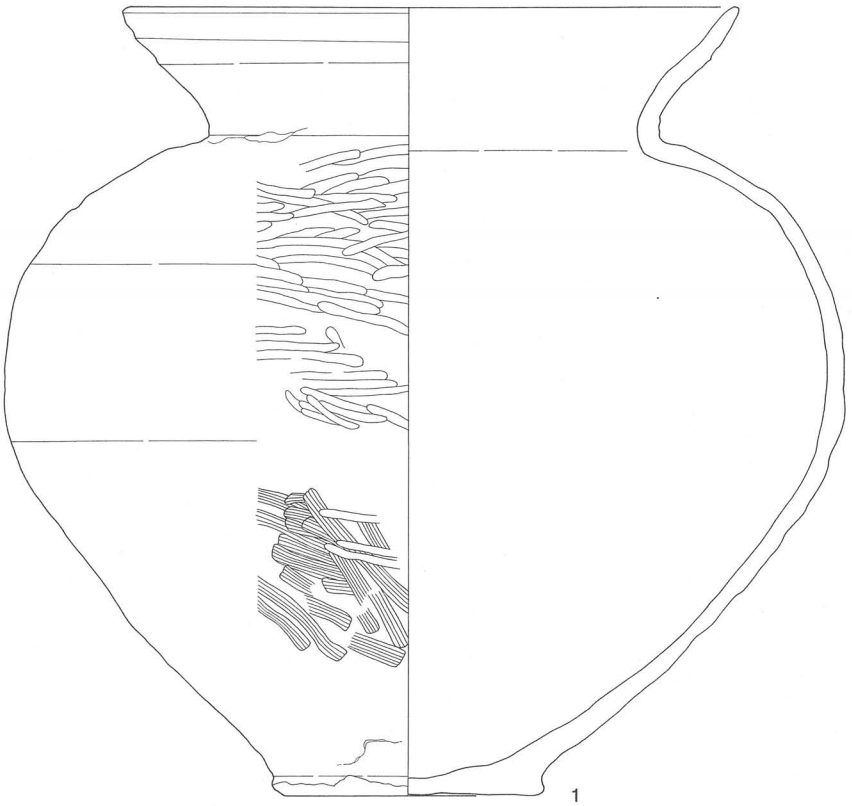
９はベルト埋土中から出土した土師器小甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存している。調整は内外面ともにハケメである。器厚は薄く、胎土はかなり粗い。外面にスス付着。底部に押圧痕がある。

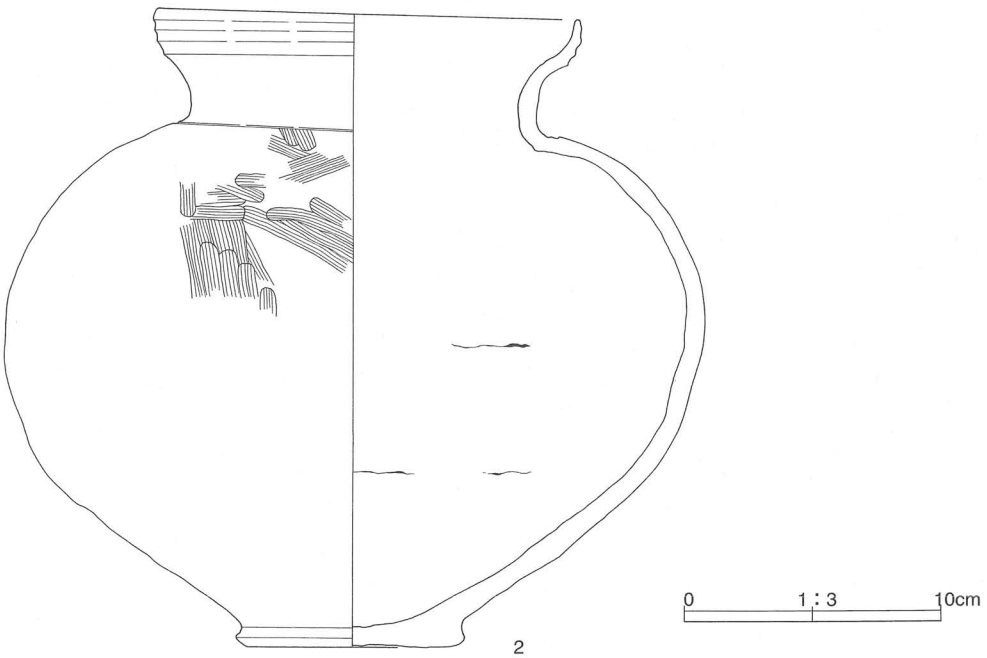
10は土師器甕である。体部下半から底部にかけて残存し、内外面ともに調整はハケメである。器厚は最大で1.7㎝あり、胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。カマド中央から伏せた状態で出土したことから支脚に転用使用されたものと思われる。

11は土師器甕で、口縁部から体部上半にかけて残存する。頸部はヨコナデ調整が施され体部との境目に段を持つ。外面はハケメ、内面はヘラナデの調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。カマド左袖傍からの出土で、芯材に使用された可能性もある。

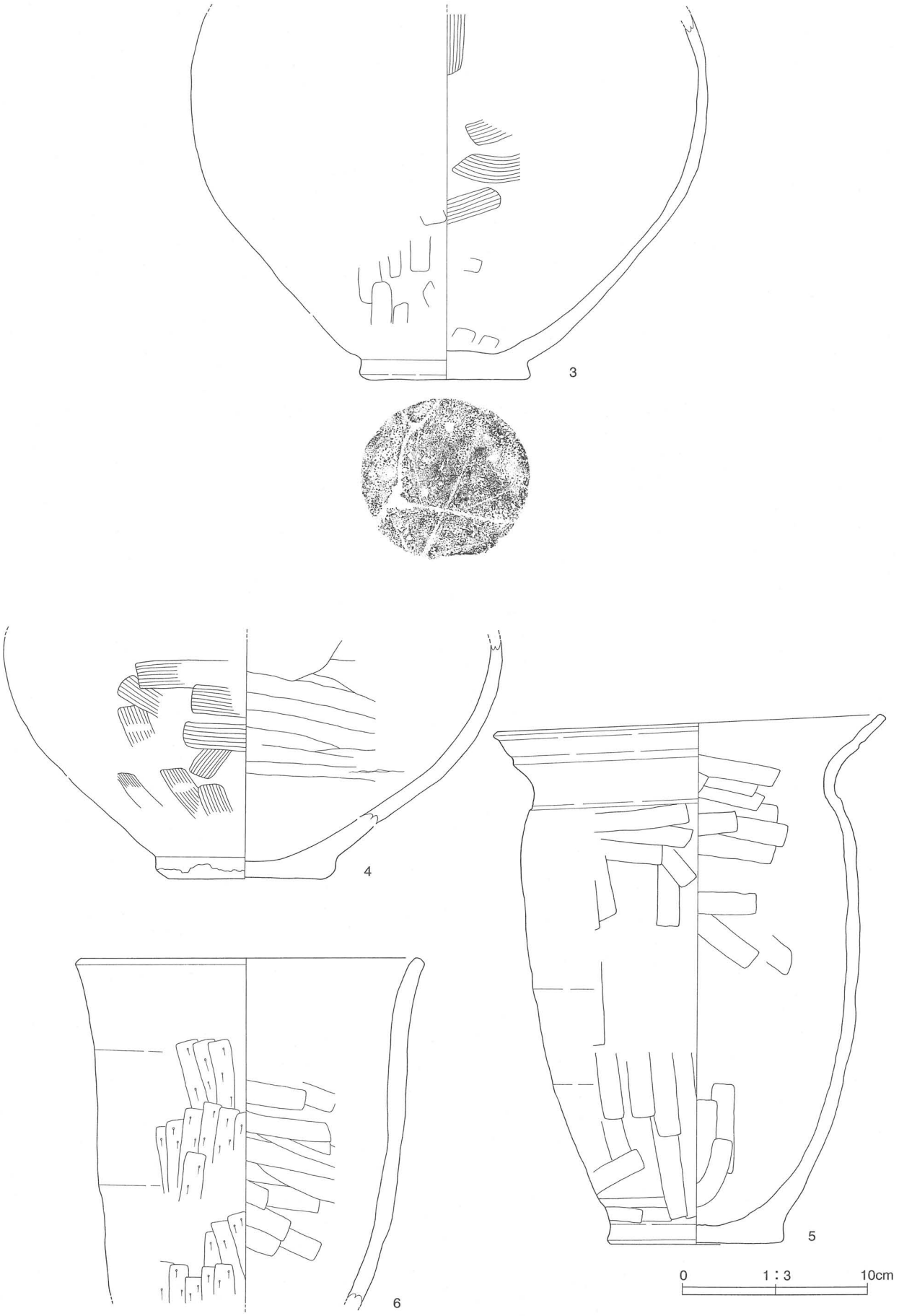
12は土師器長胴甕で、口縁部から体部までの1/3が残存する。頸部から体部の境目に明瞭な沈線を有する。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。外面にはススが、内面にコゲが付着する。カマド左袖からの出土で、煮炊きに使用された後に芯材として転用されたものと思われる。

13はベルト埋土から出土した土師器甕である。口縁部から体部までの1/3が残存する。頸部から体

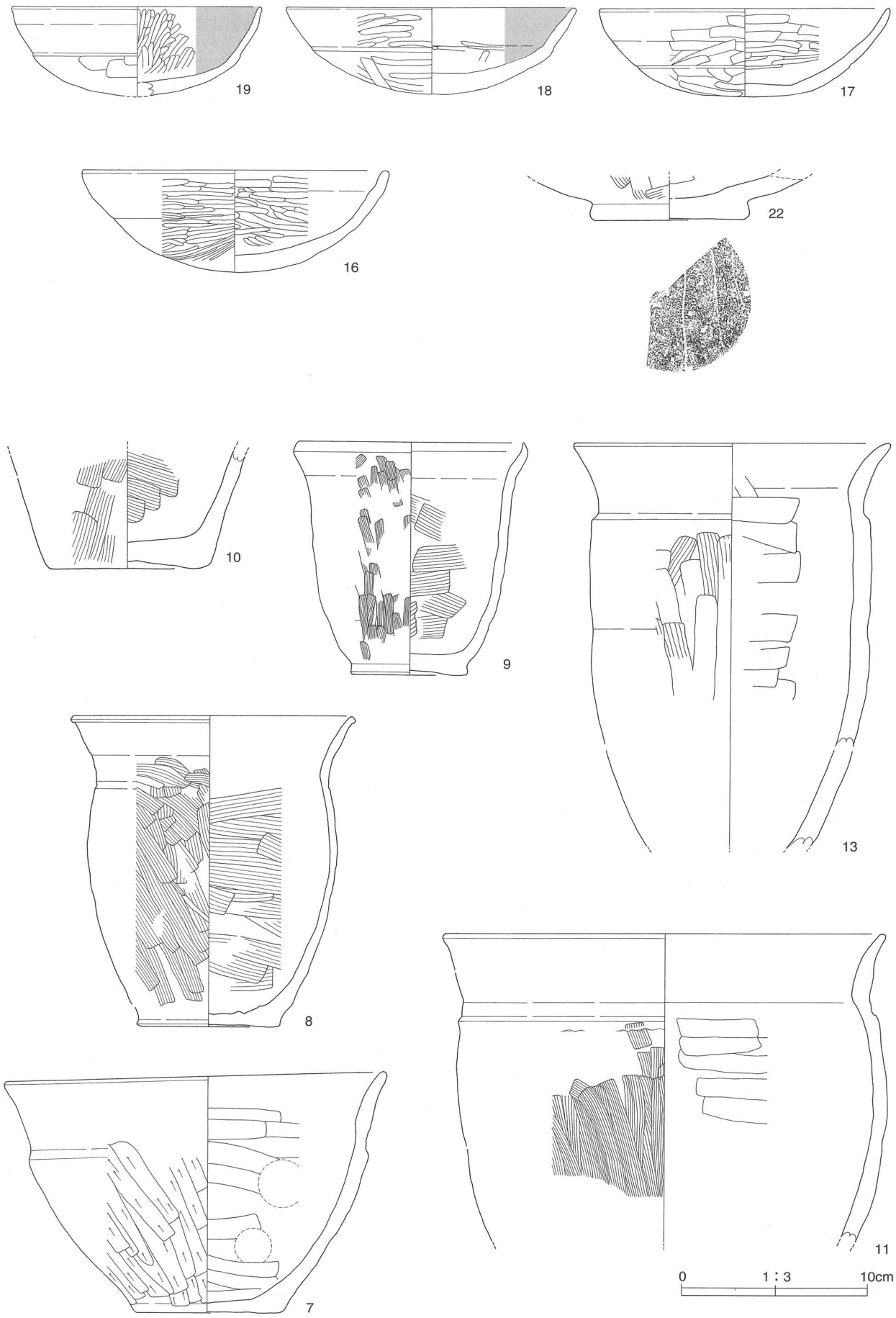




第11図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（１）



第12図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（２）



第13図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（３）

部の境目に明瞭な段を有し、外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。外面にスス、内面にコゲが付着する。

14・15は土師器甕で口縁部から体部までの1/5が残存する。頸部から体部の境目に明瞭な段を有し、内外面ともにハケメ調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。14は南西埋土、15は北西埋土上層からの出土である。

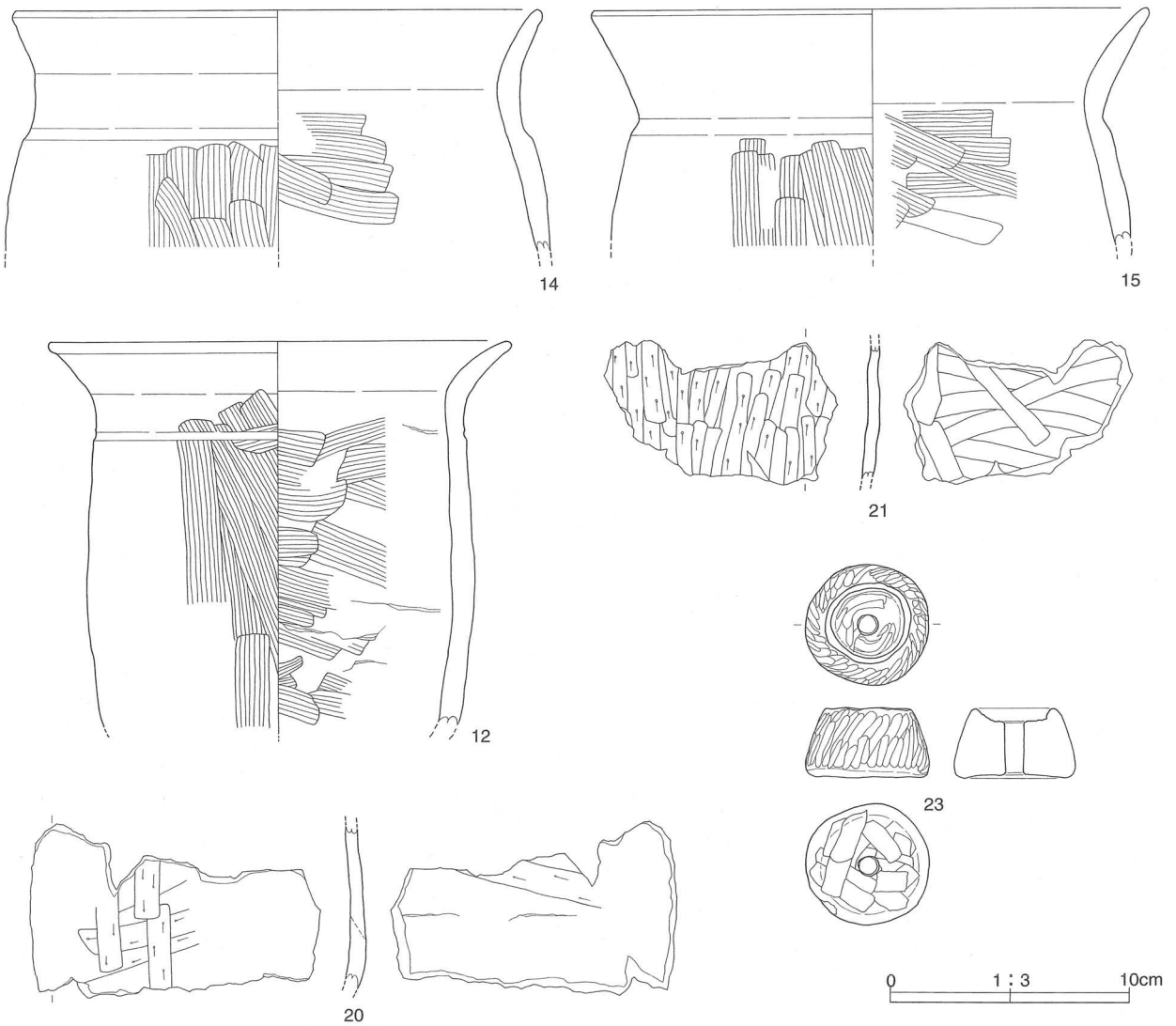
16～19は土師器坏で、口縁部から底部にかけて良好に残存する。17～19は外面に緩い段を有し、内外面はミガキまたはヘラナデ調整後、内面は黒化処理されている。すべて丸底である。胎土は粗いものが目立ち、特に18はスコリアを含む。カマド付近南壁端からの出土である。

20・21は土師器甕体部破片で、内外面ともにケズリ調整である。断面と内面に輪積痕が見られる。胎土は粗く焼成は良くない。カマド埋土からの出土で、20と21同一個体と思われる。

22は土師器甕底部破片である。外面には僅かにヘラナデ調整、断面には輪積痕が見られる。底部は木葉痕がある。胎土は粗い。ベルト埋土から出土している。

23はカマド付近南壁際床直から出土した土製紡錘車である。円錐台形をしており中央部に径8㎜の穿孔を有する。側面には細かなミガキ調整が施され、底部にヘラナデ調整痕が見られる。

所属時期　住居形態や遺物から７世紀末～８世紀前半の奈良時代と考えられる。



第14図　ＲＡ084竪穴住居跡出土遺物（４）

ＲＡ085竪穴住居跡

遺　構（第15図、写真図版８）

Ａ区６Ｋ１eに位置する。床面の標高は125.51ｍである。黄褐色ロームでの検出であり埋土は褐色シルトである。この竪穴住居跡は周りより約20㎝高い場所に位置することから壁は削平され３～10㎝残存するのみである。また、東端は攪乱を受け一部破壊されている。

規模は長径が4.1ｍ、短径が3.8ｍ、深さは最大で10㎝を測る。平面形は隅丸方形を呈している。埋土は暗褐色シルト単層である。床面はやや締まった黄褐色粘土質土で、10個の小ピットを有するが用途は不明である。

カマドは北西の壁に設置されているが、煙道を僅かに残すのみで本体部と袖は削平され、燃焼部焼土のみが存在する。燃焼部焼土の厚さは最大８㎝を測る。煙道の長さは1.1ｍ残存している。

出土遺物（第16図、写真図版21）

南に寄った床上から残存が良好な甕が出土している。

24は西側埋土下層から出土した鋤先である。1/4程度残存し、表裏ともに腐食が著しく錆が浮き上がっている。装着部の内側にＶ字状の溝が浅く巡り、長さは10.5㎝、幅が3.0㎝、重さ32.9ｇである。

25はベルト埋土から出土した鋤先で、1/5程度残存する。長さは6.5㎝、幅が3.2㎝、重さ25.4ｇである。装着部の内側にＶ字状の溝が浅く巡ることから本体の横部と思われる。26と同一個体の可能性がある。

26は鋤先で、1/5程度残存する。長さは7.0㎝、幅3.2㎝、重さ29.6ｇである。表裏ともに腐食が著しく錆が浮き上がっている。装着部の内側にＶ字状の溝が深く巡ることから先端部と思われる。25と同一個体の可能性がある。

27は床直上から出土した土師器甕である。口縁部から体部下半が残存し、頸部と体部の境目に明瞭な段を有する。外面はハケメを中心にヘラナデが混在する。内面は工具で押しつけた後に指で撫で最後にハケメで調整した痕が見られる。器厚は薄く、体部に黒班が吸着している。

28は土師器坏体部破片で、体部と底部の境目に明瞭な段を有し、外部の段の上はヘラナデ、段の下はケズリ調整である。内面は黒色処理され細かなミガキ調整が縦に入る。器厚は厚く、胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。

29は土師器坏体部破片である。内外面ともにミガキ調整で内面は黒化処理されている。

30は埋土から出土した土師器甕底部の破片である。外面はヘラナデ調整を施している。

31は土師器甕口縁部破片で、内外面ともにヨコナデ調整である。

32は土師器体部破片である。外面はヨコナデ、内面はケズリ調整で、外面には赤色顔料が付着し、内面に化粧土が施されている。胎土は粗く焼成は不良である。33と同一個体と思われる。

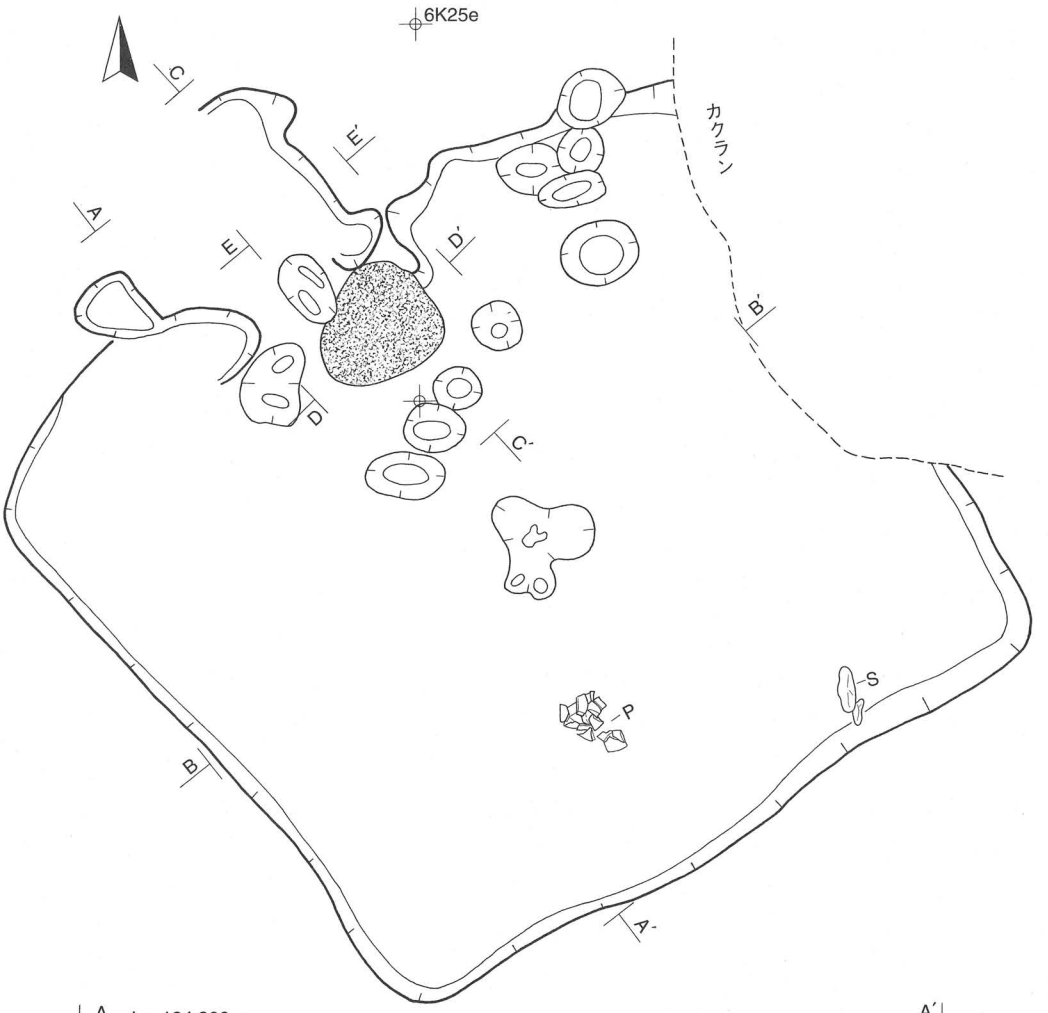
33は土師器体部破片である。外面はヨコナデ、内面はケズリ調整である。外面には赤色顔料が付着し、内面には化粧土が施されている。32と同一個体と思われる。

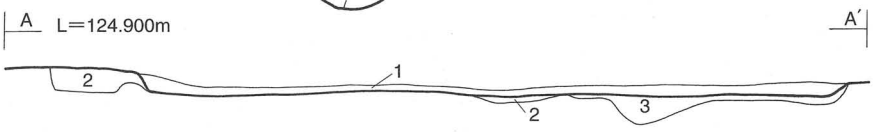
所属時期　住居形態や遺物から７世紀末～８世紀前半の奈良時代と考えられる。

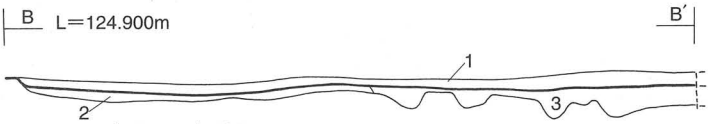
ＲＡ086竪穴住居跡

遺　構（第17図、写真図版９）

Ａ区５Ｋ25ｌに位置する。床面の標高は125.10ｍである。黄褐色砂質シルトで検出され、埋土は褐色シルトの単層である。このエリアは削平されている上に激しく攪乱されており、残存するのは煙道の一部と床面の一部だけであった。床面は黒色シルトで極小砂粒を含み堅く締まっている。

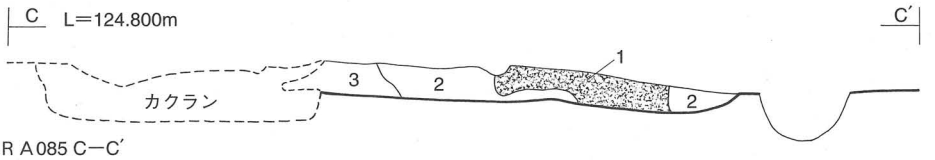




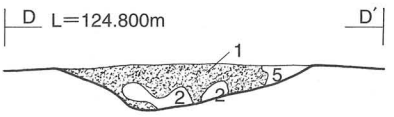


R A085 A—A′ とB—B′ 共通
1 :10YR3/3　暗褐色シルト　炭化物混入　粘性なし　締り中
2 :10YR5/6　黄褐色粘質シルト　褐色シルト少量混入　粘性ややあり　締り中
3 :10YR5/8　黄褐色粘質シルト　粘性ややあり　締り中

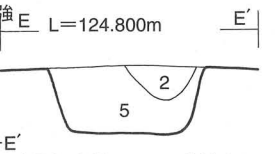
住居平・断面
0　1：40　1m



R A085 C—C′
1 :7.5YR3/4　暗褐色シルト　赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り強
2 :7.5YR3/4　暗褐色シルト　赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り強
3 :10YR3/3　暗褐色砂質シルト　極暗赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り強



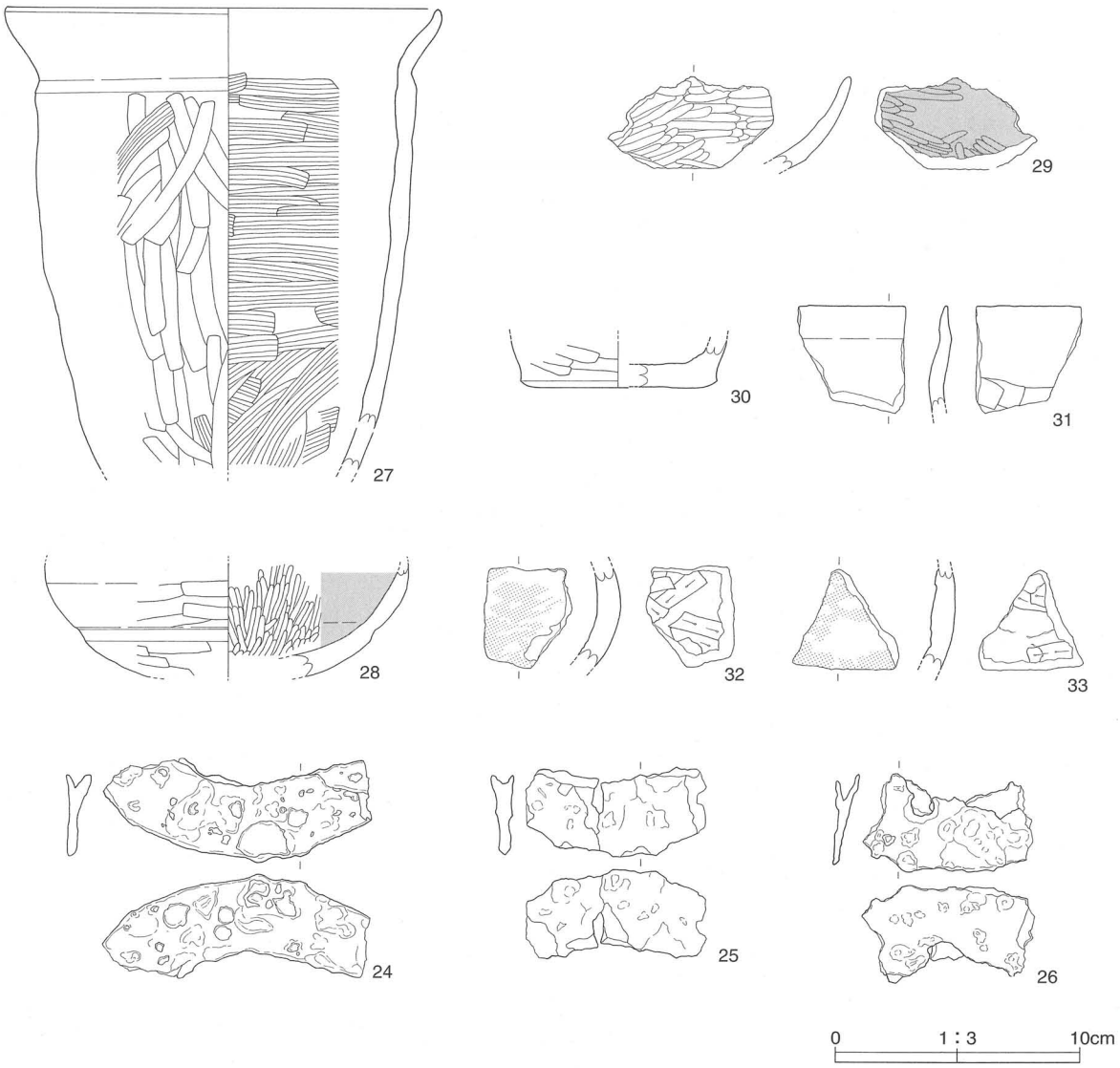
R A085 D—D′
1 :7.5YR3/4　暗褐色シルト　赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り強
2 :10YR3/4　暗褐色砂質シルト　粘性なし　締り弱
5 :10YR4/6　褐色粘質シルト　赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り中



R A085 E—E′
2 :10YR3/4　暗褐色砂質シルト　粘性なし　締り弱
5 :10YR4/6　褐色粘質シルト　赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り中

カマド断面
0　1：20　50cm

第15図　R A085竪穴住居跡



第16図　ＲＡ085竪穴住居跡出土遺物

カマドは東方向に設置されているが袖は削平されている。燃焼部から煙出しまでの長さは2.2ｍ、最大幅35㎝、深さは50㎝を測る。煙出部は平面でも明瞭に確認でき焼土も良好に残存していた。煙出し開口部の最大径は51㎝で、深さ30㎝を測る。

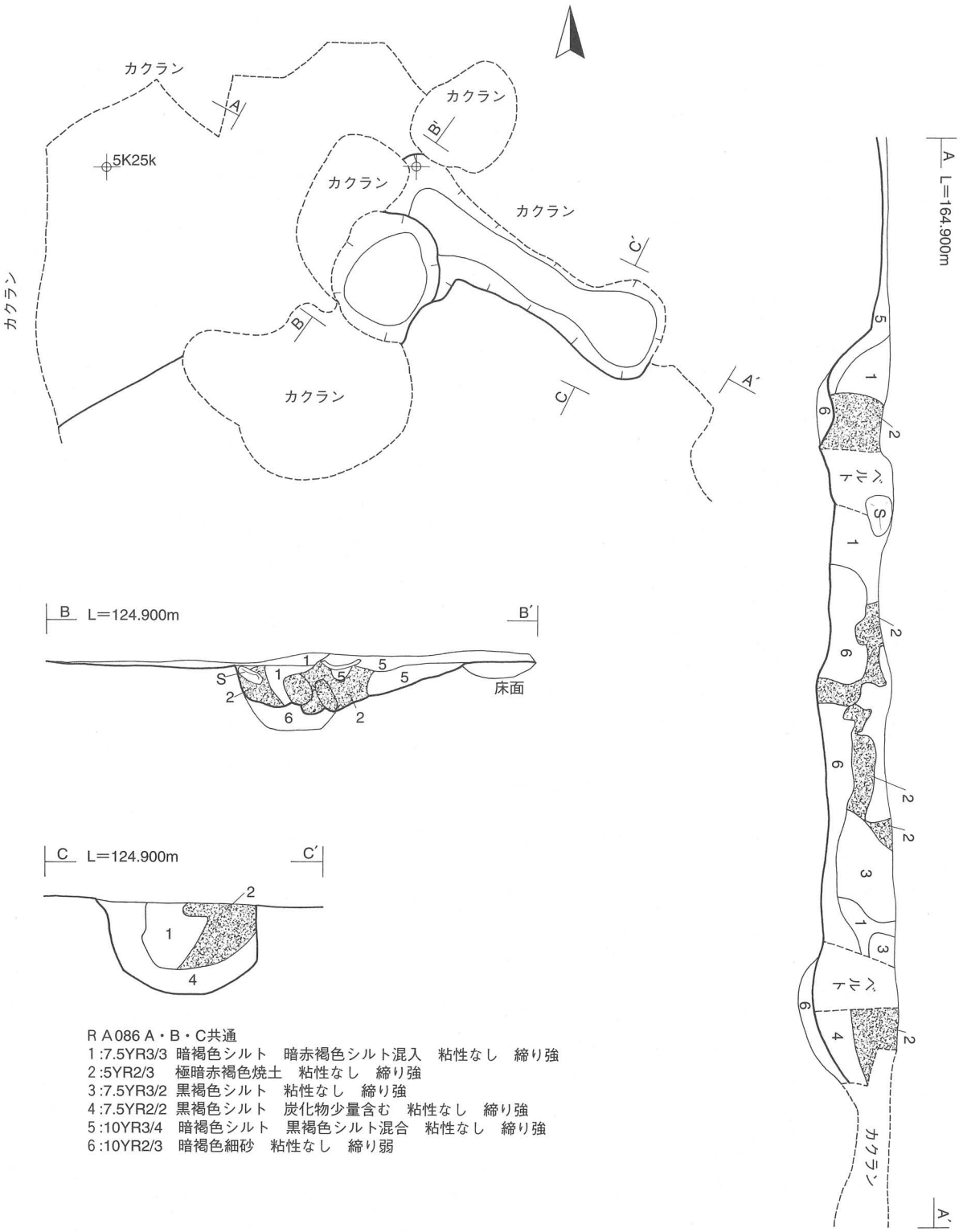
煙道の規模からこの住居跡は６ｍを越える大形であったと推測されるが、壁は全て攪乱により破壊されている。

出土遺物（第18図、写真図版21）

遺物はカマド燃焼部付近から土師器の甕･坏の破片が９点出土している。また、ＲＡ086を切るＲＤ190の埋土中から土師器甕・坏の破片が出土しており同時期であることからＲＡ086に共伴する遺物として扱うこととした。ＲＤ190から出土した遺物は110～118である。

34はカマド燃焼部から出土した土師器甕口縁部から体部にかけて破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、口唇部の端部は直角気味に立ち上がっている。胎土は粗く色調は橙である。37と同一の個体と思われる。

35はカマド燃焼部から出土した土師器小甕である。体部から底部にかけて1/3残存し、内外面とも



R A086 A・B・C共通
1 :7.5YR3/3 暗褐色シルト　暗赤褐色シルト混入　粘性なし　締り強
2 :5YR2/3　極暗赤褐色焼土　粘性なし　締り強
3 :7.5YR3/2 黒褐色シルト　粘性なし　締り強
4 :7.5YR2/2 黒褐色シルト　炭化物少量含む　粘性なし　締り強
5 :10YR3/4　暗褐色シルト　黒褐色シルト混合　粘性なし　締り強
6 :10YR2/3　暗褐色細砂　粘性なし　締り弱

住居平面
0　1：40　1m
カマド平面・断面
0　1：20　50cm

第17図　R A086竪穴住居跡

に回転ナデ調整を施し、内面にハケメ調整とヘラナデ調整が見られる。底部は回転糸切である。

36は土師器坏底部破片である。底部は回転糸切で、カマド燃焼部から出土している。

37はカマド燃焼部から出土した土師器甕の口縁部から体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、口唇部の端部は直角気味に立ち上がっている。胎土は粗く色調は橙である。34と同一の個体と思われる。

38はカマド燃焼部から出土した土師器小甕の口縁部破片である。内外面ともに回転ナデで、内面に一部ハケメ調整が見られる。胎土・焼成ともに良好である。

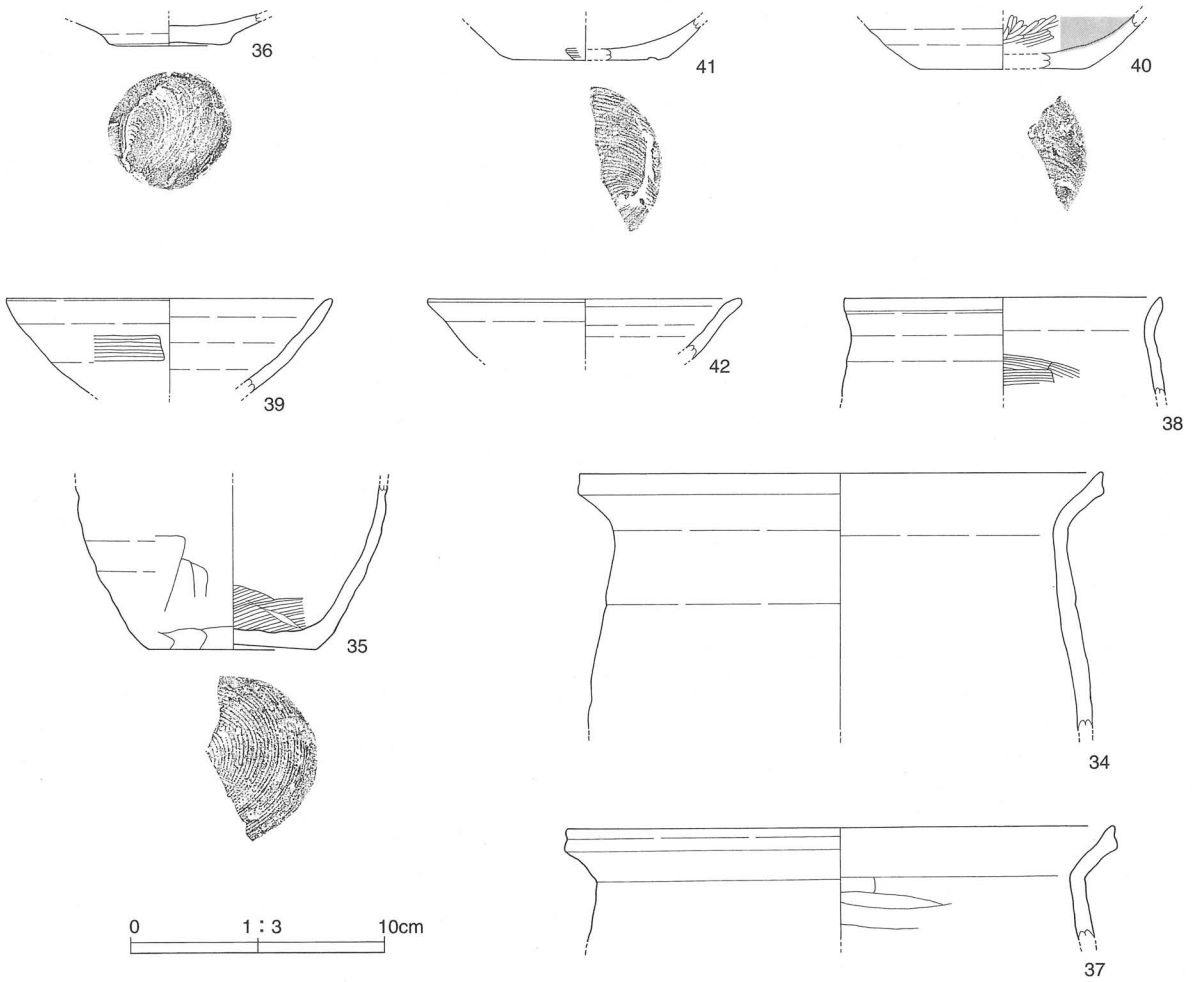
39はカマド燃焼部から出土した土師器坏口縁部から体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、外面に一部ハケメ調整が見られる。胎土は良好である。

40はカマド燃焼部付近から出土した土師器坏体部から底部にかけての破片である。外面は回転ナデ調整で、内面はミガキ調整で黒色処理されている。

41はカマド燃焼部から出土した土師器坏底部の破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、外面に一部ハケメ調整が見られる。胎土は良好だが焼成は不良で、色調は赤褐色である。底部は回転糸切り痕である。

42はカマド燃焼部付近から出土した土師器坏口縁部の破片である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、胎土・焼成ともに良好である。

所属時期　住居形態や遺物から９世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。



第18図　ＲＡ086竪穴住居跡出土遺物

ＲＡ087竪穴住居跡

遺　構（第19・20図、写真図版10・11）

Ａ区６Ｋ７ｋに位置する。床面の標高は124.97ｍである。旧河道際の黒ボク土層に接近しているためプランの境目は不明瞭で、当初は遺構が無いものと考えていた。また、カマド位置をなかなか特定できずベルトをかけて全体を把握する必要があった。

規模は長径が東西に4.4ｍ、短径は南北に4.1ｍ、深さは最大で50㎝を測る。平面形はほぼ隅丸方形を呈している。埋土は主に黒褐色粘質シルトからなり、炭化物を含んでいる。床面は黒褐色粘質シルトで締っている。また、３基の焼土を検出した。

カマドは北西の壁に設置されている。カマドの両袖の先端部分に土器が集中し、土器を芯材にしてカマドを構築している。両袖のほぼ中心には、支脚として用いられた小甕（52）が伏せた状態で設置してあった。支脚からの煙道の長さは1.3ｍで、幅は30～35㎝である。煙出しの径は37～40㎝、深さ28㎝を測る。燃焼部焼土の規模は長径78㎝×短径36㎝、厚さ５㎝を測る。

出土遺物（第21～23図、写真図版22～24）

遺物はカマド埋土から土師器の甕や坏が多く出土し、カマド以外の床からも数点出土した。立体の甕が11個、坏が４個、鉢１個、土師器の破片が８点である。他に鉄製品３点、土錘１点が出土している。

43は土師器球胴甕である。口縁部から底部まで良好に残存し、頸部と体部の境目に明瞭な段を有する。内外面ともにハケメ調整で、外面にはススが付着している。胎土は粗く焼成は不良である。

44は土師器長胴甕で、口縁部から底部まで残存する。口唇部はほぼ直角に立ち上がり、外面はハケメ、内面はヨコナデ調整である。底部は木葉痕である。胎土は粗く焼成は不良である。カマド両袖の中央支脚の上から出土し、外面にススが内面にコゲが付着している。

45はカマド周辺から出土した土師器長胴甕である。口縁部から底部まで良好に残存し、外面はケズリ、内面はハケメ調整である。内面に輪積痕が数ヶ所見られ、胎土は粗く焼成は不良である。

46は土師器長胴甕である。口縁部から底部まで残存する。外面はケズリ、内面はハケメ調整で、底部は木葉痕である。胎土は粗く焼成は不良である。カマド右袖付近から出土している。

47は土師器長胴甕である。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整を施している。胎土・焼成ともに不良で、色調は橙で一方の面は強く熱を受けている。伏せた状態でカマド右袖から出土したことからカマドの芯材に使用したものと思われる。

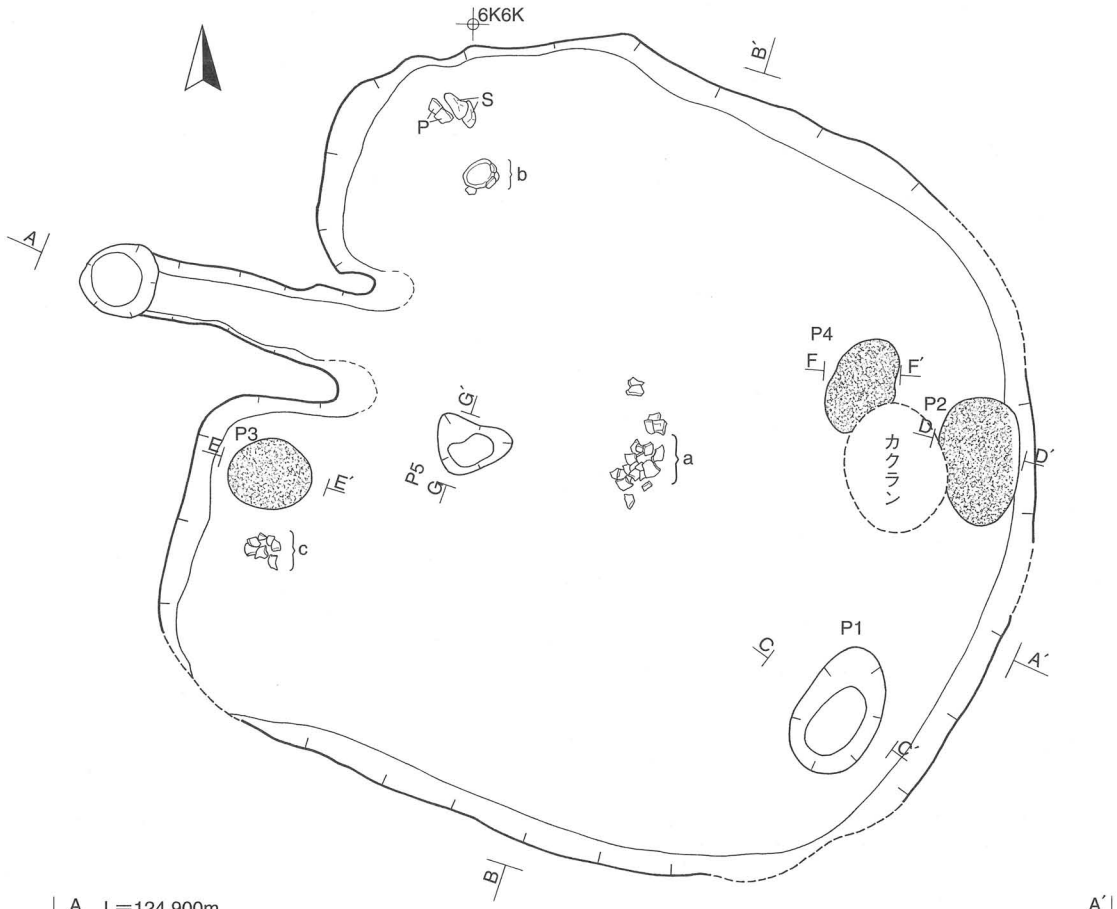
48は土師器長胴甕で、口縁部から底部まで残存している。口唇部がほぼ直角に立ち上がり、外面はヘラナデとケズリ調整、内面はヨコナデとヘラナデ調整である。底部は木葉痕である。胎土は粗く焼成は不良で、外面にスス、内面にコゲが付着する。

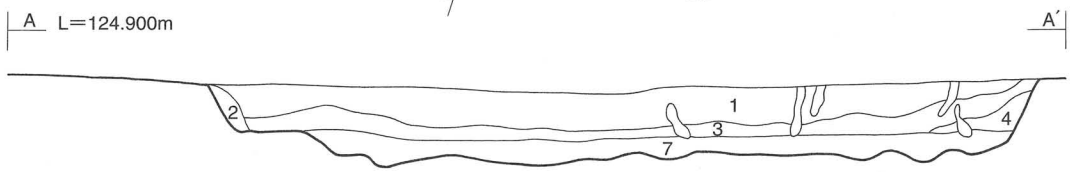
49は土師器長胴甕である。口縁部から底部まで残存する。外面はケズリ、内面はヘラナデ調整である。外面にスス、内面にコゲが付着する。

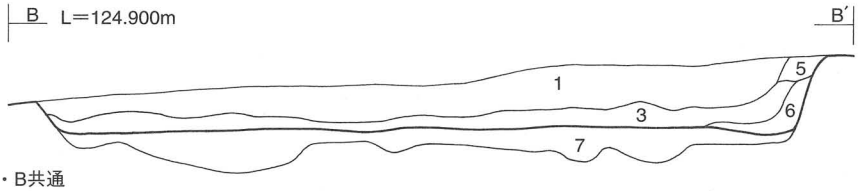
50はカマド左袖付近から出土した土師器長胴甕である。1/2が残存し、外面はヘラナデとケズリ調整、内面はハケメ調整を施し、底部は木葉痕である。

51はカマド燃焼部から出土した土師器鉢である。口縁部は外傾し体部との境目に明瞭な段を有し、内外面ともにヘラナデ調整である。器厚は薄く、胎土は粗いものの焼成は良好である。

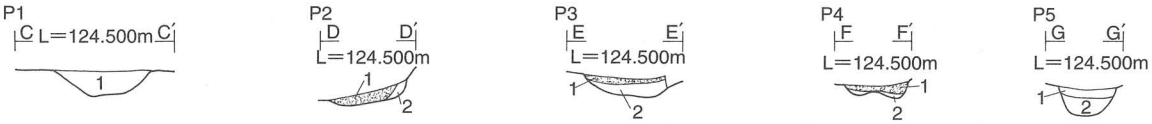
52は土師器小甕である。内外面ともにハケメ調整で、器厚は７～10㎜と厚く焼成は良好である。カマド両袖中央から伏せた状態で出土し、外面にススが内面にコゲが付着していることから煮炊きに使用した後、土器の体部上半を欠き支脚に転用したものと思われる。







R A087 A・B共通
1 :10YR2/2　粘質シルト　最上部に十和田a降下火山灰混入　粘性なし　締り強
2 :10YR4/2　灰黄褐色シルト　粘性なし　締り強
3 :10YR2/3　黒褐色粘質シルト　炭化物多量混入　粘性なし　締り強
4 :7.5YR4/3　褐色シルト　粘性なし　締り強
5 :10YR3/2　黒褐色シルト　粘性ややあり　締り強
6 :10YR2/2　黒褐色シルト　地山ブロック混入　粘性ややあり　締り強
7 :10YR5/6　黄褐色粘質シルト　褐色シルト混合　粘性ややあり　締り中



R A087 C—C′
1 :10YR2/3 黒褐色シルト　褐色粘質シルト混合　粘性ややあり　締り強

R A087 D—D′
1 :5YR4/6　赤褐色焼土　粘性ややあり　締り中
2 :10YR4/4 褐色粘質シルト　粘性ややあり　締り中

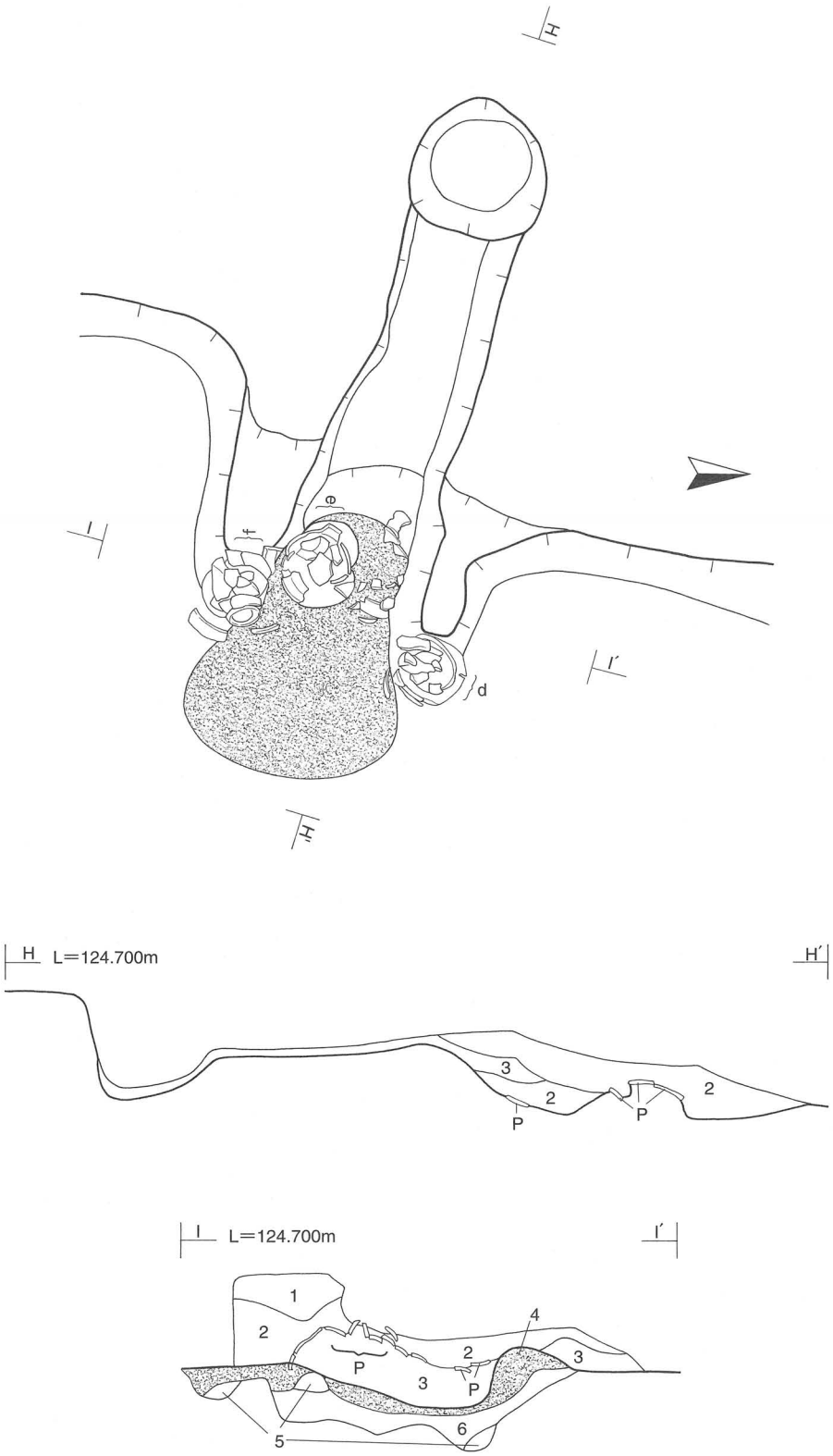
R A087 E—E′
1 :7.5Y3/4　暗褐色シルト　極暗赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り中
2 :7.5YR4/6 褐色砂質シルト　粘性なし　締り中

R A087 F—F′
1 :7.5Y3/4　暗褐色シルト　極暗赤褐色焼土微量混入　粘性なし　締り中
2 :7.5YR4/6 褐色砂質シルト　粘性なし　締り中

R A087 G—G′
1 :7.5YR3/3 暗褐色シルト　粘性なし　締り強
2 :10YR3/4　黄褐色シルト混合　粘性なし　締り強

0　1：40　1m

第19図　R A087竪穴住居跡（1）



R A087 カマド共通
1 :10YR2/3 黒褐色シルト　粘性なし　締り強
2 :10YR3/3 暗褐色シルト　粘性なし　締り強
3 :10YR3/3 暗褐色シルト　褐色粘質シルト混合　粘性なし　締り強
4 :5YR2/4　極暗赤褐色粘質シルト　黒褐色シルト混合　粘性なし　締り強
5 :10YR5/8 黄褐色砂質シルト　明赤褐色焼土少量混入　粘性なし　締り中
6 :10YR5/8 黄褐色砂質シルト　暗褐色シルト混合　粘性なし　締り強

0　1：20　50cm

第20図　R A087竪穴住居跡（2）

53は床直から出土した土師器小甕で、体部から底部にかけて1/4が残存する。外面はヘラナデ・ハケメ調整、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに不良である。

54は貼床から出土の土師器小甕である。体部から底部にかけて1/4が残存する。外面はケズリ調整、内面はハケメ調整である。底部は木葉痕である。胎土粗く焼成は良好である。

55は土師器小甕で、口縁部から底部にかけて残存する。内外面ともにヨコナデ調整で一部ハケメが見られる。胎土・焼成ともにあまり良好ではない。カマド付近からの出土である。

56は土師器坏で、口縁部から底部まで残存する。口径が16.9㎝で大形である。口縁部と体部の境目に明瞭な段を持ち、内外面ともにハケメ調整で内面は黒色処理されている。胎土・焼成ともにあまり良好ではない。床直上からの出土である。

57は床直上から出土した土師器坏で、口縁部から底部まで良好に残存する。口縁部と体部の一方の境目に段を有し、外面はミガキ調整、内面はヘラナデ調整後黒色処理されている。

58は埋土下層から出土した土師器坏である。口縁部から底部まで1/3残存し、口縁部と体部の境目に段を持ち、外面はミガキ調整、段の下はケズリ調整である。内面はヘラナデ調整後黒色処理されている。

59・60は同一個体と思われる土師器甕の破片である。1/4が残存し、外面はケズリ調整、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好である。カマド右袖からの出土で、被熱の状況から芯材に使用された可能性がある。

61は土師器甕底部の破片で、1/4が残存する。外面はハケメ調整、内面はハケメ・ヘラナデ調整である。埋土下層からの出土である。

62は土師器甕の口縁部から体部にかけての破片で、1/4以下残存する。口縁部は直角気味に外傾する。外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整で、内面にコゲが付着する。カマド両袖中央からの出土である。

63・64は土師器甕底部の破片で、1/4以下が残存する。63・64ともに内外面はヘラナデまたはケズリ調整である。64の底部は木葉痕である。63は埋土上層、64はカマド付近からの出土である。

65は土師器坏口縁部から体部の破片で、1/4以下が残存する。体部下半の外面はヘラナデで、内面は細かいミガキ調整後黒色処理されている。

66は床から出土した土錘である。長さ2.5㎝、幅1.8㎝、厚さ1.8㎝、孔径0.3㎝を測る。外面は黒色処理されている。

67は両端が欠損した角釘である。長さは5.0㎝、幅0.7㎝、厚さ0.4㎝を測る。埋土上層からの出土である。

68も角釘で、先端が欠けている。長さ4.2㎝、幅0.3㎝、厚さ0.3㎝を測る。埋土上層からの出土である。

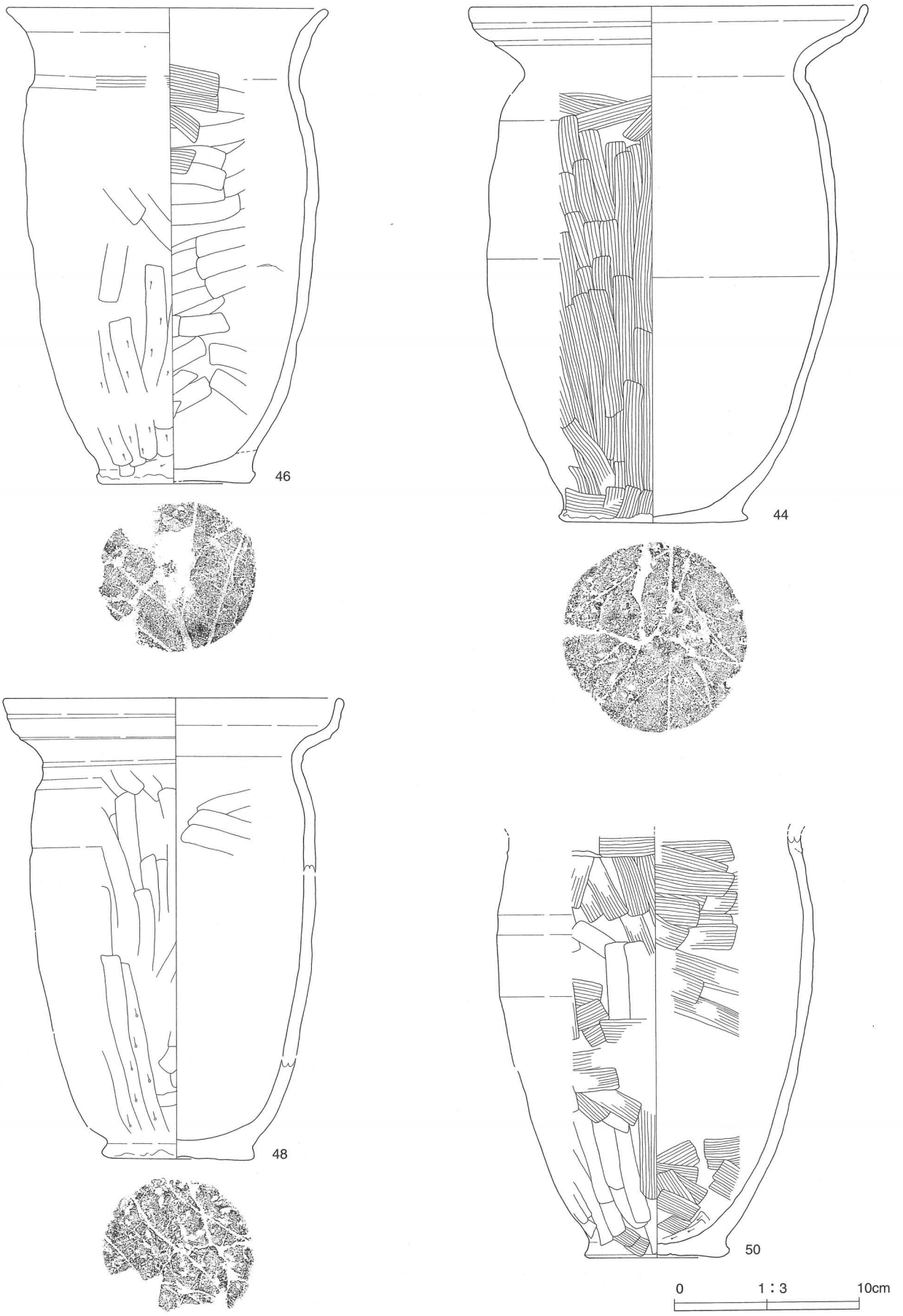
69は不明鉄製品である。中央に穿孔を有し、端部が欠けている。表面は錆が浮き上がり凹凸がある。形状は三角形で、一辺が3.3㎝、2.8㎝、3.0㎝、穿孔径0.8㎝である。埋土上層からの出土である。

所属時期　住居形態や遺物から７世紀末～８世紀前半の奈良時代と考えられる。

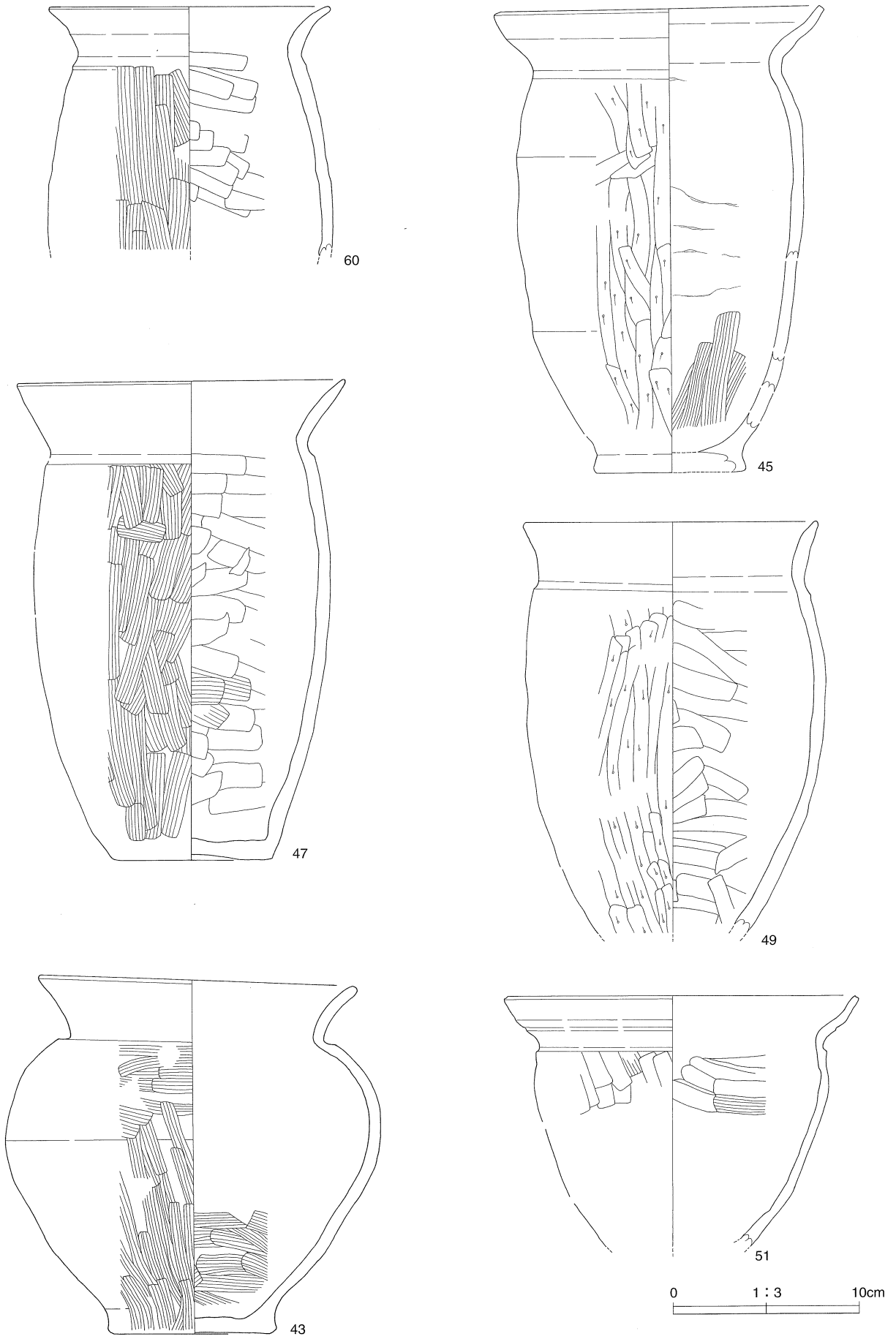
ＲＡ088竪穴住居跡

遺　構（第24図、写真図版12）

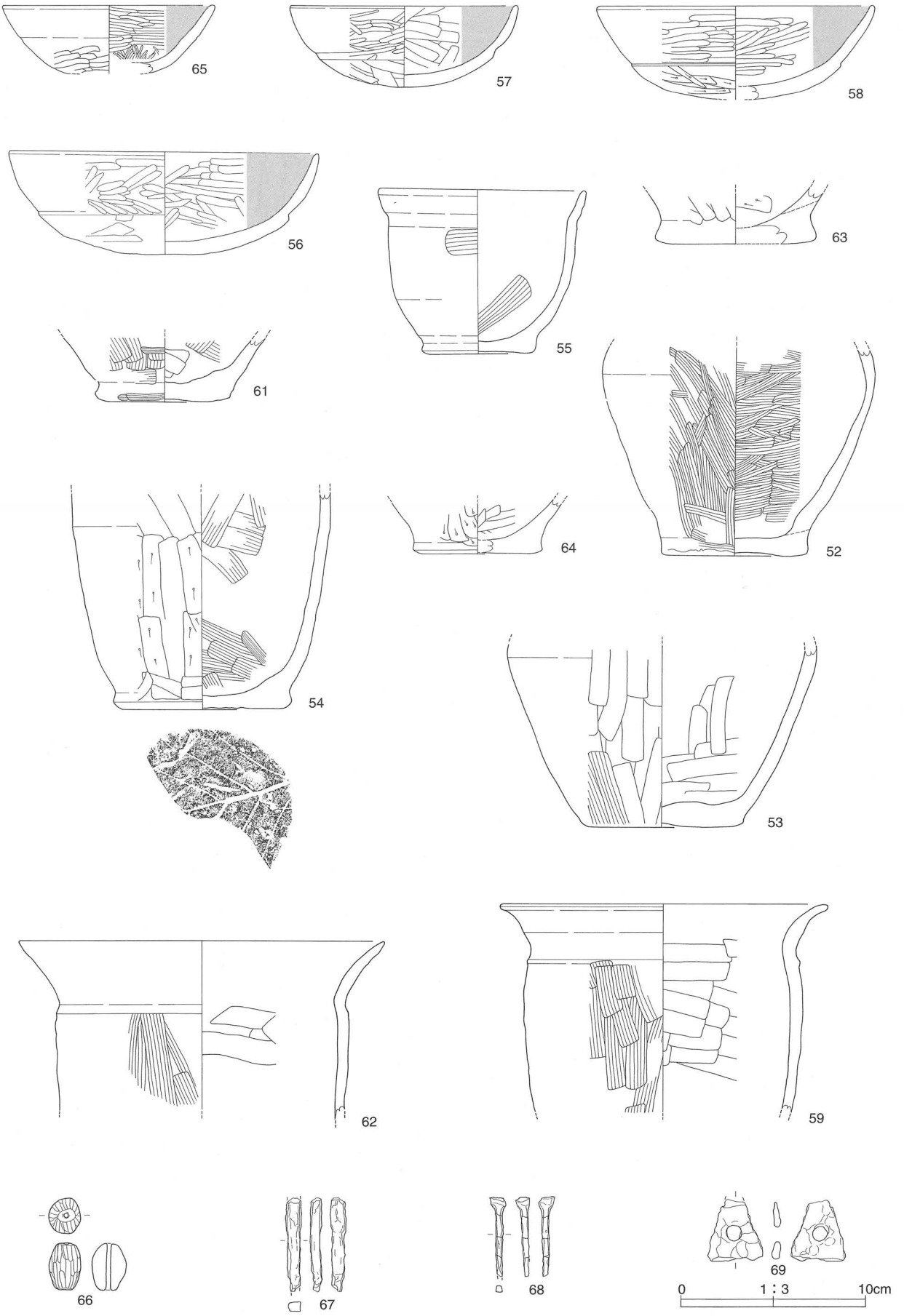
Ａ区６Ｋ１ｓに位置する。床面の標高は125.29ｍである。黄褐色砂質シルトでの検出であり埋土は褐色シルトである。しかし、この地区は削平されている上に激しく攪乱されていて残存するのは、床



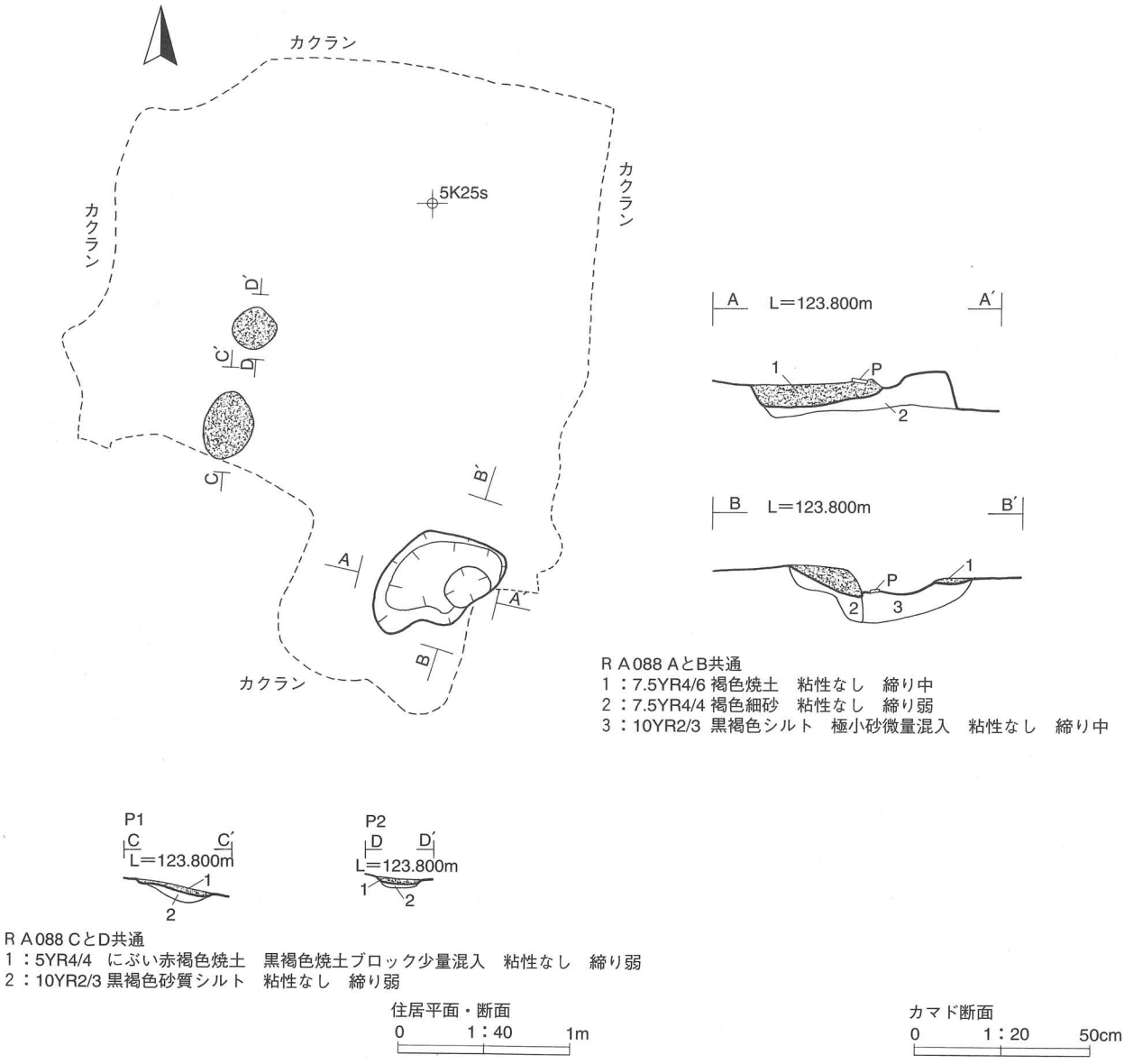
第21図　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（１）



第22図　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（２）



第23図　ＲＡ087竪穴住居跡出土遺物（３）



第24図　ＲＡ088竪穴住居跡

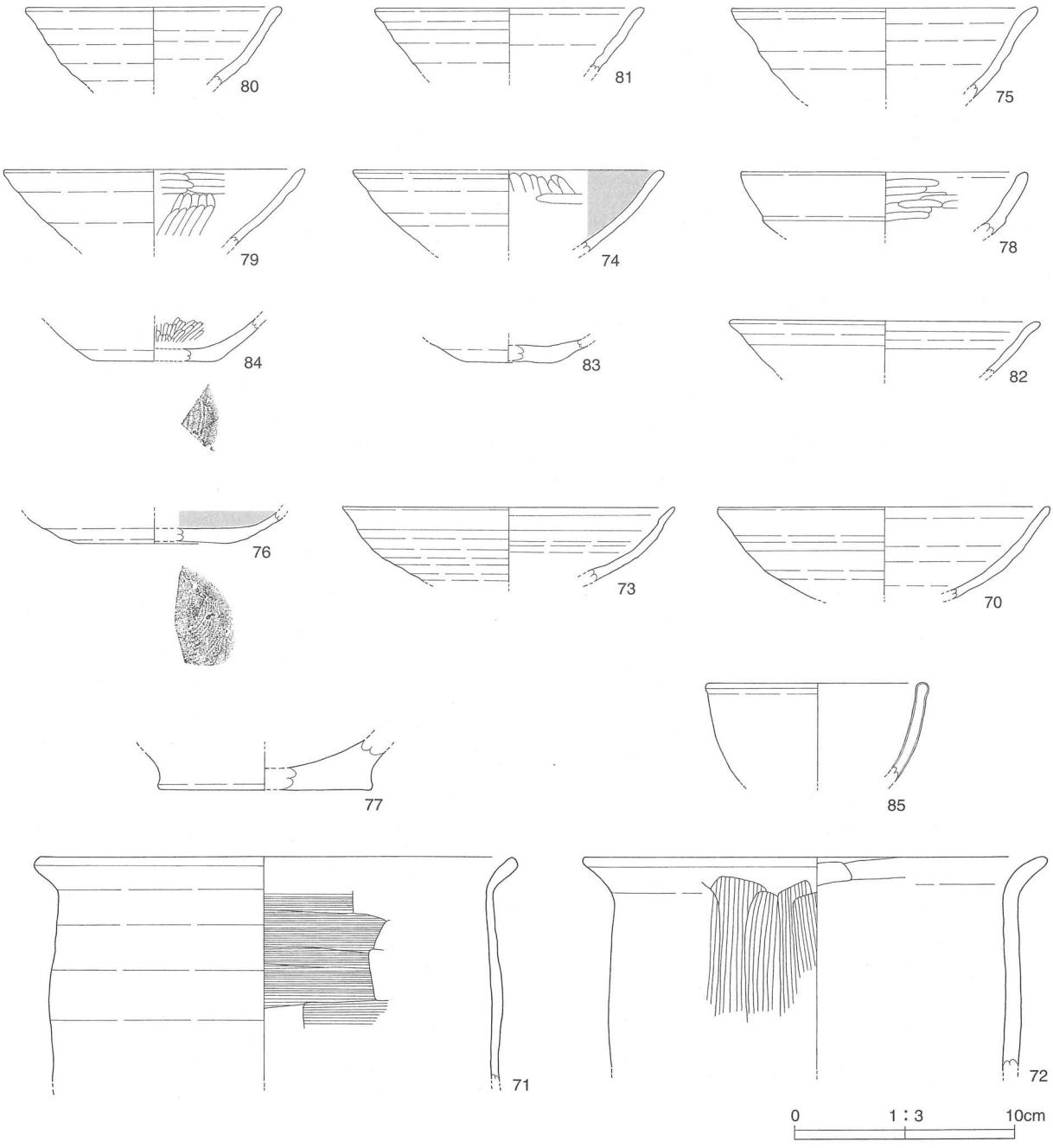
面の一部とカマド燃焼部のみであった。壁が破壊されていて住居跡規模の詳細は不明である。床面の埋土は削平されていて存在せず２つの焼土のみが存在した。焼土Ｃ-Ｃ’の規模は長径20㎝、短径14㎝、深さ５㎝を測る。焼土Ｄ-Ｄ’の規模は長径14㎝、短径13㎝、深さ３㎝を測る。

カマドは東方向に設置されているが、煙道と袖部は削平されている。燃焼部は南北に55㎝、東西に38㎝、厚さ８㎝を測る。

出土遺物（第25図、写真図版24）

遺物はカマド燃焼部埋土中から主に出土した。掲載遺物は土師器坏の破片が12点、土師器甕の破片が３点、陶器の破片が１点の計16点である。

70はカマド燃焼部から出土した土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/2残存し、内外面ともに回転ナデ調整である。器厚は薄く、色調は橙である。



第25図　ＲＡ088竪穴住居跡出土遺物

71はカマド燃焼部から出土した土師器甕の破片で、口縁部から体部まで1/4が残存する。口縁部は外傾する。外面は回転ナデ調整で、内面はカキメ調整である。胎土は粗く焼成は不良で、器厚は0.3㎝で薄い。外面にススが付着している。

72はカマド燃焼部から出土した土師器甕の破片である。口縁部から体部まで1/4残存し、口縁部は外傾する。外面はハケメ調整、内面はヨコナデ調整である。胎土は粗く、焼成は不良である。

73は土師器坏の破片で、口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整で、器厚は薄い。カマド燃焼部からの出土である。

74はカマド燃焼部から出土した土師器坏の破片である。口縁部から体部まで1/4残存し、外面は回転ナデ調整である。内面はミガキ調整で黒色処理されている。

75は土師器坏の破片で、口縁部から体部まで1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。

カマド燃焼部からの出土である。

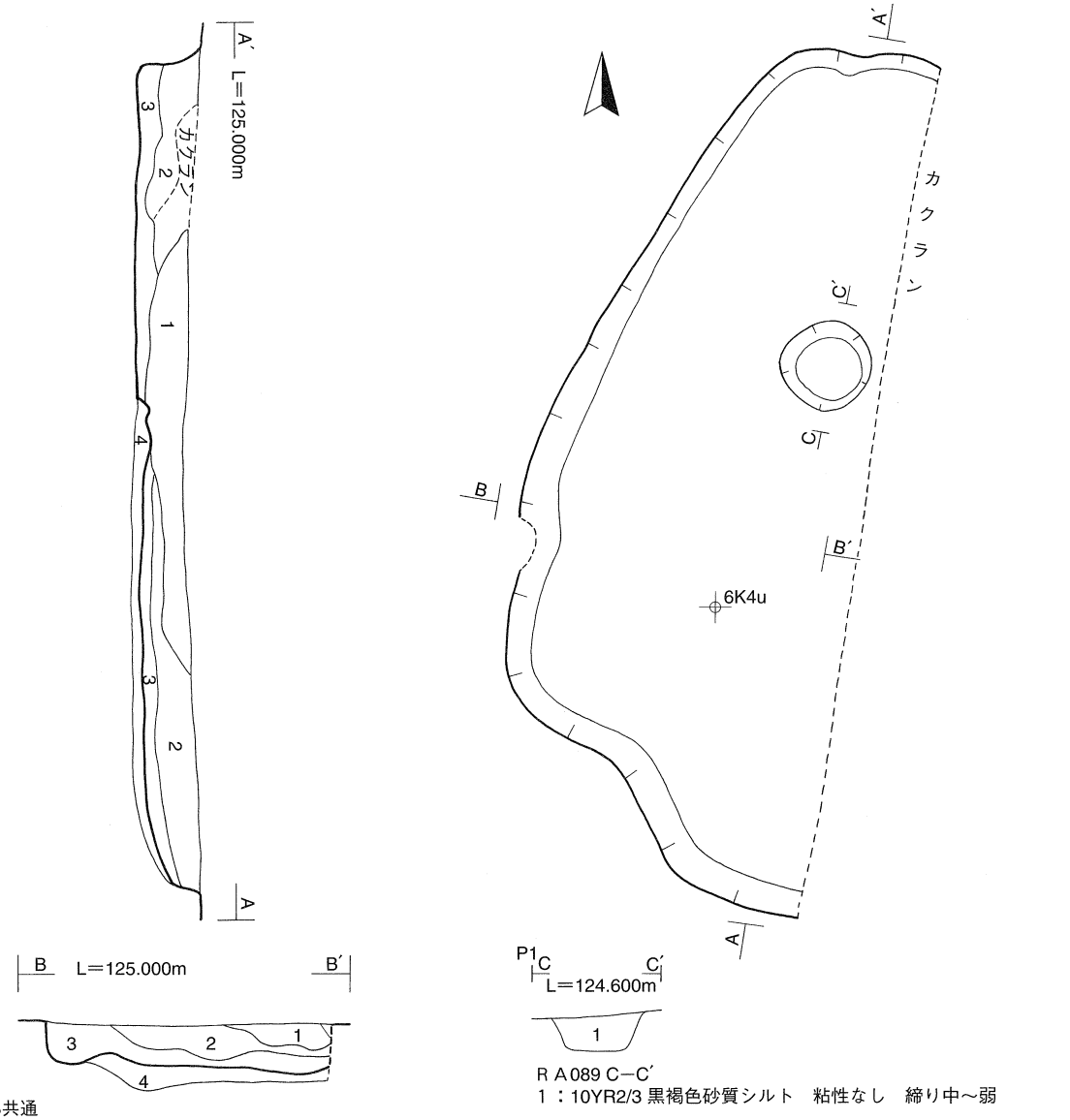
76はカマド燃焼部から出土した土師器坏の破片である。口縁部から体部まで1/4以下残存し、外面は回転ナデ調整である。内面はミガキ調整で黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りで切り離し後調整している。

77は土師器甕の底部破片である。内外面ともヨコナデ調整で、胎土は粗い。カマド燃焼部からの出土である。

78は土師器坏破片で、口縁部から体部まで1/4以下残存する。口縁部と体部の境目に段を有し、外面は回転ナデ調整である。内面はミガキ調整で黒色処理されている。カマド燃焼部からの出土である。

79はカマド燃焼部から出土した土師器坏の破片で、口縁部から体部まで1/4残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整である。器厚は0.3㎝と薄い。

80は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。器厚は0.3㎝で薄い。カマド燃焼部からの出土である。



R A 089 AとB共通
1：10YR2/3 黒褐色砂質シルト　粘性なし　締り中～弱
2：10YR2/1 黒褐色砂質シルト　粘性なし　締り中
3：10YR2/3 黒褐色砂質シルト　暗褐色細砂混合　粘性なし　締り弱
4：10YR3/4 暗褐色細砂　鉄分含む　粘性なし　締り弱

R A 089 C－C′
1：10YR2/3 黒褐色砂質シルト　粘性なし　締り中～弱

0　1：40　1m

第26図　R A 089竪穴住居跡

81は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。胎土に炭化物含む。カマド燃焼部からの出土である。

82は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。カマド燃焼部からの出土である。

83は土師器坏破片である。底部のみ残存する。底部に回転糸切痕があり切り離し後調整している。カマド燃焼部からの出土である。

84は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整である。底部に回転糸切痕があり切り離し後調整している。カマド燃焼部からの出土である。

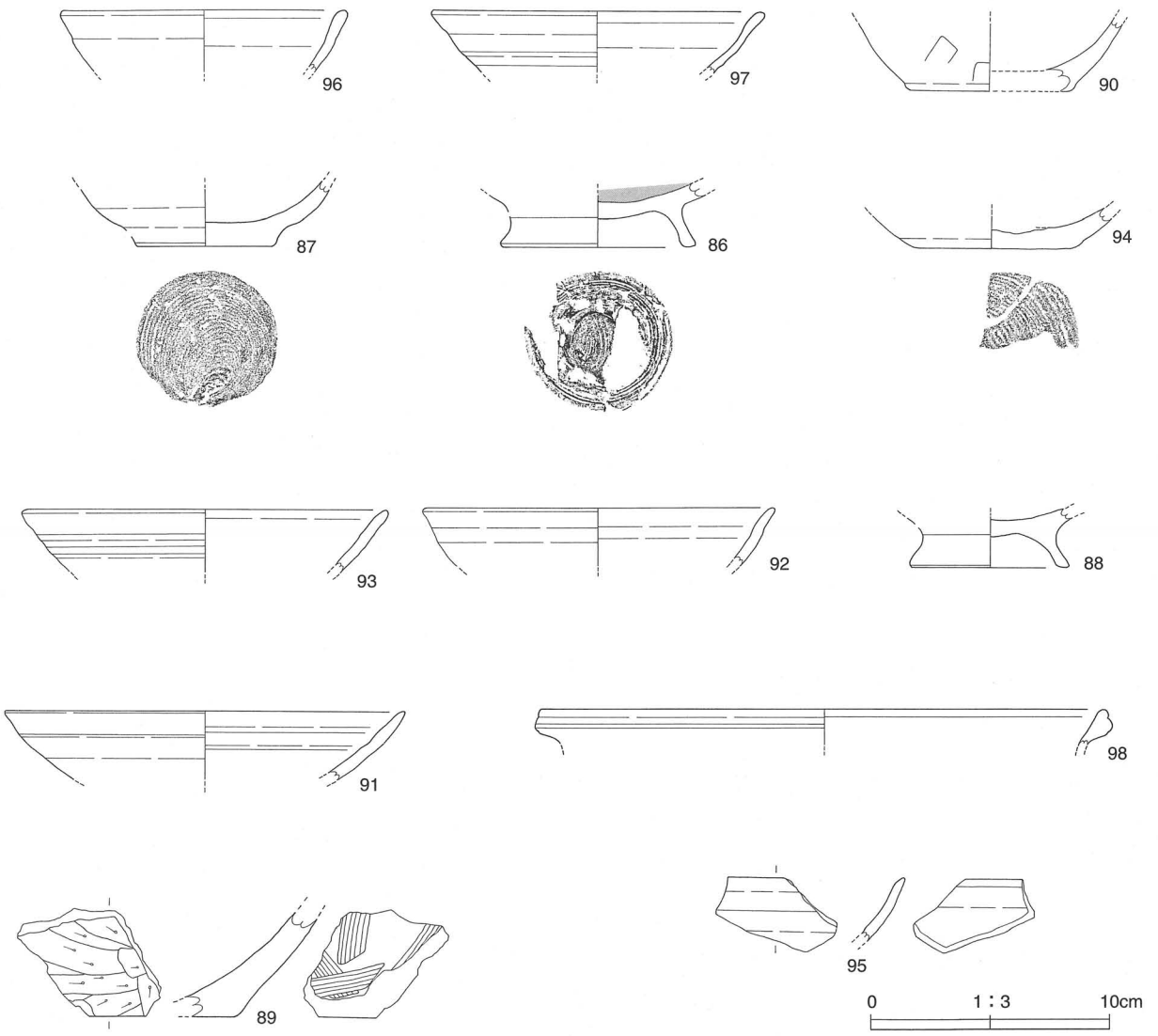
85は流れ込みの瀬戸美濃産の灰釉陶器碗の破片である。内外面の色調は灰白色、胎土は灰オリーブである。

所属時期　住居形態や遺物から９世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。

ＲＡ089竪穴住居跡

遺　構（第26図、写真図版13）

Ａ区６Ｋ４ｕに位置する。床面の標高は125.10mである。黄褐色砂質シルト面で検出されている。



第27図　ＲＡ089竪穴住居跡出土遺物

埋土は暗褐色シルトで明瞭に確認できた。この住居跡に関して攪乱は及んでいなかったが住居の半分は調査区域外に延びている。検出された規模は南北に4.7m、東西に1.7m、深さ43cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトが主体で、粘性・締りともに中～弱である。床面から規模長径50×短径50cm、深さ20cmの円形のピットが１基検出されている。カマドは調査区域外に設置されていると思われる。

出土遺物（第27図、写真図版25）

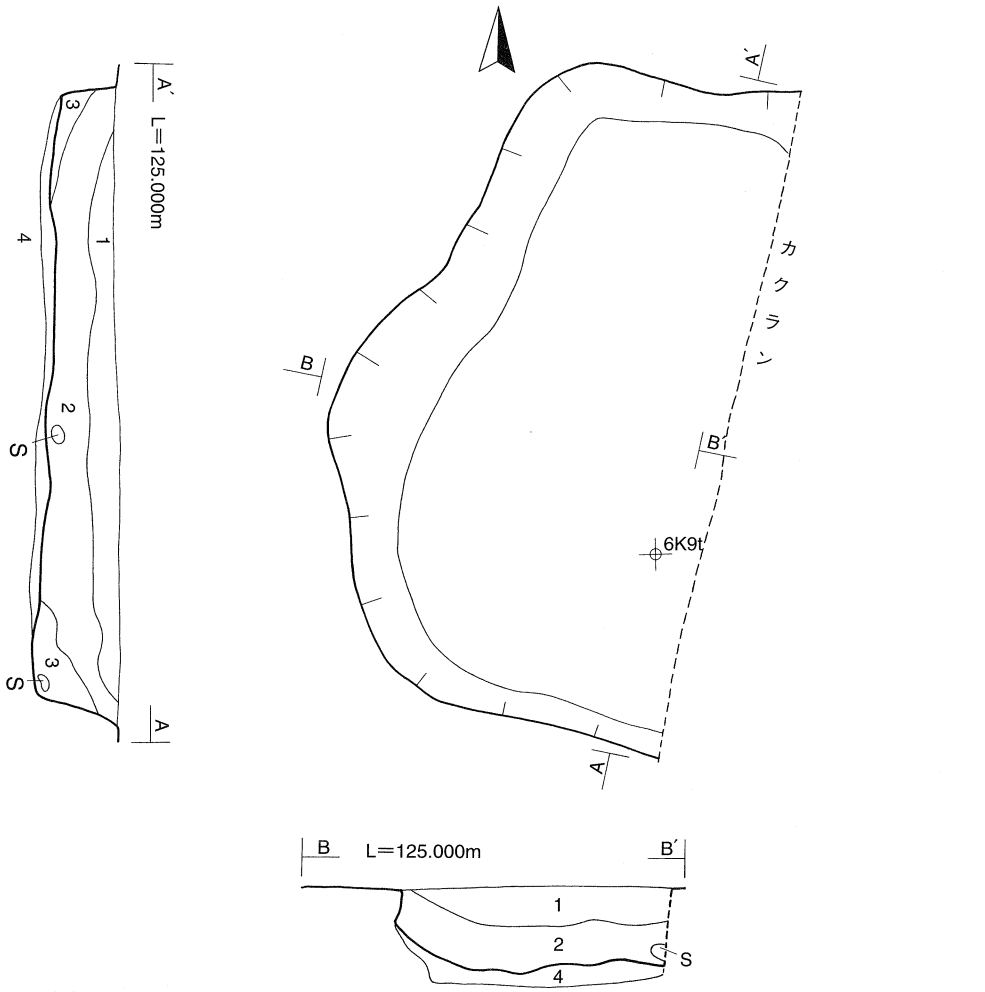
掲載遺物は埋土中から土師器坏の破片が11点、土師器甕の破片が２点である。

86はベルト埋土中から出土した土師器高台付坏の底部破片である。底部のみ残存し、内面はミガキ調整で黒色処理されている。底部には回転糸切の痕があり、切り離し後調整し高台部を接着したものである。

87は土師器坏の底部破片である。体部から底部まで1/4以下残存し、内外面ともに回転ナデ調整である。底部切り離しは回転糸切である。埋土中からの出土である

88は床直上から出土した土師器高台付坏の底部破片で、内面は回転ナデ調整を施している。底部は粘土を摘み出し撫でにより高台部を接着したものである。

89は土師器甕の破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。外面はケズリ、内面はハケメ調整で、胎土・焼成ともに不良である。ベルト埋土中からの出土である。



ＲＡ090 ＡとＢ共通
1：10YR2/2 黒褐色シルト　粘性なし　締り強
2：10YR2/3 黒褐色シルト　褐色粘質シルトブロック混入　粘性なし　締り中
3：10YR3/4 暗褐色粘質シルト　褐色粘質シルト30%混入　粘性ややあり　締り中
4：10YR4/4 褐色細砂　粘性なし　締り弱

第28図　ＲＡ090竪穴住居跡

90～97は土師器坏の破片で、体部のみ1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。90の底部は高台部が剥落した痕跡が見られる。94は回転糸切痕を有する。

98は土師器甕の口縁部破片である。口唇部は三角形状の張出しを有し、内外面ともに回転ナデ調整である。埋土中からの出土である。

所属時期　住居形態や遺物から９世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。

ＲＡ090竪穴住居跡

遺　構（第28図、写真図版14）

Ａ区６Ｋ９ｔに位置する。床面の標高は124.94ｍである。黄褐色砂質シルト面での検出である。埋土は暗褐色シルトで明瞭に確認できた。この住居跡に関して攪乱は及んでいなかったが住居の半分は調査区域外に延びている。規模は南北に3.9ｍ、東西に1.9ｍ、深さ45㎝を測る。埋土は黒褐色砂質シルトが主体で占められ、粘性・締りともに中～弱である。カマドは調査区域外に設置していたと思われる。

出土遺物（第29・30図、写真図版25）

掲載遺物は埋土中から土師器坏の破片が４点、土師器甕と須恵器の甕の破片が各１点、刀子が１点、計７点である。

99は床直上から出土した須恵器大甕破片である。体部のみ1/4以下残存し、外面はタタキ調整、内面は当具を使用している。色調は外面が黒色、内面･断面は黒に近い灰色である。胎土・焼成ともに良好である。

100は埋土中から出土した土師器坏破片である。口縁部から体部にかけて1/3残存し、内外面ともに回転ナデ調整を施している。器厚は0.3㎝と薄い。

101は土師器坏破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。底部切り離しは回転糸切である。胎土・焼成ともに良好で硬く締まる。

102・103は土師器坏破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。102は床直上から103は埋土からの出土である。

104は床直上から出土した土師器小甕破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存し、外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに不良である。

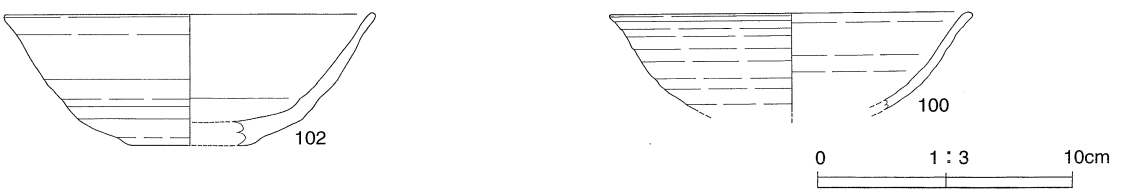
105は床直上から出土した刀子で、刃部先端と茎部の両端を欠損している。錆付きが激しく表面が浮いたり陥没したりしている。残存値で長さ7.0㎝、幅1.6㎝、厚さ0.4㎝を測る。

所属時期　住居形態や遺物から９世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。

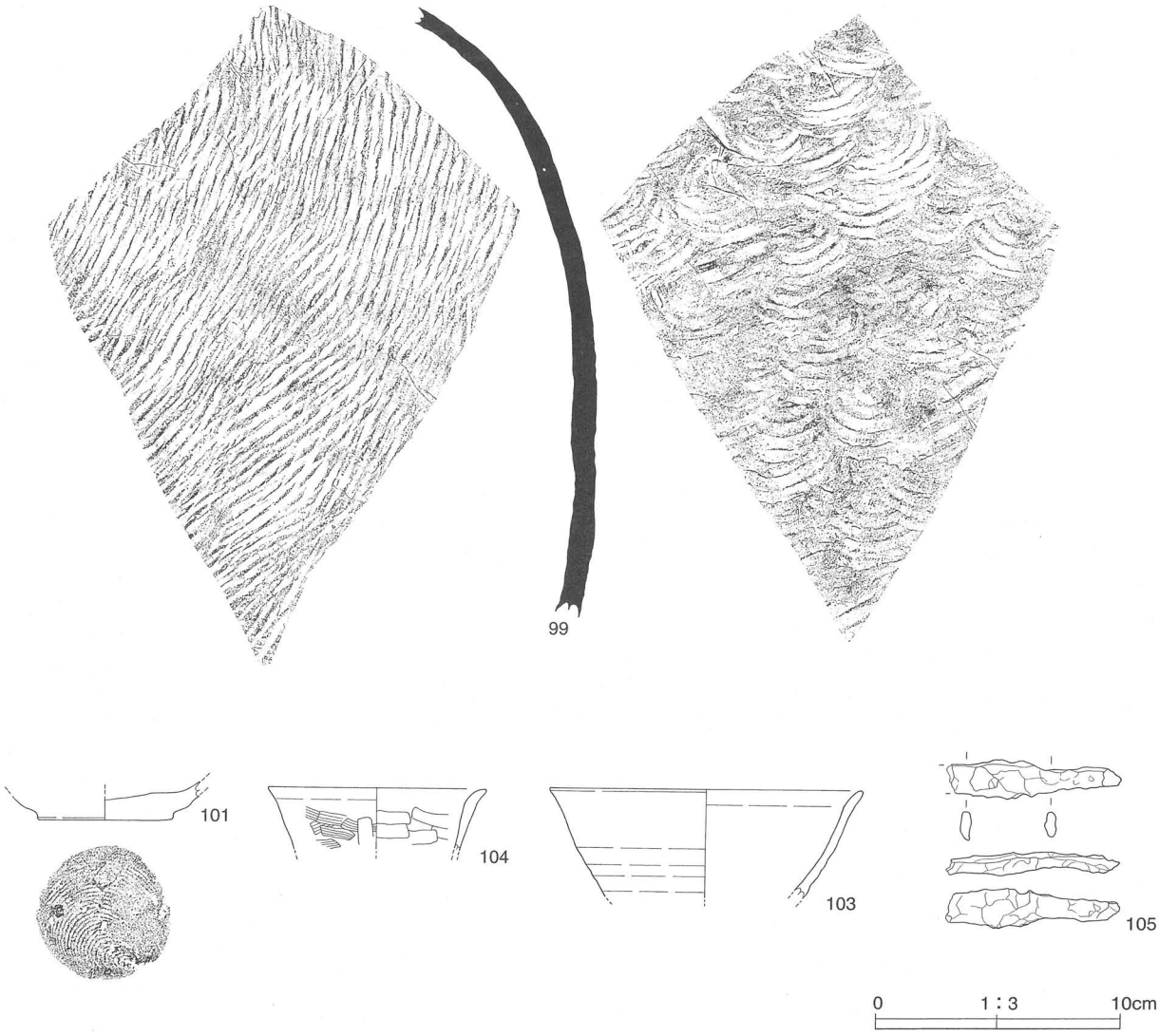
ＲＥ016住居状遺構

遺　構（第31図、写真図版15）

Ａ区６Ｋ４ｐに位置する。床面の標高は125.16ｍである。黄褐色砂質シルト面での検出である。埋



第29図　ＲＡ090竪穴住居跡出土遺物（１）



第30図　ＲＡ090竪穴住居跡出土遺物（２）

土は暗褐色シルトで明瞭に確認できた。しかし、遺構の数箇所に攪乱が及んでいるため全体像は不明である。カマド部または焼土を検出できず住居状遺構とした。規模は南北に3.3m、東西に3.1m、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色シルトが主体である。粘性無く締っている。

出土遺物（第31図、写真図版25）

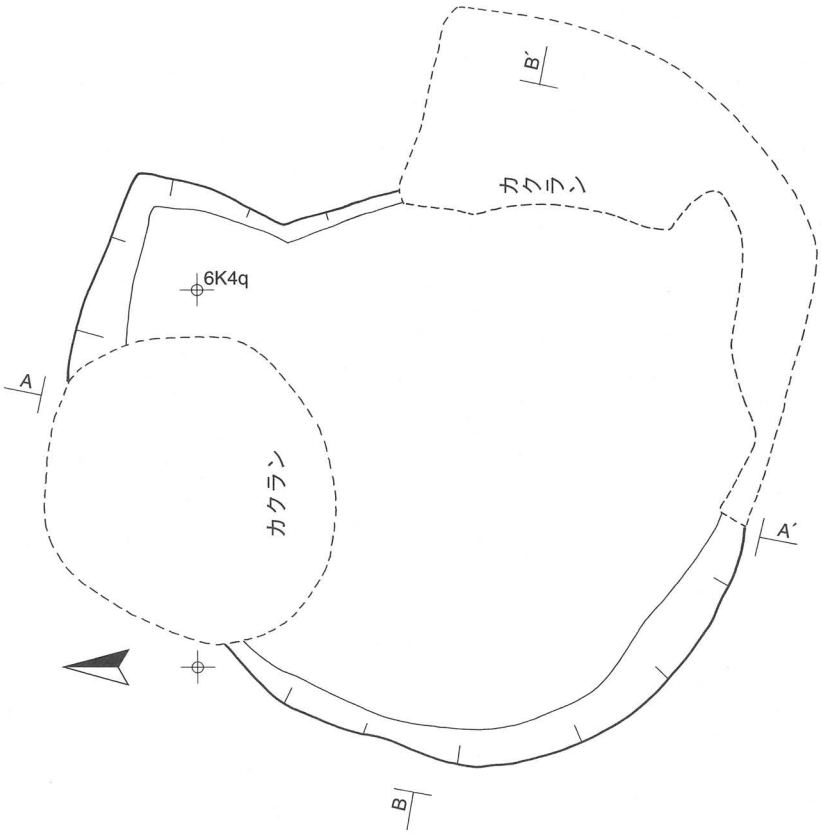
掲載遺物は埋土中から土師器坏の破片が１点、土師器甕が２点、計３点である。

106は土師器坏の破片で、口縁部から底部にかけて1/3残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整で黒色処理されている。底部は回転糸切り後にナデ調整している。ベルト埋土中からの出土である。

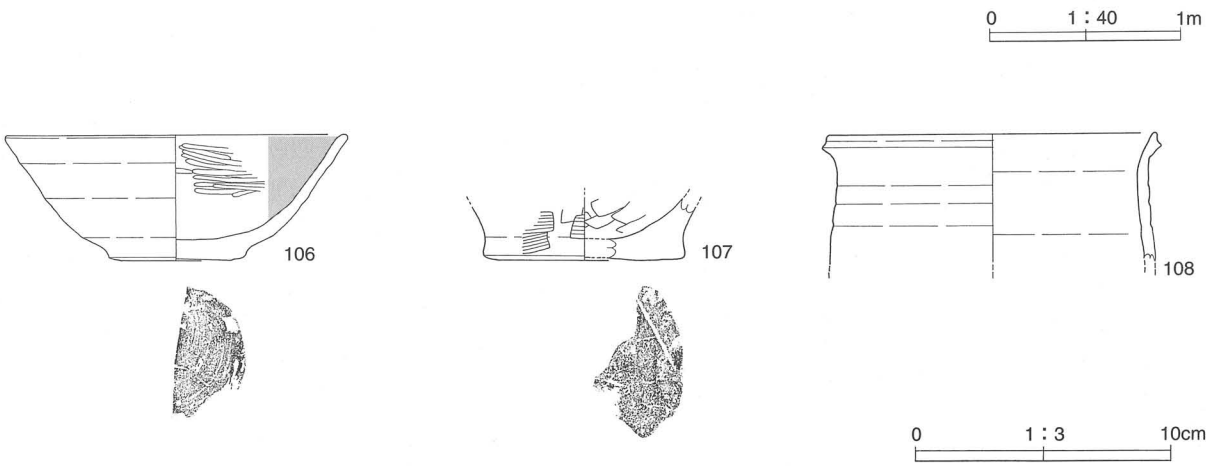
107はベルト埋土中から出土した土師器甕の破片である。底部のみ1/4以下残存する。外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整を施し、胎土・焼成ともに不良である。

108は土師器甕の破片である。口縁部から底部にかけて1/4以下残存する。口唇部は三角形状の張出しを有し、内外面ともに回転ナデ調整である。ベルト埋土中からの出土である。

所属時期　遺物から９世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。



ＲＥ016 ＡとＢ共通
1：10YR2/1 黒褐色シルト　2/2黒褐色シルトブロック混入　粘性なし　締り強
2：10YR3/3 暗褐色砂質シルト　粘性なし　締り中～弱

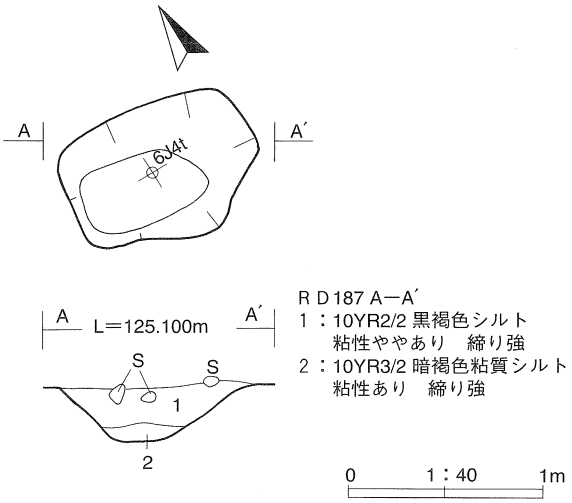


第31図　ＲＥ016住居状遺構・出土遺物

ＲＤ187土坑

遺　構（第32図、写真図版16）

Ａ区６Ｊ４ｔに位置する。底面の標高は124.63ｍである。ＲＤ187土坑は旧河道黒ボク土層中を走るＲＧ138溝跡を切って存在する。ＲＧ138の埋土を掘削しＲＤ187の検出に至った。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体で礫を含む。規模は開口部径105×72㎝、底部径60×35㎝、深さ28㎝を測る。平面形は隅丸長方形である。底面は平坦で壁は緩やかに外傾する。遺物の出土はなく時期は不明である。



第32図　ＲＤ187土坑

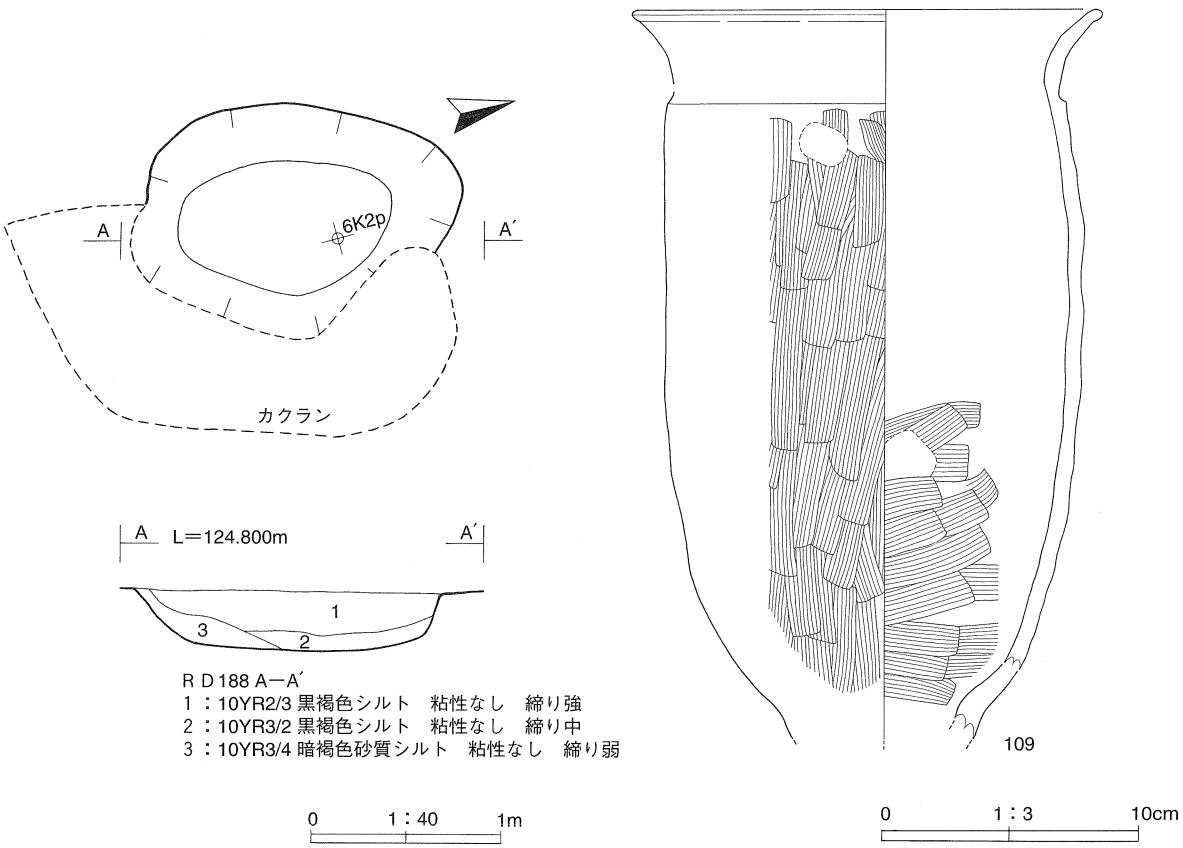
ＲＤ188土坑

遺　構（第33図、写真図版16）

Ａ区６Ｋ２ｐに位置する。底面の標高は125.20ｍである。黄褐色砂質シルト面での検出である。遺構の一部は攪乱されている。埋土は黒褐色シルトが主体で、粘性が無く締まっている。規模は開口部径170×115㎝、底部径110×72㎝、深さ30㎝を測る。平面形はカクランを受け不明である。底面は平坦で北壁は直角気味に、南壁はゆるやかに外傾する。

出土遺物（第33図、写真図版26）

出土遺物は土師器の甕が１点である。床直上から一個体分がまとまって出土した。



第33図　ＲＤ188土坑・出土遺物

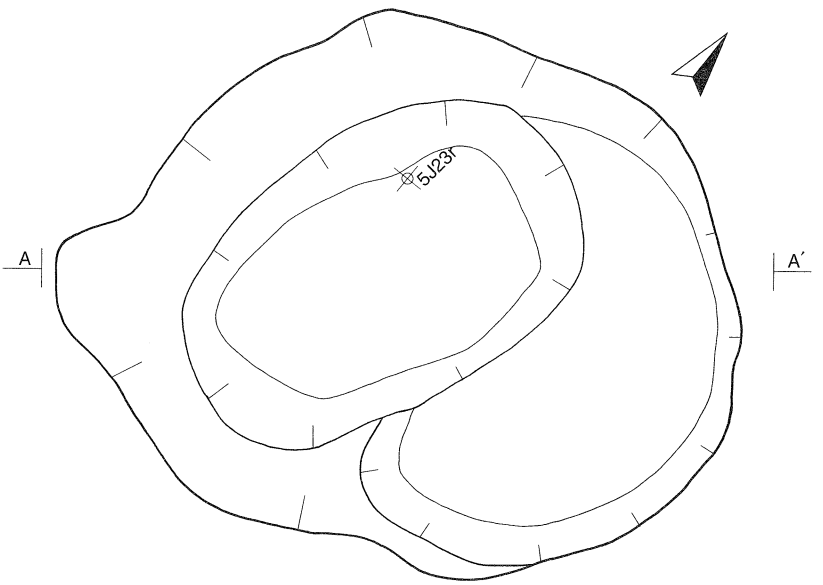
109は土師器長胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、口縁部と体部の境目に明瞭な段を有する。内外面ともにハケメ調整で、押圧痕が見られる。外面全体にススが付着している。

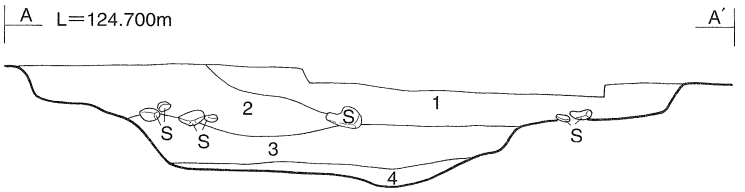
所属時期　遺物から８世紀前半の奈良時代と考えられる。

ＲＤ189土坑

遺　構（第34図、写真図版16）

Ａ区５Ｊ23ｒに位置する。底面の標高は125.52ｍである。ＲＤ189の半分は本宮熊堂Ｂ第25次調査区に延びている。黄褐色粘質シルト面での検出である。埋土は黒褐色シルトが主体で、粘性無く締っている。規模は開口部径350×275㎝、底部径155×105㎝、深さ55㎝を測る。平面は不定形である。底面は凹凸があり、東西の壁は段々に広がって立ち上がる。遺構の埋土中または底面直上から50個以上の礫が見つかった。人為的に投げ込まれたものと思われる。出土遺物はなく、埋土には粘土質ブロック、砂質ブロック、鉄分や礫が混入することから、近世の土坑であると考えられる。





ＲＤ189 Ａ―Ａ′
1：10YR2/2 黒褐色シルト　褐色粘質シルト少量ブロック混入　粘性なし　締り強
2：10YR2/2 黒褐色シルト　微小砂混入　礫含む　粘性なし　締り強
3：10YR2/1 黒褐色シルト　鉄分含む　粘性なし　締り強
4：5Y4/3　暗オリーブ焼土　粘性あり　締り中

0　1：40　1m

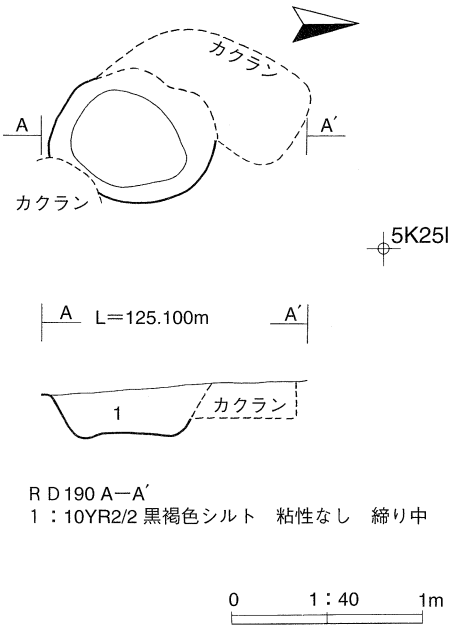
第34図　ＲＤ189土坑

ＲＤ190土坑

遺　構（第35図、写真図版16）

Ａ区５Ｋ25ｋに位置する。底面の標高は125.37ｍである。ＲＤ190はＲＡ086のカマド右袖付近に位置し、重複し切っている。黄褐色粘質シルト面で検出されている。埋土は黒褐色シルトが主体で、粘性無く締っている。開口部両端は攪乱により削られているが、現存する規模は開口部径82×55㎝、底部径55×45㎝、深さ25㎝を測る。平面は楕円形である。底面はほぼ平坦であり東西の壁は外傾して立ち上がる。

遺物は埋土中から土師器甕の破片が２点、坏の破片が７点、計９点出土しているが、ＲＡ086出土遺物と同時期であることからＲＡ086に共伴するものであると考えている。また、底面の北に寄った床直上から近世の古銭が６枚出土した。遺構と遺物（古銭）の出土状況から近世の墓壙であると考えている。



第35図　ＲＤ190土坑

出土遺物（第36図、写真図版26・27）

110は土師器甕破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。口唇部は三角形状の張り出しがあり、外面はケズリ調整、内面は回転ナデ調整である。胎土は粗く焼成は良好である。埋土中からの出土である。

111は土師器甕破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面はケズリ調整、内面はハケメ・ケズリ調整である。埋土中からの出土である。

112は土師器坏破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。色調は橙色である。埋土中からの出土である。

113は土師器坏破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。底部は切り離し後ナデ調整である。埋土中からの出土である。

114は土師器坏破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面は回転ナデである。内面はミガキ調整で黒色処理されている。回転糸切痕を有する。埋土中からの出土である。

115は土師器坏破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。底部は切り離し後ナデ調整である。埋土中からの出土である。

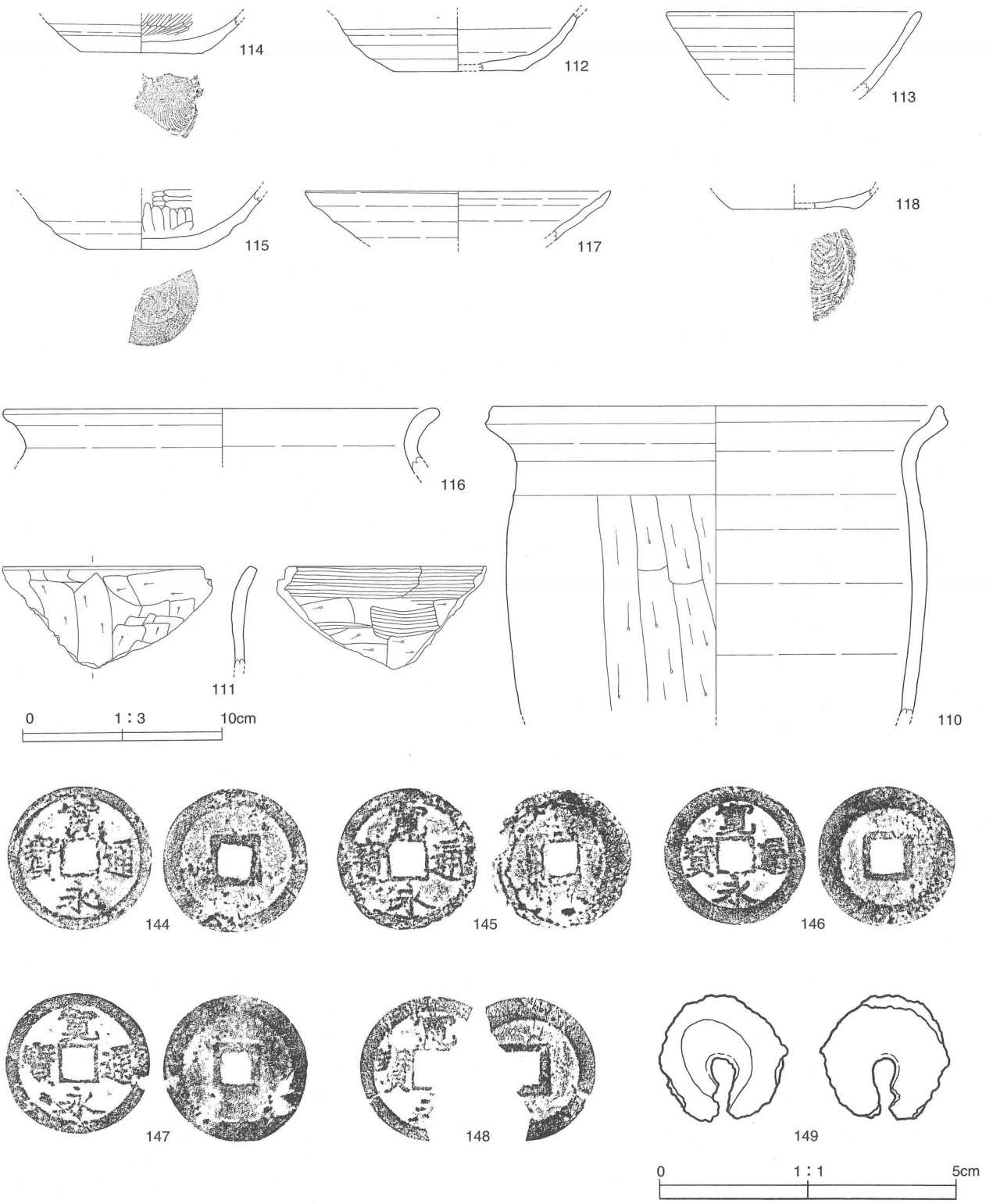
116は土師器甕破片で、口縁部のみ1/4以下残存する。内外面ともにヨコナデ調整である。埋土中からの出土である。

117は土師器坏破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面は回転ナデである。埋土中からの出土である。

118は土師器甕底部破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は回転糸切である。埋土中からの出土である。

144～148の５点は寛永通寶である。いずれも直径2.4㎝、金属の種類は銅、鋳造年代は1636年以降。銅錆の緑青が付着している。同時期の古銭であり古寛永に属する。底面からの出土である。

149は煙管の火皿部分をつぶしたものと思われる。扁平して直径は約2.0㎝である。キセルの火皿の部分をつぶし銭貨と見なす、いわゆる「雁首銭」とする向きもあり否定はできない。同地点から僅かにサシも出ている。埋土は人為的に埋め戻されていることに加え、銭貨が５枚といわゆる雁首銭１枚、計６枚が床直上から出土している。これらの客観的状況から「六道銭」を意味するものであると判断している（註２）。



第36図　ＲＤ190土坑出土遺物

ＲＧ110溝跡

遺　構（第37図、写真図版18）

Ｂ区６Ｍ20ｆに位置する。底面の標高は124.81ｍである。ＲＧ110は第20次調査（平成16年度）において検出している。そこから延びる溝である。南西から北東に向き長さ1.8ｍ、幅は60～70㎝、深さ25㎝を測る。埋土上層から十和田ａテフラを検出したことから、平安時代の溝跡であると考えている。遺物は出土していない。

ＲＧ138溝跡

遺　構（第37・38図、写真図版17）

Ａ区５Ｊ24ｌ～６Ｋ15ｑに位置する。底面の標高は126.53～126.68ｍで、平均すると126.61ｍである。ＲＧ138は北西から南東に緩やかに下降し延びる。規模は長さ76ｍ、幅は110～200㎝、深さ35～50㎝、高低差は19㎝である。黒ボク土層上で検出されている。主な埋土層序は上層：十和田ａテフラ・暗オリーブ褐色シルト、中層：黒色粘質シルト・暗褐色粘質シルト、下層：暗オリーブ褐色粘質シルトが主体である。粘質で締りは中から弱である。溝の底面は凹凸で埋土ブロックを含む工具痕が見られ、壁はやや直角気味に立ちあがり緩やかに外傾し開く。

出土遺物（第39図、写真図版26）

掲載遺物は土師器甕の破片が３点、坏が７点、計10点である。

119は土師器甕の破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好である。埋土中からの出土である。

120は土師器坏の破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整で黒色処理をしている。ベルト埋土中からの出土である。

121・122は土師器甕の破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。外面はヘラナデまたはハケメ調整、内面はハケメまたはケズリ調整である。胎土・焼成ともに不良である。ベルト埋土中からの出土である。

123は土師器甕の破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。外面はハケメ調整である。胎土は良好だが焼成は不良である。埋土中からの出土である。

124～126は土師器坏の破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。124は内外面ともにヨコナデ調整、125は内外面ともに回転ナデ調整である。126は外面がケズリ調整、内面はミガキ調整である。埋土中からの出土である。

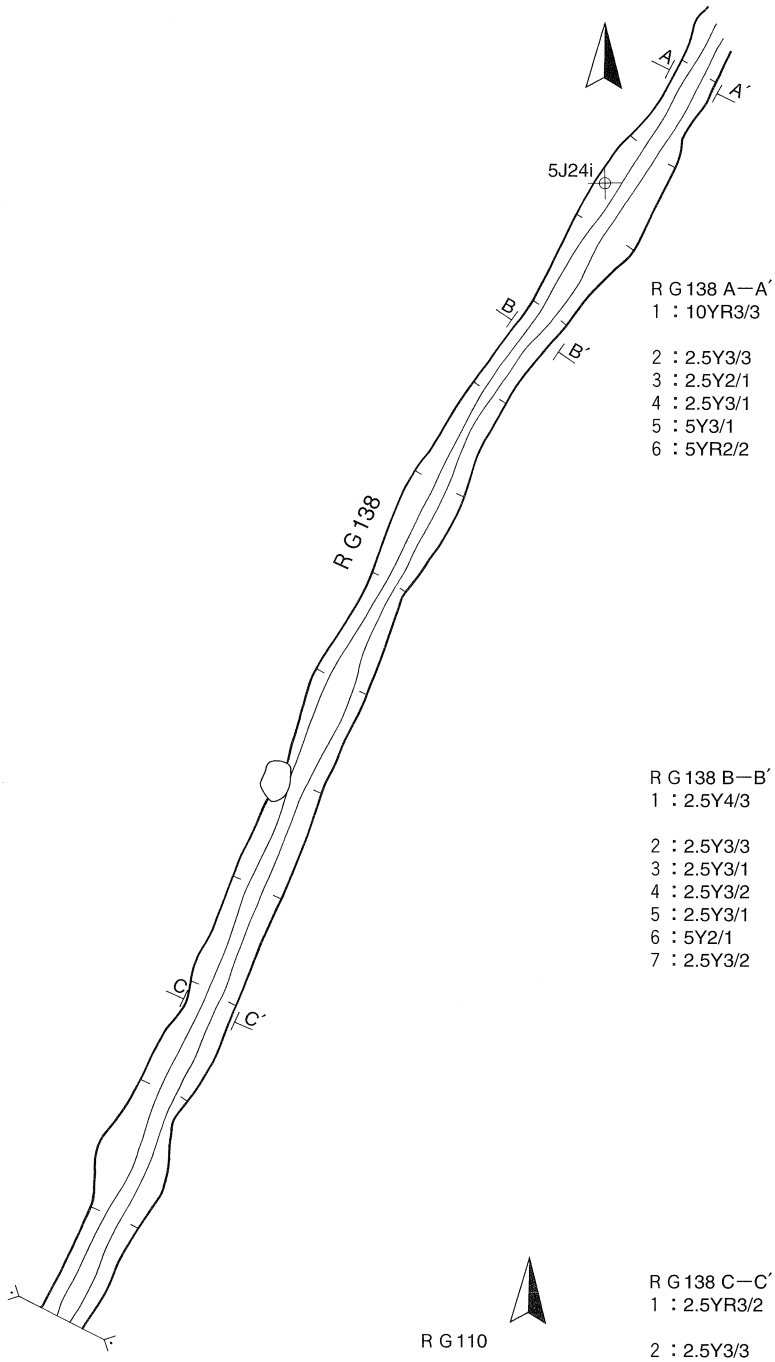
127は土師器坏の破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。切り離し後、ナデ調整をしている。埋土中からの出土である。

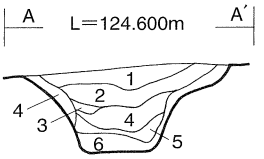
128は土師器坏の破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。切り離し後、ナデ調整をしている。埋土中からの出土である。

ＲＧ139溝跡

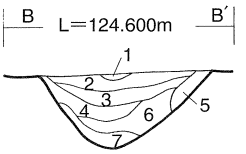
遺　構（第38図、写真図版17・18）

Ａ区６Ｋ８ｄ～６Ｋ13ｑに位置する。底面の標高は124.35～124.39ｍで、平均すると126.37ｍである。ＲＧ139はＲＧ138に切られてスタートし北西から南東に緩やかに下降し延びる。規模は長さ35ｍ、幅は50～110㎝、深さ15～24㎝、高低差は６㎝である。黒ボク土層上から検出されている。埋土上層には十和田ａテフラを含む。埋土層序は上層が黒色粘質シルト、下層が黒褐色粘質シルトで占められている。粘質で締りは中から弱である。溝の底面は平坦で壁は緩やかに外傾し立ち上がる。

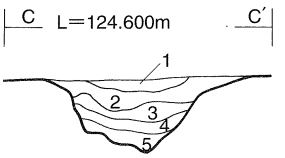




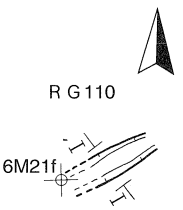
R G 138 A—A′
1：10YR3/3　暗褐色粘質シルト　所々細粒砂ラミネあり　十和田a降下火山灰混入　粘性なし　締り強
2：2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト　粘性なし　締り強
3：2.5Y2/1　黒色粘質シルト　細粒砂混入　粘性なし　締り中
4：2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　粘性なし　締り中
5：5Y3/1　オリーブ黒色砂質シルト　粘性なし　締り中
6：5YR2/2　オリーブ黒色粘質シルト　粘性なし　締り中

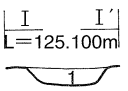


R G 138 B—B′
1：2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト　十和田a降下火山灰ブロック混入　粘性なし　締り中
2：2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト　微量細粒砂混入　粘性なし　締り強
3：2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　細粒砂ラミネ含む　粘性なし　締り強
4：2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　粘性なし　締り強
5：2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　粘性なし　締り強
6：5Y2/1　黒色粘質シルト　粘性なし　締り強
7：2.5Y3/2　黒褐色粘土　有機物微量混入　粘性なし　締り中



R G 138 C—C′
1：2.5YR3/2　黒褐色シルト　細粒砂・十和田a降下火山灰ブロック混入　粘性なし　締り中
2：2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト　細粒砂混入　粘性なし　締り中
3：2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　粘性なし　締り強
4：2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　粘性なし　締り強
5：2.5Y2/1　黒色粘質シルト　粘性ややあり　締り強



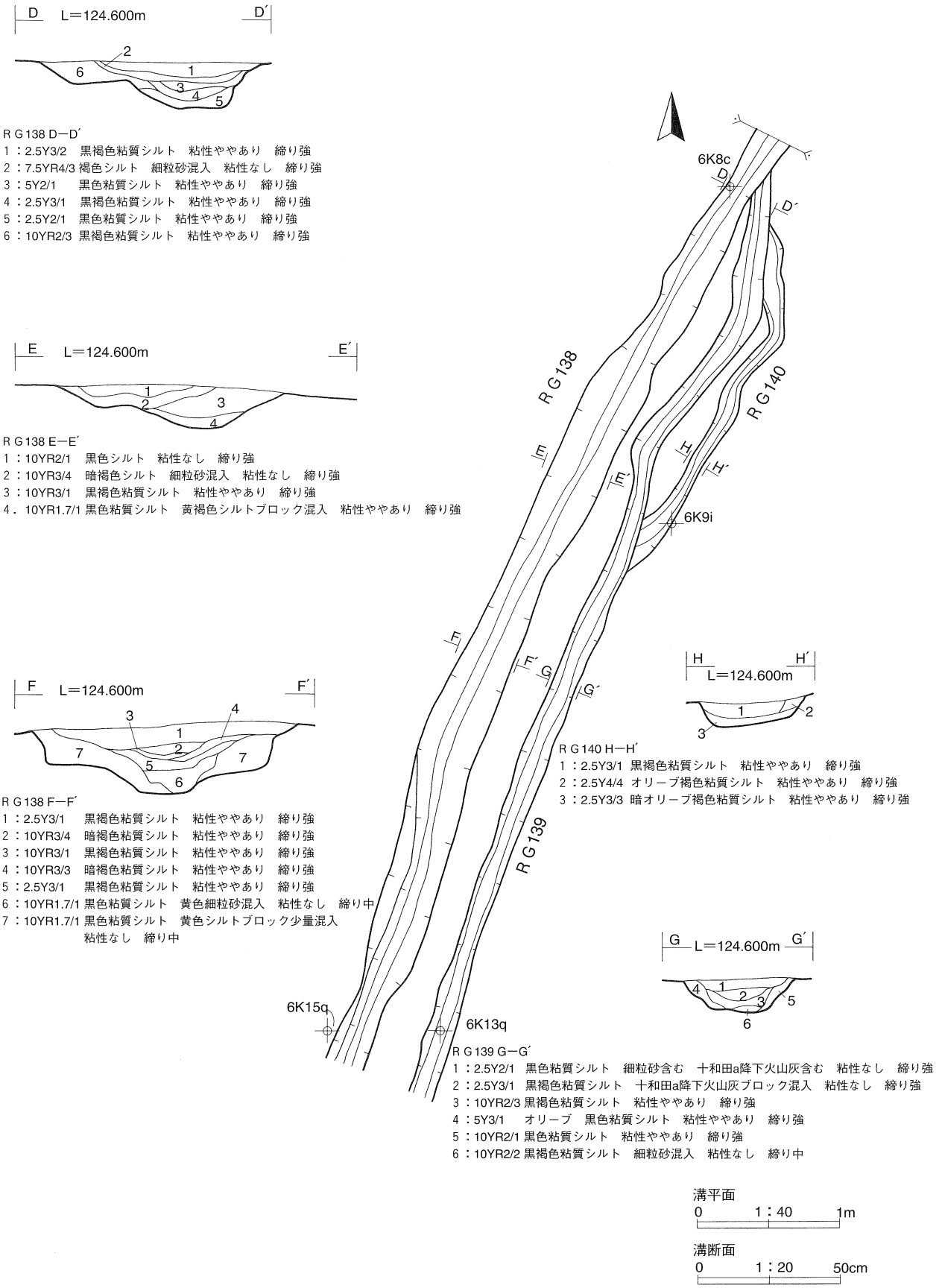


R G 110 I—I′
1：10YR2/1　黒色シルト　十和田a降下火山灰を最上層に含む　粘性なし　締り強

溝平面
0　1：40　1m

溝断面
0　1：20　50cm

第37図　R G 110・138溝跡



第38図　R G 138・139・140溝跡

出土遺物（第39図、写真図版26）

掲載遺物は土師器甕の破片が４点である。

129は土師器甕の破片で、体部のみ1/4以下残存する。外面はハケメ調整、内面はハケメ・ヘラナデ調整である。埋土中からの出土である。

130は埋土中から出土した土師器甕の破片である。底部のみ1/4以下残存する。内外面ともにハケメ調整を施している。胎土・焼成ともに不良である。

131は土師器小甕の破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。内外面ともにヨコナデ調整である。埋土中からの出土である。

132は埋土中から出土した土師器小甕の破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。内外面ともにヨコナデ調整である。

ＲＧ140溝跡

遺　構（第38図、写真図版18）

Ａ区６Ｋ７ｃ～６Ｋ９ｉに位置する。底面の標高は126.20ｍで、ＲＧ140はＲＧ138に切られてスタートし北西から南東に緩やかに下降しＲＧ139に切られ合流する。規模は長さ14ｍ、幅は50～80㎝、深さ15～18㎝、高低差は５㎝である。黒ボク土層の黒色シルトに対して埋土は褐色シルトである。埋土上層には十和田ａテフラを含む。溝の底面は平坦で壁は緩やかに外傾し立ち上がる。出土遺物はなく時期は不明である。

4　遺構外出土遺物

掲載遺物（第40図、写真図版27）は土師器坏の破片が１点、甕が８点、甑が１点、計10点である。

133は土師器甕破片である。口縁部から体部にかけて1/3残存し、内外面ともにヘラナデ調整である。胎土は粗く、内面にコゲが付着する。

134は土師器坏破片で、体部から底部にかけて1/3残存する。内外面ともにミガキ調整で黒色処理されている。底径7.4㎝の大型の坏である。

135は土師器甕破片である。口縁部から体部にかけて1/4残存する。内外面ともにハケメ調整で、口縁部と体部の境目に明瞭な段を有する。外面にススが付着する。

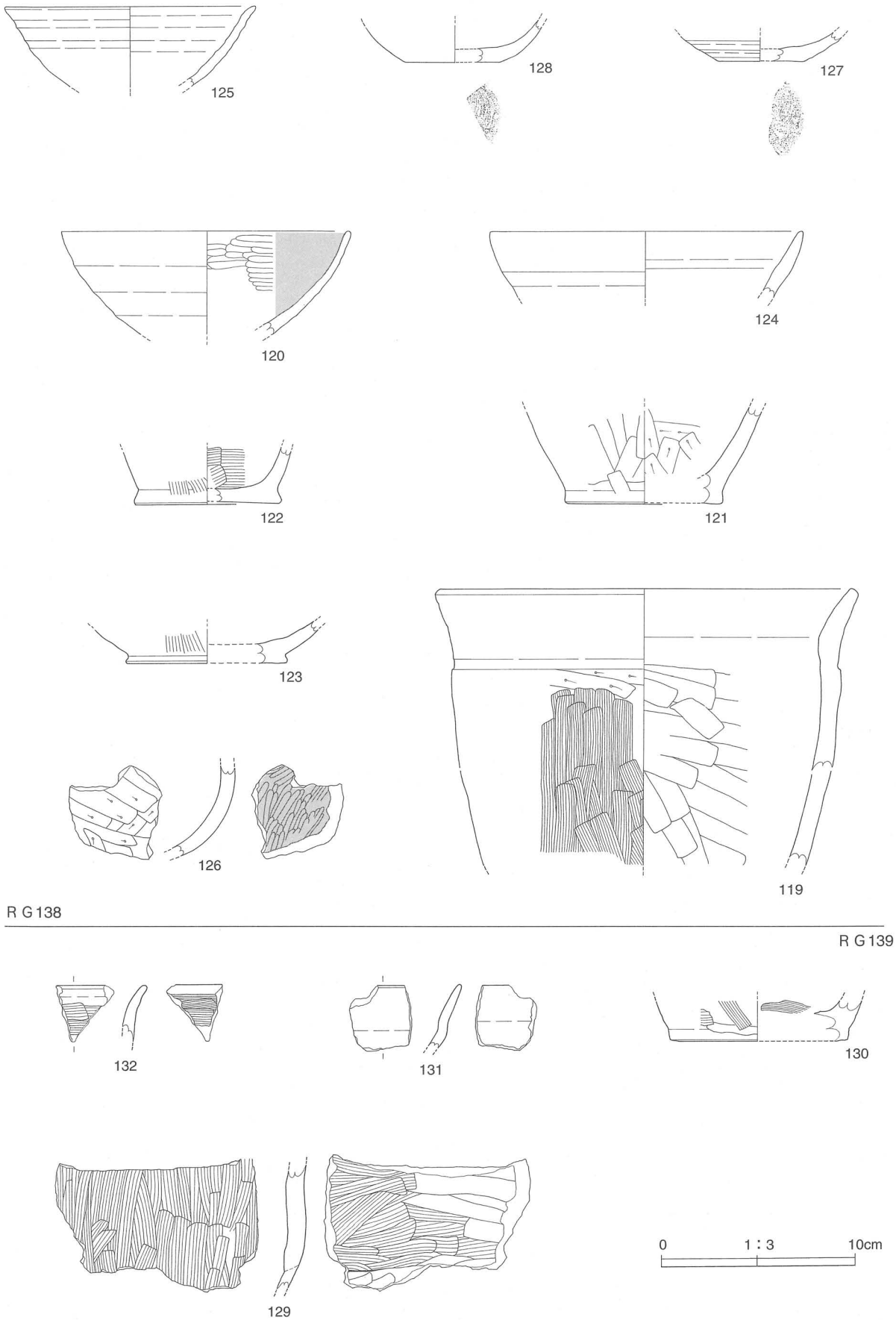
136は土師器甑破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存し、内外面ともにハケメ調整を施している。底部に６個の穿孔を有しており、この内２個は完形である。穿孔径は５～７㎜である。色調は橙色で、胎土は粗く焼成は良好である。

137は土師器甕破片で、口縁部のみ1/4以下残存する。口縁部と体部の境目に明瞭な段を有し、内外面ともにヘラナデ調整である。

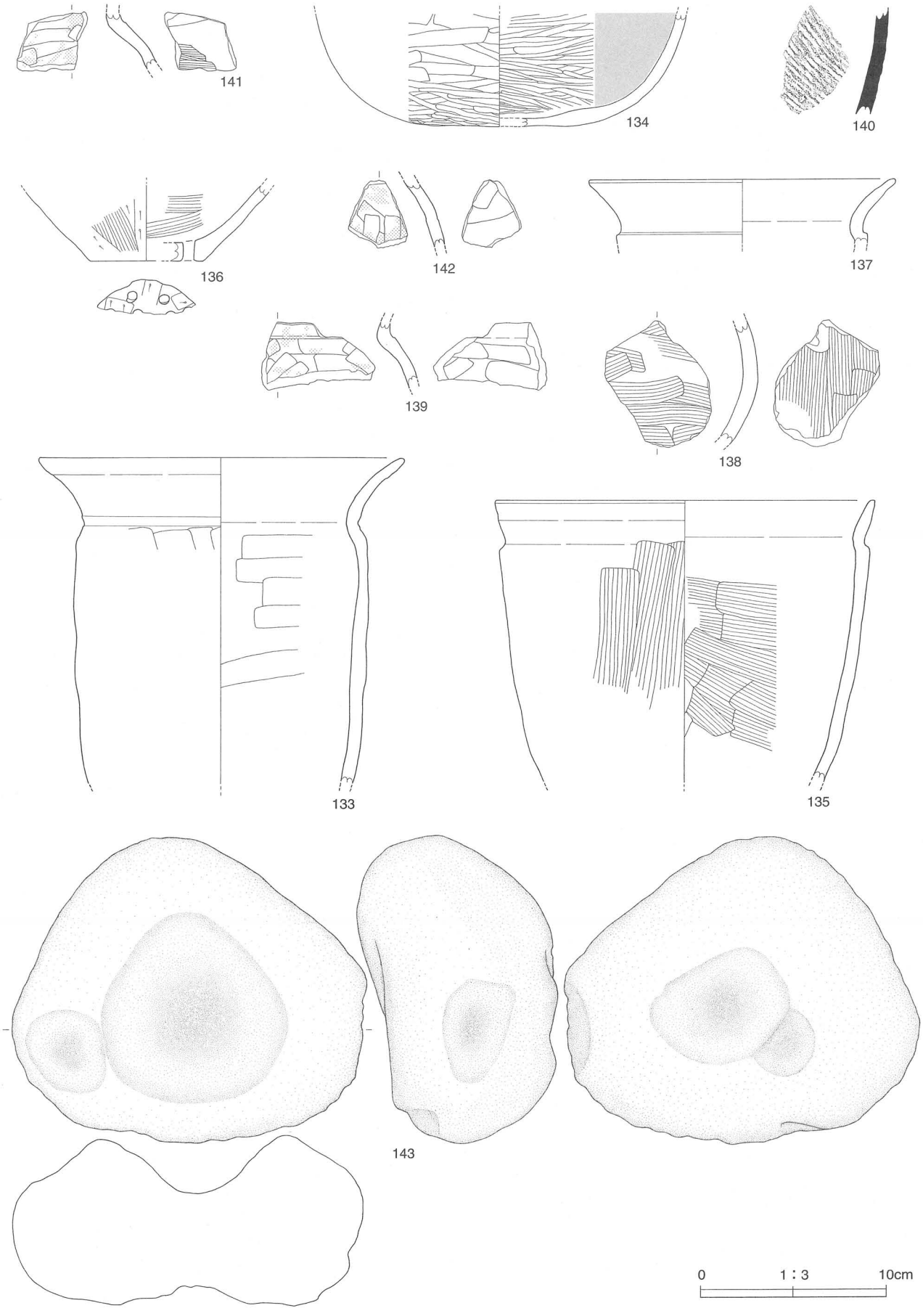
138は土師器甕破片で、体部のみ1/4以下残存する。内外面ともにハケメ調整である。胎土・焼成ともに不良で、外面にススが内面にコゲが付着する。

139・141・142は土師器甕破片である。体部のみ1/4以下残存する。外面に赤色顔料が内面に化粧土が施されており、色調は外面が浅黄橙色、内面が褐灰色である。胎土は良好で焼成は不良である。
胎土や色調および内外面における顔料の付着状況からこれらは同一個体と思われる。

140は須恵器甕の体部破片である。外面はタタキ調整、内面はナデ調整である。胎土・焼成ともに良好である。



第39図　R G 138・139溝跡出土遺物



第40図　遺構外出土遺物

143は凹石で、使用痕が５ヶ所に見られる。長さ16.7㎝、幅19.0㎝、厚さ10.8㎝、重量2310ｇを測る。石質は奥羽山脈産の安山岩である。

第２表　遺物観察表(1)

鉄製品

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種類	残存部位	長さ(㎝)	厚さ(㎝)	重量(ｇ)	備　考
24	15	21	RA085	鋤先	刃部	10.5	0.5	32.9	V字抉れ
25	15	21	RA085	鋤先	刃部	6.5	0.5	25.4	V字抉れ
26	15	21	RA085	鋤先	刃部	7.0	0.3	29.6	V字抉れ
67	22	24	RA087	角釘	ほぼ完形	5.0	0.4	6.7	両端欠損
68	22	24	RA087	角釘	完形	4.2	0.3	1.1	
69	22	24	RA087	不明	主体部	3.0	0.2	3.9	穿孔有
105	28	25	RA090	刀子	刃部～茎部	7.0	0.3	7.8	先端欠損

銭　貨

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種　類	直径(㎝)	重さ(ｇ)	金属の種類	年　代
144	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.5	銅	1636年以降
145	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.5	銅	1636年以降
146	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.7	銅	1636年以降
147	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.0	銅	1636年以降
148	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	0.7	銅	1636年以降
149	34	27	RD190	雁首銭？	1.9	1.1	銅	不明

土製品

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種類	最大径(㎝)	最小径(㎝)	厚さ(㎝)	重量(ｇ)	備　考
23	13	21	RA084	紡錘車	4.2	3.2	3.0	79.0	8㎜穿孔有
66	22	24	RA087	土　錘	1.8	0.7	2.5	4.4	3㎜穿孔有

石　器

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種類	石　質	長さ(㎝)	幅(㎝)	重量(ｇ)	産　地
143	40	27	遺構外	凹石	安山岩	16.7	19.0	2310	奥羽山脈

第3表　遺物観察表(2)

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
1	10	19	RA084	土師器	球胴甕	95	24.4	10.0	31.2	0.7	ミガキ	回転ナデ	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	○	○	木葉痕・黒斑
2	10	19	RA084	土師器	球胴甕	100	16.8	9.1	25.4	0.7	ハケメ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/1 褐灰	○	○	スス・黒斑
3	11	19	RA084	土師器	球胴甕	40	—	9.2	(20.1)	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ ハケメ	7.5YR7/6 橙	5YR6/5 橙	7.5YR7/6 橙	△	○	木葉痕・スス 黒斑
4	11	19	RA084	土師器	球胴甕	40	—	(4.9)	(13.2)	0.8	ハケメ	ヘラナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/6 明黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	△	○	黒斑
5	11	19	RA084	土師器	長胴甕	90	21.4	9.5	29.2	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄橙	△	○	スス・コゲ・黒斑
6	11	20	RA084	土師器	長胴甕	70	18.9	—	(19.0)	0.9	ミガキ	ヘラナデ	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	○	○	黒斑
7	12	20	RA084	土師器	鉢	50	20.9	8.0	10.3	0.8	ケズリ	ヘラナデ 押圧痕	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	○	○	スス・黒斑
8	12	20	RA084	土師器	小甕	100	15.5	7.8	17.5	0.8	ハケメ	ハケメ	7.5YR4/6 褐	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○	黒斑
9	12	20	RA084	土師器	小甕	85	12.2	6.2	12.9	0.5	ハケメ	ハケメ	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR3/4 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	×	○	調整痕？
10	12	20	RA084	土師器	甕	30↓	—	8.8	(6.5)	0.8	ハケメ	ハケメ	7.5YR4/6 褐	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	×	△	スス・支脚
11	12	20	RA084	土師器	甕	40	(24.2)	—	(17.0)	0.7	ハケメ	ヘラナデ	7.5YR6/6 橙	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	○	○	黒斑
12	13	20	RA084	土師器	長胴甕	40	(19.6)	—	(12.3)	0.9	ハケメ	ハケメ 上積痕	7.5YR5/6 明褐	7.5YR4/6 褐	7.5YR5/6 明褐	○	○	スス・コゲ
13	12	20	RA084	土師器	長胴甕	35	(17.2)	—	(22.4)	1.0	ハケメ ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/6 橙	10YR4/3 にぶい黄褐	○	○	スス・コゲ
14	13	20	RA084	土師器	長胴甕	30↓	(22.2)	—	(10.2)	0.8	ハケメ	ハケメ	7.5YR5/6 明褐	7.5YR4/6 褐	10YR4/6 褐	○	○	黒斑
15	13	20	RA084	土師器	長胴甕	30↓	(23.4)	—	(9.8)	0.9	ハケメ	ハケメ	10YR5/6 黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/6 黄褐	○	○	黒斑
16	12	21	RA084	土師器	坏	95	16.8	—	5.7	0.5	ミガキ	内黒・ミガキ	10YR5/6 黄褐	N1.5 黒	2.5Y 黄灰	○	○	大型・黒斑
17	12	21	RA084	土師器	坏	99	16.8	—	4.9	0.6	ミガキ	内黒・ミガキ	7.5YR6/6 橙	7.5YR1.7/1 黒	7.5YR6/6 橙	△	○	大型・黒斑
18	12	21	RA084	土師器	坏	99	15.8	—	4.8	0.6	ミガキ	内黒・ミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR1.7/1 黒	10YR4/1 褐灰	○	○	黒斑・スコリア
19	12	21	RA084	土師器	坏	45	(13.7)	—	(5.0)	0.4	ヘラナデ	内黒・ミガキ	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	10YR4/1 褐灰	○	○	黒斑
20	13	21	RA084	土師器	甕？	30↓	—	—	—	0.5	ケズリ	ケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	△	△	
21	13	21	RA084	土師器	甕？	30↓	—	—	—	0.5	ケズリ	ヘラナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい褐	△	○	スス
22	12	21	RA084	土師器	甕？	30↓	—	8.6	(2.4)	1.0	ハケメ	ヘラナデ	7.5YR4/6 褐	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	×	△	木葉痕・黒斑
27	15	21	RA085	土師器	甕	95	(17.9)	—	(19.3)	0.7	ヘラナデ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	○	○	スス・黒斑
28	15	21	RA085	土師器	坏	30↓	—	—	(4.7)	0.7	ヘラナデ ケズリ	内黒・ミガキ	7.5YR6/6 橙	7.5YR2/1 黒	10YR4/1 褐灰	○	○	

第４表　遺物観察表(3)

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
29	15	21	RA085	土師器	坏	30↓	—	—	—	0.5	ミガキ	内黒・ミガキ	10YR4/1 褐灰	10YR2/1 黒	10YR4/1 褐灰	○	△	黒斑
30	15	21	RA085	土師器	甕？	30↓	—	(8.0)	—	(0.7)	ヘラナデ	—	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	○	△	
31	15	21	RA085	土師器	甕？	30↓	—	—	—	0.4	ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	10Yr5/4 にぶい黄褐	○	○	
32	15	21	RA085	土師器	甕？	30↓	—	—	—	(0.9)	ナデ	ヘラナデ ケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	10Yr5/3 にぶい黄橙	△	○	赤色顔料付着
33	15	21	RA085	土師器	甕？	30↓	—	—	—	(0.9)	ナデ	ヘラナデ ケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	10Yr5/3 にぶい黄橙	○	○	赤色顔料付着
34	17	21	RA085	土師器	甕	30↓	(20.8)	—	(10.2)	0.7	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR7/8 橙	2.5YR6/8 橙	5YR7/8 橙	△	○	カマド燃焼部
35	17	21	RA085	土師器	小甕	40	—	6.6	(6.5)	0.4	回転ナデ ヘラナデ	ハケメ ヘラ記号	10YR4/4 褐	7.5YR4/6 褐	7.5YR3/4 明褐	○	△	回転糸切痕
36	17	21	RA085	土師器	坏	30↓	—	4.8	—	0.4	—	—	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	○	○	回転糸切痕
37	17	21	RA086	土師器	甕	30↓	(21.7)	—	(4.5)	0.6	回転ナデ	ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	○	○	
38	17	21	RA086	土師器	小甕	30↓	(12.6)	—	(—)	0.4	回転ナデ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	○	○	
39	17	21	RA086	土師器	坏	30↓	(13.0)	—	(3.8)	0.4	回転ナデ ハケメ	回転ナデ	7.5YR4/3 褐	.7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	○	○	
40	17	21	RA086	土師器	坏	30↓	—	(6.5)	(2.2)	0.4	回転ナデ	内黒・ミガキ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR1/7/1 にぶい黄褐	10YR4/1 褐灰	○	○	回転糸切痕
41	17	21	RA086	土師器	坏	30↓	—	(6.6)	(1.7)	0.4	回転ナデ ハケメ	回転ナデ	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	○	○	回転糸切痕
42	17	21	RA086	土師器	坏	30↓	(12.6)	—	(2.4)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	○	○	
43	21	22	RA087	土師器	球胴甕	95	17.3	9.2	19.5	(0.7)	ハケメ	ハケメ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○	スス・コゲ・黒斑
44	20	22	RA087	土師器	甕	90	21.7	10.2	28.3	0.5	ハケメ	ヨコナデ	10YR6/6 明黄褐	7.5YR6/3 にぶい褐	—	△	△	支脚痕・木葉痕 スス・コゲ・黒斑
45	21	22	RA087	土師器	甕	85	18.0	8.2	25.4	0.6	ケズリ	ハケメ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○	輪積痕・スス
46	20	22	RA087	土師器	甕	85	(17.4)	8.3	26.0	1.1	ケズリ	ハケメ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	△	○	木葉痕・黒斑 スス
47	21	22	RA087	土師器	甕	90	(17.8)	8.6	26.2	0.7	ハケメ	ヘラナデ	10YR7/6 橙	10YR7/6 橙	10YR7/6 橙	○	○	スス・黒斑
48	20	23	RA087	土師器	甕	60	19.4	8.2	25.3	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ	5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	7.5YR4/1 褐灰	△	△	木葉痕・スス コゲ
49	21	23	RA087	土師器	甕	60	15.9	—	22.8	0.6	ケズリ	ヘラナデ	7.5YR5/6 明褐	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	○	○	スス・コゲ・黒斑
50	20	23	RA087	土師器	甕	50	—	7.8	(22.8)	0.6	ハケメ	ハケメ	10YR7/6 明黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	○	○	木葉痕・スス コゲ・黒斑
51	21	23	RA087	土師器	鉢	90	(19.1)	—	(14.0)	0.4	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	10YR5/1 褐灰	△	○	スス・コゲ・黒斑
52	22	23	RA087	土師器	小甕	50	—	8.0	(11.4)	0.8	ハケメ	ハケメ	7.5YR4/6 褐	7.5YR4/6 褐	7.5YR5/6 明褐	○	○	カマド支脚・スス 黒斑

第5表　遺物観察表(4)

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
53	22	23	RA087	土師器	甕	30↓	—	(8.9)	(9.9)	1.2	ハケメ ヘラナデ	ヘラナデ	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR5/6 黄褐	10YR4/4 褐	×	×	スス・黒斑
54	22	23	RA087	土師器	小甕	40	—	9.5	(12.0)	0.6	ケズリ	ハケメ	7/5YR4/3 明褐	10YR5/3 にぶい黄橙	10Yr5/3 にぶい1黄橙	△	△	木葉痕・黒斑
55	22	23	RA087	土師器	小甕	95	11.3	6.0	9.1	0.5	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	10YR3/2 黒褐	○	○	スス・コゲ・黒斑
56	22	23	RA087	土師器	坏	80	16.9	—	5.7	0.6	ミガキ	内黒・ミガキ	10YR6/6 明黄褐	10YR1.7/1 黒	10YR4/4 褐	○	○	黒斑
57	22	23	RA087	土師器	坏	90	12.6	—	4.4	0.5	ミガキ ヘラナデ	内黒・ミガキ	10YR6/4 にぶい黄橙	N1.5 黒	2.5Y4/1 黄灰	○	○	スス
58	22	23	RA087	土師器	坏	40	(15.2)	—	5.1	0.5	ミガキ ケズリ	内黒・ミガキ	10YR6/6 明黄褐	10YR1.7/1 黒	10YR4/1 褐灰	○	○	黒斑
59	22	24	RA087	土師器	甕	30↓	(17.8)	—	(16.5)	0.6	ハケメ	ヘラナデ	5YR5/6 明赤褐	10YR6/4 にぶい黄褐	7.5YR5/6 明褐	△	○	
60	21	24	RA087	土師器	甕	30↓	(15.3)	—	(13.0)	0.7	ハケメ	ヘラナデ	5YR5/6 明赤褐	10YR6/4 にぶい黄褐	7.5YR5/6 明褐	△	○	
61	22	24	RA087	土師器	甕	30↓	—	7.5	—	0.6	ハケメ	ハケメ ヘラナデ	7.5YR5/6 明褐	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	△	○	
62	22	24	RA087	土師器	甕	30↓	19.8	—	9.8	0.6	ハケメ	ヘラナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/6 明褐	○	○	カマド支脚
63	22	24	RA087	土師器	甕？	30↓	—	(8.8)	—	—	ヘラナデ	ケズリ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	○	△	
64	22	24	RA087	土師器	小甕？	30↓	—	7.1	—	0.6	ケズリ	ヘラナデ	7.5YR2/1 黒	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 にぶい褐	△	×	
65	22	24	RA087	土師器	坏	30↓	(9.6)	—	(3.7)	0.6	回転ナデ ヘラナデ	内黒・ミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR2/1 黒	10YR4/1 褐灰	○	○	
70	24	24	RA088	土師器	坏	45	(18.0)	—	(4.2)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	○	○	
71	24	24	RA088	土師器	甕	30↓	(22.4)	—	(10.3)	0.3	回転ナデ	カキ目	5YR4/8 赤褐	5YR4/5 赤褐	5YR4/5 赤褐	△	△	スス
72	24	24	RA088	土師器	甕	30↓	(21.0)	—	(9.6)	0.7	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ヘラナデ	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	×	△	
73	24	24	RA088	土師器	坏	35	(15.2)	—	(3.4)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○	
74	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	(14.2)	—	(3.7)	0.4	回転ナデ	回転ナデ ミガキ	7.5YR6/6 橙	7.5YR1.7/1 黒	7.5YR6/6 橙	○	○	
75	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	(14.0)	—	(4.2)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	5YR3/6 暗赤褐	5YR3/6 暗赤褐	5YR3/6 暗赤褐	○	○	
76	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	—	(7.0)	—	0.3	—	—	7.5YR6/6 橙	2.5YR2/1 黒	10YR4/4 褐	○	○	回転糸切痕
77	24	24	RA088	土師器	甕	30↓	—	(9.4)	—	—	—	—	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	×	×	
78	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	(13.0)	—	(2.9)	0.6	回転ナデ	ミガキ	10YR3/1 黒褐	10YR1.7/1 黒	10YR4/1 褐灰	△	△	
79	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	(13.6)	—	(4.0)	0.3	回転ナデ	ミガキ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	○	○	
80	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	(11.6)	—	(3.6)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	○	○	

第６表　遺物観察表(5)

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
81	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	(12.2)	—	(3.0)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	○	○	
82	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	(14.2)	—	(2.4)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/6 明褐	○	○	
83	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	—	4.3	—	—	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	○	○	
84	24	24	RA088	土師器	坏	30↓	—	(5.6)	(2.0)	0.4	回転ナデ	ミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	10YR4/1 褐灰	○	△	回転糸切痕
86	26	25	RA089	土師器	高台付坏	30↓	—	8.4	(2.7)	0.6	回転ナデ	内黒ミガキ	5YR5/6 明赤褐	7.5YR1.7/1 黒	7.5YR5/6 明褐	○	△	回転糸切後高台接着
87	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	—	5.8	(2.7)	0.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	○	○	回転糸切痕
88	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	—	6.8	—	—	回転ナデ	ヨコナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	10YR5/1 褐灰	○	○	
89	26	25	RA089	土師器	甕？	30↓	—	—	—	—	ケズリ	ハケメ	7.5YR4/6 褐	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	△	△	
90	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	—	(6.8)	(3.2)	0.5	ヘラナデ	ヨコナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	○	○	高台剥落？
91	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	(16.9)	—	(2.9)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	○	△	
92	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	(15.0)	—	(2.4)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	○	○	
93	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	(15.5)	—	(2.6)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR4/6 褐	7.5YR4/6 褐	7.5YR4/6 褐	○	○	
94	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	—	(7.5)	—	—	—	—	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	○	○	回転糸切痕
95	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	—	—	—	0.3	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	○	○	
96	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	(12.2)	—	(2.6)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/6 橙	○	○	
97	26	25	RA089	土師器	坏	30↓	(14.0)	—	(2.5)	0.3	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	○	○	
98	26	25	RA089	土師器	甕？	30↓	(24.0)	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3褐	○	○	
100	27	25	RA090	土師器	坏	30↓	(14.2)	—	(3.9)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	○	○	
101	28	25	RA090	土師器	坏	30↓	—	5.6	—	0.5	—	回転ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	△	△	回転糸切痕
102	27	25	RA090	土師器	坏	30↓	(14.7)	(54)	(5.2)	0.5	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	○	○	
103	28	25	RA090	土師器	坏	30↓	(13.0)	—	(13.0)	0.3	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	×	△	
104	28	25	RA090	土師器	小甕	30↓	(9.2)	—	—	0.4	ハケメ	ヘラナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/1 黒褐	○	○	
106	30	25	RE016	土師器	坏	35	(13.6)	(5.4)	5.0	0.4	回転ナデ	内黒・ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR1.7/1 黒	10YR3/3 暗褐	○	○	切り離し後調整
107	30	25	RE016	土師器	甕？	30↓	—	(8.2)	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR4/2 橙	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR4/2 橙	△	△	底部ヘラ記号

第７表　遺物観察表(6)

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
108	30	25	RE016	土師器	甕	30↓	(13.0)	—	(5.0)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	10YR4/4 褐	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	○	○	
109	31	26	RD188	土師器	甕	95	(16.9)	—	(26.2)	0.6	ハケメ	ハケメ 押圧痕	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	○	○	スス・黒斑
110	34	26	RD190	土師器	甕	30↓	(22.8)	—	(15.7)	0.8	ケズリ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	△	△	
111	34	26	RD190	土師器	甕	30↓	(28.0)	—	—	0.7	ケズリ	ハケメ ケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/2 にぶい黄褐	○	○	
112	34	26	RD190	土師器	坏	30↓	—	(6.6)	(2.9)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	○	○	
113	34	26	RD190	土師器	坏	30↓	(13.0)	—	(4.5)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	○	○	
114	34	26	RD190	土師器	坏	30↓	—	(3.1)	(2.1)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR4/6 褐	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR3/2 黒褐	○	○	回転糸切痕
115	34	26	RD190	土師器	坏	30↓	—	(5.6)	(2.6)	0.4	回転ナデ	ミガキ	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/8 にぶい褐	2.5YR4/8 赤褐	○	○	切り離し後調整
116	34	26	RD190	土師器	坏	30↓	(22.2)	—	—	0.6	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	△	○	
117	34	26	RD190	土師器	坏	30↓	(15.6)	—	—	0.4	回転ナデ	回転ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	○	○	回転糸切痕
118	34	26	RD190	土師器	坏	30↓	—	(6.2)	—	—	—	—	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	○	○	回転糸切痕
119	37	26	RG138	土師器	坏	30↓	(21.8)	—	(15.0)	0.8	ハケメ ケズリ	ヘラナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/8 橙	10YR5/2 灰黄褐	○	○	スス・黒斑
120	37	26	RG138	土師器	坏	30↓	(15.2)	—	(5.5)	0.4	回転ナデ	内黒・ミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐	N2 黒	10YR4/1 褐灰	○	○	黒斑
121	37	26	RG138	土師器	甕	30↓	—	(8.4)	(5.0)	0.7	ヘラナデ	ケズリ	5YR5/2 灰褐	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	×	×	スス
122	37	26	RG138	土師器	小甕	30↓	—	(7.6)	(2.8)	0.6	ハケメ	ハケメ	7.5YR4/6 褐	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	△	△	スス
123	37	26	RG138	土師器	甕？	30↓	—	(8.4)	—	0.5	ハケメ	ヨコナデ	7.5YR7/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	○	○	
124	37	26	RG138	土師器	甕	30↓	(16.5)	—	—	0.7	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	10YR4/1 褐灰	△	○	
125	37	26	RG138	土師器	坏	30↓	(13.2)	—	(4.3)	0.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	○	○	
126	37	26	RG138	土師器	坏	30↓	—	—	—	0.8	ケズリ	内黒・ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	N2 黒	7.5YR7/6 橙	○	○	黒斑
127	37	26	RG138	土師器	坏	30↓	—	(4.5)	—	0.5	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	○	○	
128	37	26	RG138	土師器	坏	30↓	—	(4.5)	—	0.4	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/5 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄橙	○	○	
129	38	26	RG139	土師器	甕	30↓	—	—	—	0.9	ハケメ	ハケメ ヘラナデ	7.5YR4/6 褐	7.5Y3/2 黒褐	7.5YR4/6 褐	○	○	
130	38	26	RG139	土師器	甕？	30↓	—	(9.2)	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/6 橙	△	△	
131	38	26	RG139	土師器	小甕？	30↓	—	—	—	0.4	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/6 橙	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	○	○	

第８表　遺物観察表(7)

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
132	38	26	RG139	土師器	小甕？	30↓	—	—	—	0.4	ハケメ	ヨコナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR3/1 黒褐	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○	
133	39	27	遺構外	土師器	甕	30↓	(19.6)	—	(17.8)	0.8	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR3/2 黒褐	N2 黒	△	△	スス・コゲ・黒斑
134	39	27	遺構外	土師器	坏	30↓	—	7.4	(6.0)	0.6	ヘラナデ ミガキ	内黒・ミガキ	10YR6/4 にぶい黄橙	N2 黒	2.5Y4/1 灰	○	○	黒斑
135	39	27	遺構外	土師器	甕	30↓	(20.6)	—	(15.4)	0.6	ハケメ	ハケメ	10YR3/2 黒	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR4/6 褐	△	○	
136	39	27	遺構外	土師器	甑	30↓	—	(6.0)	(3.8)	0.6	ハケメ ケズリ	ハケメ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 橙	△	○	穿孔２個
137	39	27	遺構外	土師器	甕	30↓	(16.4)	—	—	0.6	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	○	○	
138	39	27	遺構外	土師器	甕？	30↓	—	—	—	0.8	ハケメ	ハケメ	7.5YR1.7/1 黒	7.5YR2/2 黒褐	7.5YR2/2 黒褐	△	△	スス
139	39	27	遺構外	土師器	甕？	30↓	—	—	—	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR6/1 褐灰	10YR8/4 浅黄橙	○	△	(外)赤色顔料 (内)化粧土
141	39	27	遺構外	土師器	甕？	30↓	—	—	—	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	○	△	(外)赤色顔料 (内)化粧土
142	39	27	遺構外	土師器	甕？	30↓	—	—	—	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	○	△	(外)赤色顔料 (内)化粧土

須恵器

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
99	28	25	RA090	須恵器	甕	30↓	—	—	—	0.8	タタキ	当具	7.5Y2/1 黒	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	○	○	
140	39	27	遺構外	須恵器	甕？	30↓	—	—	—	0.7	タタキ	回転ナデ	N4 灰	N4 灰	5PB 暗青灰	○	○	

陶器

掲載番号	図版	写図	出土遺構	種別	器種	残存率	法量(cm)				調整		色調			胎土	焼成	備考
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	外面	内面	断面			
85	24	24	RA088	陶器	碗	30↓	(10.2)	—	(4.5)	0.5	藁灰釉	藁灰釉	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	△	△	在地産19世紀

＊残存率は％で表し、30％以下のものは特に「30↓」とした。

＊法量の数値は、残存値・推定値を(　)で表すこととしたが、器高は1/3以上残存するものについて(　)としそれ以下は—とした。

＊胎土は「精良」○、「やや粗」△、「粗」×とした。

＊焼成は「良好」○、「やや不良」△、「不良」×とした。

Ⅴ まとめ

1 遺　　構

（1）第25次調査との関係

平成16年度、本宮熊堂Ｂ遺跡第27次調査（盛岡市）と本宮熊堂Ｂ遺跡第25次調査（国土交通省）は並行して発掘調査が行われ、今次調査Ａ区北端は第25次調査区と接する。標高差は20～30㎝を以って今次調査区が高い。第25次調査においては、古代の竪穴住居跡が43棟確認されている（奈良時代22棟、平安時代15棟、時期不明６棟）。調査区境にまたがり共通する遺構は十和田ａテフラを含むＲＧ138溝跡とＲＤ189近世土坑である。

第25次調査と合わせて想定されることは、奈良時代、平安時代の住居跡ともに一定の場所でまとまりをもって存在するということである。奈良時代の竪穴住居跡は大型の住居を中心に、周りに小型の住居を配置する形で存在する（第42図）。住居間の距離は10ｍ以内である。ＲＡ084・ＲＡ085・ＲＡ087竪穴住居跡はこのまとまりに含まれる小型の住居跡である。まとまりの中心になる大型の住居は第25次調査のＲＡ098竪穴住居跡である。規模は東西5.58ｍ、南北6.01ｍ、深さは最大で49㎝を測る。他の住居よりも20～30㎝高い場所に立地する。このような集落のまとまりが、奈良時代で３ヵ所、平安時代で１～２（?）ヵ所認められた。

さらに、奈良時代の集落は河岸段丘面の縁に沿って帯状に存在し、平安時代の集落はそれよりも南側に存在する。集落は奈良時代から平安時代へと時間の経過とともにやや南に移動していることがわかった。そして、平安時代になると住居の大きさはほぼ統一され差異が見られなくなる（註３）。

（2）調査区及び遺構の特徴

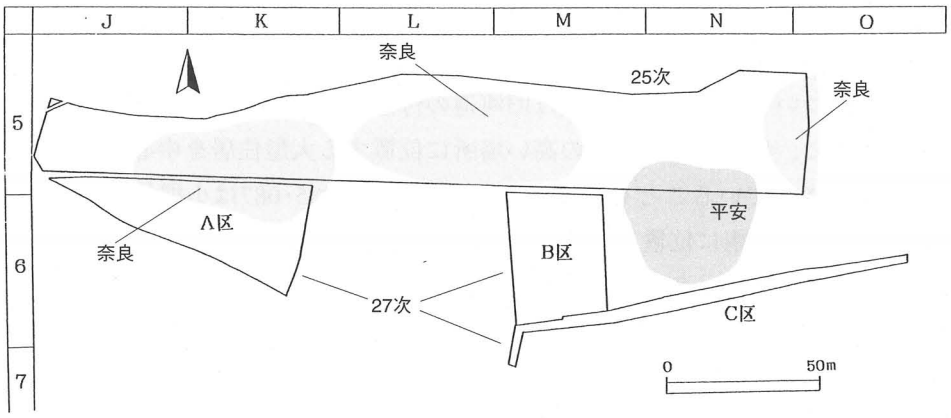
全体地形から見た調査区及び遺構の特徴について述べる。

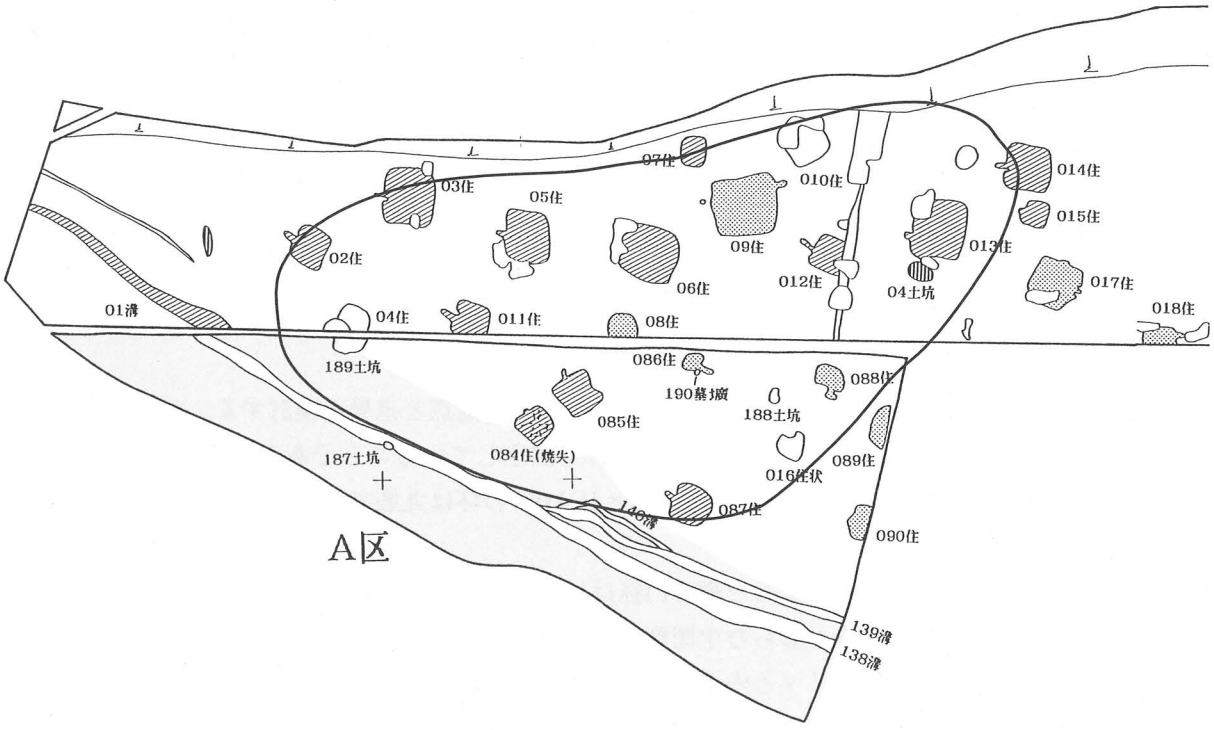
今次調査区はＡ区、Ｂ区、Ｃ区に分かれ総調査面積は3,661㎡である。Ａ区は北西寄りに位置し三角形を呈している。面積は2,113㎡、平均標高は124.00ｍである。本遺跡は雫石川が形成した扇状地形の低位河岸段丘上にあり、Ａ区の南端は段丘の変換点に当たる。変換点に沿うように現況では水路になっていた。そして、地形の落ち込みは旧河道となる。旧河道には黒ボク土層が堆積し黒く帯状を成している。規模は長さ71ｍ、幅９～11.5ｍ、最大層厚50㎝を測る。黒ボク土層上には十和田ａテフラを含むＲＧ138・139・140の溝跡３条が東西に走る。

竪穴住居跡は７棟検出しており３棟が奈良時代、４棟が平安時代の竪穴住居跡である。奈良時代の竪穴住居跡は旧河道の縁辺付近に位置し、平安時代の竪穴住居跡はそれよりも北方向にやや離れ５～30㎝高いところに位置する。ＲＡ084焼失住居とＲＡ087の奈良時代の竪穴住居跡は良好に残存するが、それ以外の竪穴住居跡は削平や攪乱を受けている。他に住居状遺構ＲＥ016、土坑ＲＤ187～189、墓壙ＲＤ190を検出した。古代から近世までの遺構があり集落と密接に関係するエリアであると言える。

Ｂ区は第20次調査に挟まれるエリアで、面積は1,128㎡である。平均標高は124.54ｍを測る。両脇のエリアからは古代の竪穴住居跡22棟が確認されている。しかし、Ｂ区においては十和田ａテフラを含む溝跡１条ＲＧ110のみの検出であった。第20次調査区とは全く接するわけであるが、ピット１個も存在せず遺構の空白域であった。このエリアは広場的な意味合いを有し多目的に利用されたのではないかと想像される。

Ｃ区は現況水路に当たり、面積は420㎡、平均標高は124.59ｍである。遺構は検出せず出土遺物は





凡例

- 縄文時代の遺構
- 奈良時代の住居跡
- 平安時代の住居跡・遺構
- 時期不明の遺構
- カクラン
- 黒ボク土

第41図　第25・27次遺構全体図

土師器の小破片が２点だけであった。

（3）ま　と　め

住居群の位置関係についてだが、奈良時代は旧河道の付近且つ段丘面の縁にそって住居が存在することがわかった。さらに、集落はやや標高の高い場所に位置する大型住居を中心として周りに小型住居を配置する形で構成されていることも見えてきた。ＲＡ084･085･087は小型住居に当たる。平安時代の住居群はそれよりもやや南に位置し、住居の規模はほぼ統一される。

黒ボク土層面において十和田ａテフラを含むＲＧ138～140溝跡を良好な状態で検出できた。黒ボク土層は旧河道跡に生成される土壌として雫石川流域でよく見られる。黒ボク土層中に遺構・遺物は無いものと見て除去または無視することがあるが、火山灰（十和田ａテフラ）を手がかりに削平することなく検出できたことは一つの成果であったと考えている（註５）。

2　遺　　物

（1）土師器の細分比較

遺物の大部分は奈良時代の３棟の竪穴住居跡から出土した土師器の甕と坏である。その内、まとまって遺物が出土したＲＡ084とＲＡ087の２棟について比較検討し考察を加えることにした（表はＲＡ085を含む）。

分類基準は、器種で分けて坏・甕・鉢とした。さらに器種を細分し、坏については体部の中位に段を有するものをⅠ群、下位に段を有するものをⅡ群、段が無いものをⅢ群とした。さらに口縁部の外形で細分し口縁部が外反するものをａ、外傾するものをｂ、屈曲するものをｃとした。甕はⅠ群長胴甕、Ⅱ群中間甕（長胴甕と球胴甕の中間に位置する甕で体部にふくらみを有する）。Ⅲ群球胴甕、Ⅳ群小甕とした。そして、それぞれについて口縁形が外反するものをａ、外傾するものをｂ、屈折するものをｃとした。鉢は２点であるので器種の細分をせず、口縁形が外反するものをａ、外傾するものをｂ、屈曲するものをｃとした。

まずは、ＲＡ084とＲＡ087の竪穴住居跡について器種の共通点と差異を検討する。共通して言えることは、坏、長胴甕、球胴甕、小甕、鉢がそれぞれで出土していることである。ＲＡ087の坏58は小型で平底であると思われる。それ以外のＲＡ084とＲＡ087の坏は丸底で僅かでも段を有することからお互いが類似する。

ＲＡ084とＲＡ087の両者から出土した甕の口径は16～21㎝、器高は25～28㎝を測りそれほど大きな差異はない。ただし、体部中央が膨らむ中間甕はＲＡ084にあってＲＡ087には無い。さらに口縁形で見てみると、坏は外傾するｂタイプと内湾するｃタイプに分けられる。甕と鉢は、口縁部がはっきりと外反するａタイプ、外傾するｂタイプ、屈折するｃタイプに分かれる。また、ｂタイプはａとｃのどちらかのタイプに寄る。長胴甕で言えば、屈折するｃタイプはＲＡ087からは43・45・48の３点出土しているがＲＡ084には無い。球胴甕は外反するａタイプがＲＡ084から出土している。小甕と鉢はｂタイプ又はｃタイプである（註４）。

この口縁形ａｂｃのタイプの分類から見えてきたことは、口縁形と胎土、整形との間には決まった関係性が見られるというころである。まず外反するａのタイプであるが、頸部は無段で口縁部と体部の境目に明瞭な段を有する。器厚は0.7～1.0㎝と厚く、胎土焼成とも良好で硬く締まるものが多い。ＲＡ084の12・13・15は好例である。一方、屈折するｃタイプは頸部に１～３条の段を有する。口唇部の端部に沈線を有するものもある。器厚は0.6～0.7㎝と薄く胎土は粗く焼成も不良であるが、丁寧

な整形が施されている。ススやコゲが付着するものがあり使用頻度は高かったと思われる。ＲＡ084の２・５、ＲＡ087の43・45・46・48は好例である。また、タイプｂはａかｂどちらか寄りの傾向を示す。甕と鉢に限って総じて言えることは、ＲＡ084はａまたはｂ-ａタイプが主流（6/11点）であり、ＲＡ084はｃまたはｂ-ｃタイプが主流（7/11点）を成しているということである。

坏について言えることは、体部に段を持つ内黒丸底がＲＡ084、ＲＡ087共に主体であるが、内面に段を持つ古手と思われる坏がＲＡ084から出土しているのに対して、ＲＡ087からは、小ぶりで平底の新し目の坏が出土している。この２点だけを取ればＲＡ084の方がやや古いと言えそうだが、時間差を決定するには極めて弱い。両竪穴住居跡ともに、時期は７世紀末葉から８世紀初頭であろうと推測される。

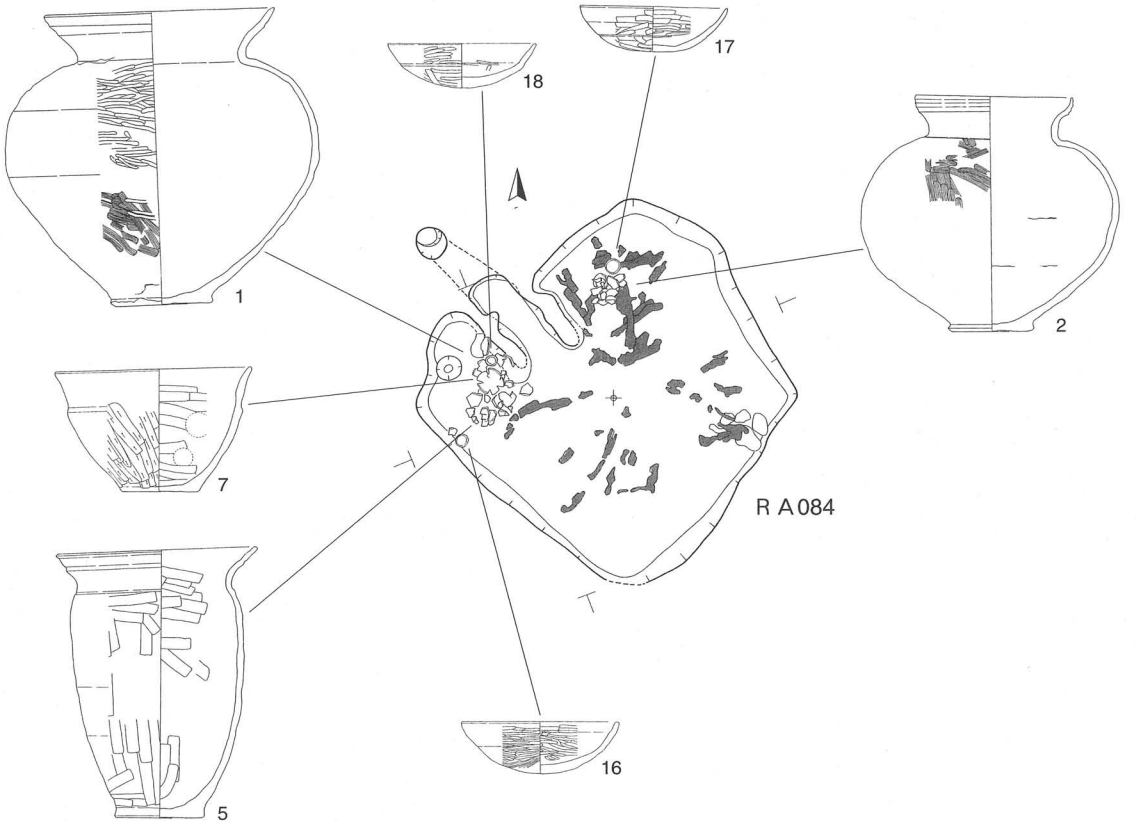
（２）酒美平遺跡Ⅱとの遺物比較

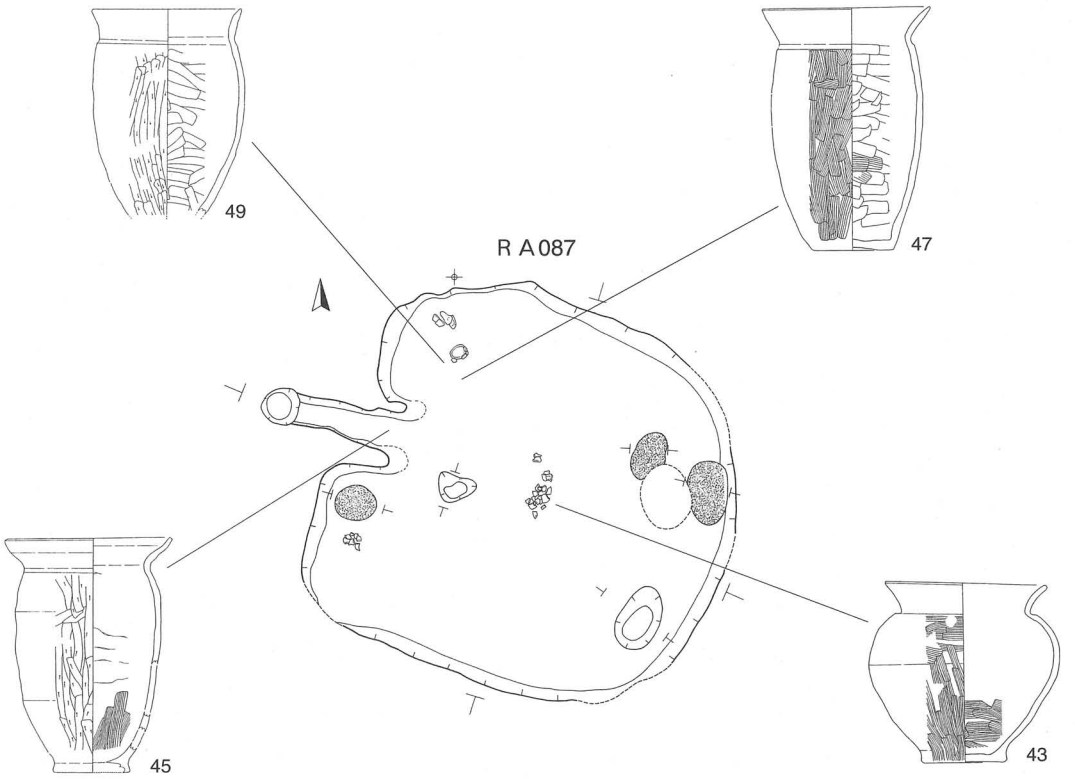
第９表で本宮熊堂Ｂ遺跡第27次調査竪穴住居跡ＲＡ084・ＲＡ087の出土土器と青森県八戸市酒美平遺跡Ⅱ竪穴住居跡ＳＩ17・ＳＩ18の出土土器を比較した。酒美平遺跡Ⅱは遺物の特徴から飛鳥～奈良時代の遺跡で、本宮熊堂Ｂ遺跡第27次調査の７世紀末葉から８世紀初頭の時期と重なる。

酒美平遺跡ⅡＳＩ17の２は口径18.0㎝、４は16.6㎝、体部に段の無い大型の坏である。甕では長胴甕・球胴甕・小甕が出土している。５の球胴甕は口縁端部が屈折する。体部はヨコナデの後にミガキ調整が施され丁寧に整形されている。胴部外面の中央部分と口縁部、内面の中央部分にはススが付着し使用頻度が高かったと推測される。

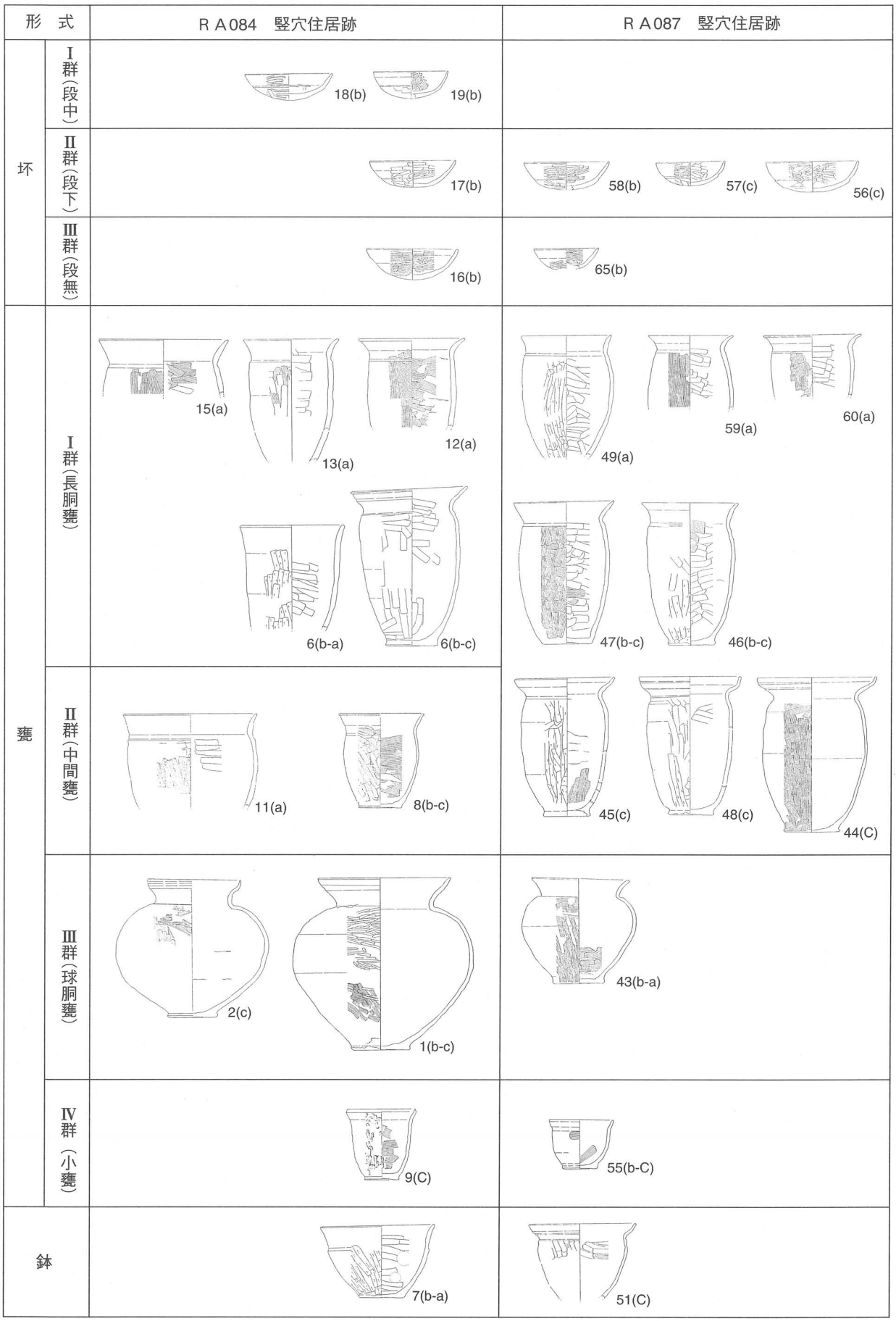
第９表　土器細分一覧

器　種	器種の細分	口縁形	ＲＡ084	ＲＡ085	ＲＡ087	ＳＩ17	ＳＩ18
坏	Ⅰ群段中	A:外反					*1
		B:外傾	18・19			*3	*3
		C:内湾					*2
	Ⅱ群段下	A:外反					
		B:外傾	17		58	*1	
		C:内湾		(28)	56・57		
	Ⅲ群段なし	A:外反					
		B:外傾			65	*2・*4	
		C:内湾	16				4
甕	Ⅰ群長胴甕	A:外反	12・13・15		46・59・60	*11・12	
		B:外傾	5・6・(14)		47・49・62	*9・10	8・*9・10・*13
		C:屈折		27	44・45・48		*12
	Ⅱ群中間甕	A:外反	11				
		B:外傾	8				
		C:屈折					
	Ⅲ群球胴甕	A:外反					*11
		B:外傾	1		43		
		C:屈折	2			*5	
	Ⅳ群小甕	A:外反					*6
		B:外傾			55		*7
		C:屈折	9			*6	
鉢		A:外反					
		B:外傾	7				
		C:屈折			51		

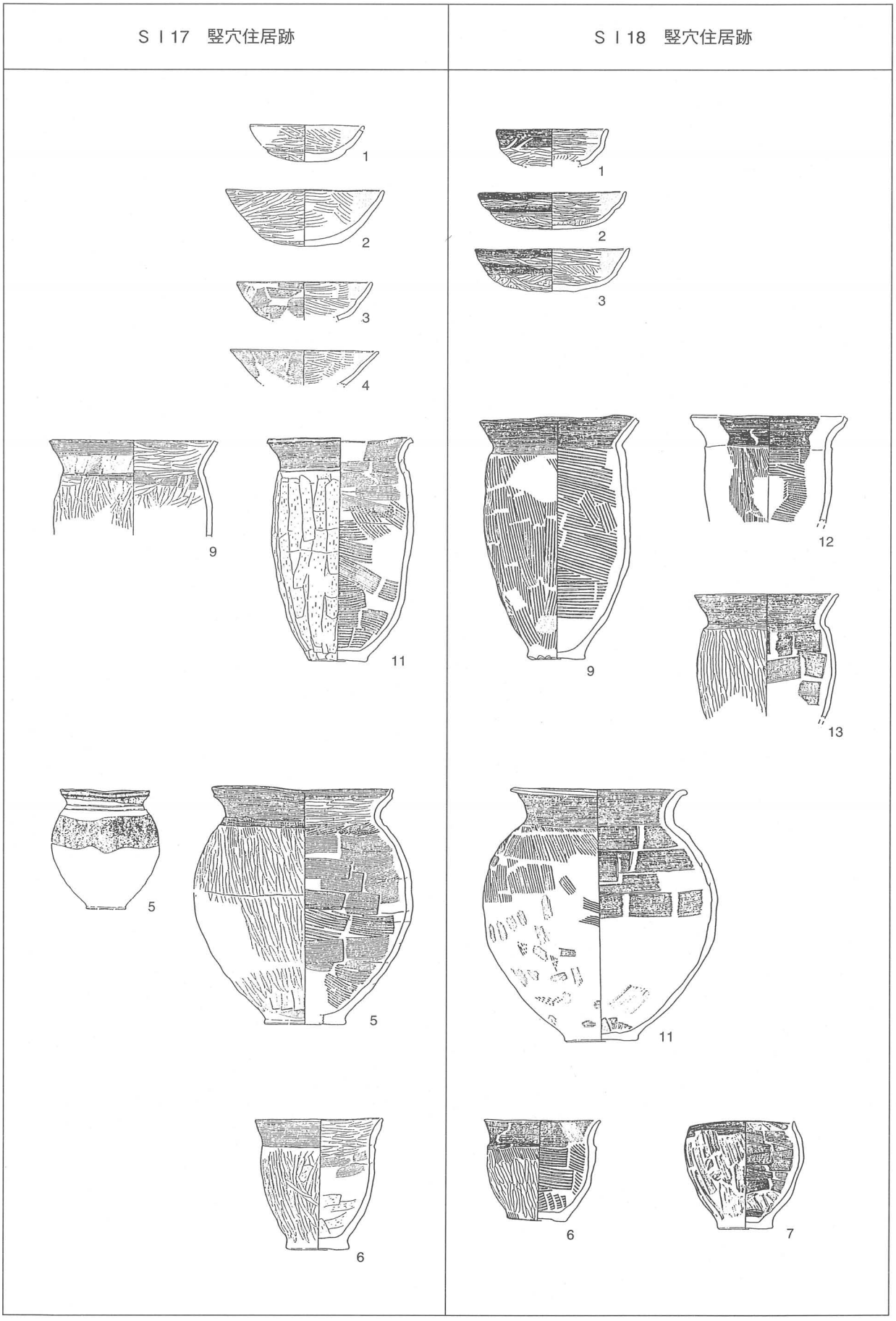




第42図　R A 084・087竪穴住居跡遺物出土状況



第43図　ＲＡ084・087竪穴住居跡土器集成図



第44図　ＳＩ17・18竪穴住居跡土器集成図

同じくＳＩ18の１は坏で口縁端部が外反する。２と３の坏は口径が17㎝以上で大型である。甕はＳＩ18においても同様、長胴甕・球胴甕・小甕が出土している。供膳具としての坏、煮沸具としての長胴甕・小甕、貯蔵具としての球胴甕。これら土器の関係は同一時間幅の内で日常的に使用されたことを意味する普遍的セット関係と考える。12の甕の口縁は屈折しその端部に僅かな抉れ調整が見られる。同様の抉れ調整がＲＡ084、RA087の中にも見られる。

ＲＡ084・087、ＳＩ17・18が存在した７世紀末葉～８世紀前葉には両地域ともに東北中部または南部の影響がより強く波及していると考えられる（註６）。

（３）ま と め

掲載点数はＲＡ084が23点、ＲＡ087が27点である。両竪穴住居跡から出土した遺物は、量的な多さだけでなく残存状態が良好であったため、どのような土器のセット関係をもって同一時間幅の中で使用されていたのかを把握するのに好例であった。また、同時期である青森県八戸市酒美平遺跡Ⅱの土器と比較分析することによって、より普遍的な土器のセット関係について確認することができた。細分分析に至っては、口縁が屈折する甕は丁寧な整形が施されており、スス等が多く付着していることから使用頻度が高かったものと考えている。口縁が屈折するｃタイプの甕は器厚が薄く火のまわりが良く重宝されたものと推測する。類似する土器が青森県八戸市酒美平遺跡Ⅱから出土していることに鑑み、文化的な影響関係があったものと考えられる。二戸市荒谷Ａ遺跡・同市上田面遺跡の出土甕類の中に口縁部が屈折するｃタイプと類似するものが見られる（註７）。また、同時期の坏や甕の外形的特徴を捉えると、仙台市郡山遺跡・蔵王町塩沢北遺跡（７世紀後葉から８初頭）、仙台市六反田遺跡・下ノ内遺跡・利府町郷楽遺跡（８世紀前半）の土器に類似するところがある（註８）。東北北部のみならず中部・南部の文化的影響をも少なからず受けていると思われる。

註

（１）吉田・金子2004『本宮熊堂Ａ遺跡第17次発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター453集ｐ１引用。＜参考・引用文献＞岩手県滝沢村教育委員会2000「岩手山の地質」滝沢村文化財調査報告書第32集／活断層研究会1992「日本の活断層」東京大学出版会／川村信人「日本列島最古の化石海洋プレートー早池峰帯の古生代付加体－」／地震調査研究推進本部地震調査委員会2001「北上低地帯西断層帯の評価」

（２）墓に銭貨を副葬する、いわゆる「六道銭」の風習は、平安時代の中頃以降にわが国に広まった。浄土信仰における六道絵によるものと考えられる。考古学的には、各地の古代末から鎌倉時代にかけての墓にこの風習の萌芽と思われる銭貨の共伴事例が認められる。そして室町時代の後半頃には６枚の銭貨を供える風習として一般化して、江戸時代に引継がれてきたことが分かってきている（阿部・佐藤1997：ｐ200）。

（３）本宮熊堂Ｂ第25次調査と合わせて遺構の関連から分かった成果である。本宮熊堂Ｂ第25次調査報告書を一読願いたい。

（４）ここでいうタイプとはType＝型式のことではなく外形の意味で用いている。

（５）「黒ボク土（黒色腐植質火山灰土）は、火山粉砕物（軽石、火山灰、テフラ）の土壌化に伴い黒色の腐植が著しく集積して形成された土壌である。火山活動の静穏期には被植が回復し、土壌生成作用で風化が進み腐植層が形成される。黒色腐植層が生成される成因はテフラ中の活性アルミニュームとイネ科起源の植物珪酸体（Ｐ・Ｏ）が結合し腐植化を促進させるためである。したがって、黒色腐植層は草原植生下において進行する。草原植生は、自然あるいは人為的（森林伐採・火災・焼畑）に起こり得る。」（佐瀬1991：ｐ49～52）
※上記は佐瀬氏の論文の一部を黒ボク土層の生成に関わり筆者が要約したものである。

（６）口縁の上端が屈折し受け口状になるタイプの土器ＲＡ084の２、ＲＡ087の35、ＳＩ17の５、ＳＩ18の12は７世紀後葉～８世紀前葉の時期と考えられる（宇部2002：ｐ251）。

（７）二戸市荒谷Ａ・上田面遺跡、米沢遺跡、一戸町上野遺跡らの甕類の中に口縁が屈折し受け口状になるものが比較的多く存在する。（集落遺跡検討会2004：ｐ９、ｐ17、ｐ36、ｐ39）

（８）【７世紀後葉から８世紀初頭】

仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衛段階、蔵王町塩沢北遺跡１・２号住居跡出土資料を基準とする。

【８世紀前半】

仙台市六反田遺跡１・６・７号住居跡、下ノ内遺跡ＳＩ11住居跡、利府町郷楽遺跡第107住居跡出土資料を基準とする。

（村田2000:p45、47、48）

引用・参考文献

田中琢　1988『形式学の問題・日本考古学を学ぶ（１）』有斐閣

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『本宮熊堂Ａ遺跡第17次発掘調査報告書』453集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『本宮熊堂Ｂ遺跡第13・15・20次発掘調査報告書』第467集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『細谷地遺跡第８次発掘調査報告書』第454集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『下構遺跡第２次発掘調査報告書』第446集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『島田Ⅱ遺跡第２～４次発掘調査報告書』第450集

青森県八戸市教育委員会　2000『酒美平遺跡Ⅱ・八戸市埋蔵文化財センター調査報告書第88集』

青森県八戸市教育委員会　2002『盲堤沢（３）遺跡・八戸市埋蔵文化財センター調査報告書第92集』

阿部正光・佐藤敏幸　1997『近世の出土銭Ⅰ考古編・永井久美男編』1997兵庫県埋蔵銭調査会

宇部則保　2002『東北北部型土師器にみる地域性』「海と考古学とロマン・市川金丸先生古稀祈念献呈論集」刊行会

村田晃一　2002『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－』宮城考古学

斎藤隆・麻柄一志　1981「近世印田墓」『魚津市埋蔵文化財報告書』第８集　魚津市教育委員会

鈴木公雄　1994「念仏銭、題目銭と六道銭」『史学』第63巻第３号　三田史学会

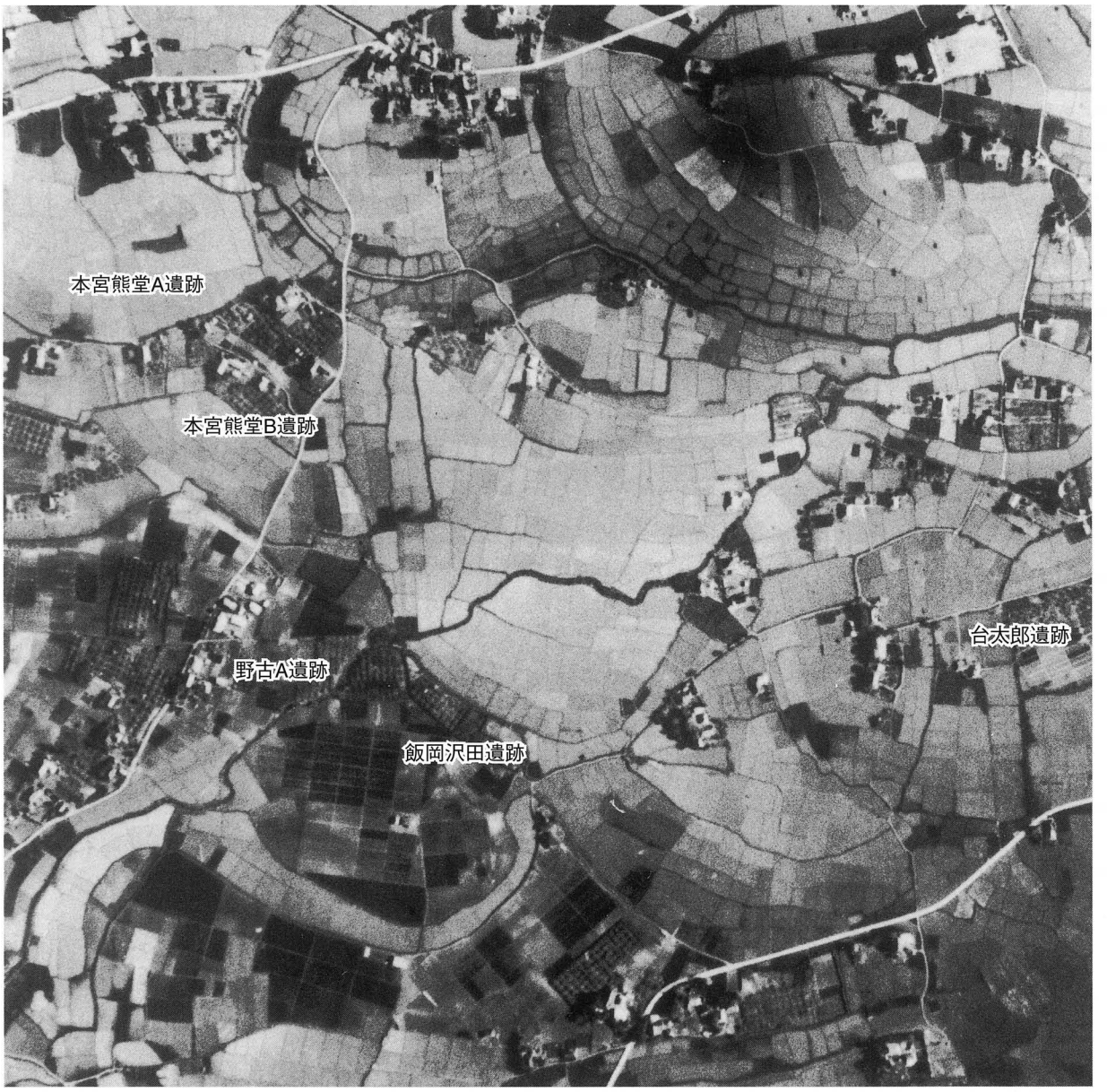
集落遺跡検討会　2004「岩手県土師器集成」盛南産業株式会社

古代城柵官衛遺跡検討会　2005『第31回古代城柵官衛遺跡検討会資料集』

平尾政幸　1996「畿内の土師器甕の製作技法」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東４煮炊具―』古代土器研究会

佐瀬隆　1991『黒色腐植層（黒土層）の生成に関する覚書』「紀要Ⅸ」（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

写　真　図　版



昭和22～23年頃の遺跡周辺の様子（米軍撮影の空中写真）

写真図版１　空中写真（１）

遺跡遠景（南から）

調査区空中写真（南から）

写真図版２　空中写真（２）

RA084住居跡　出土遺物

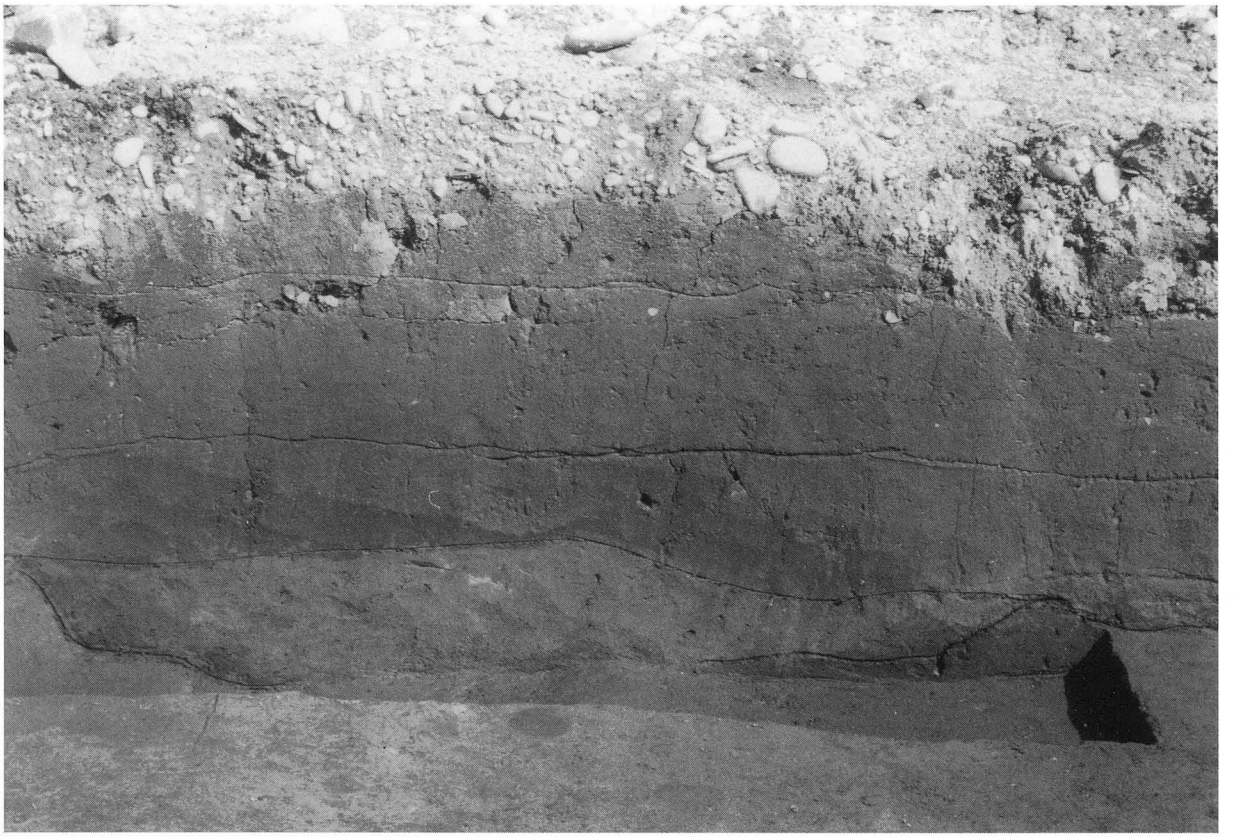
RA087住居跡　出土遺物

写真図版３　土器集合写真

A区表土除去黒ボク土層検出状況（東から）

C区調査前風景（西から）

写真図版４　表土除去・調査前風景

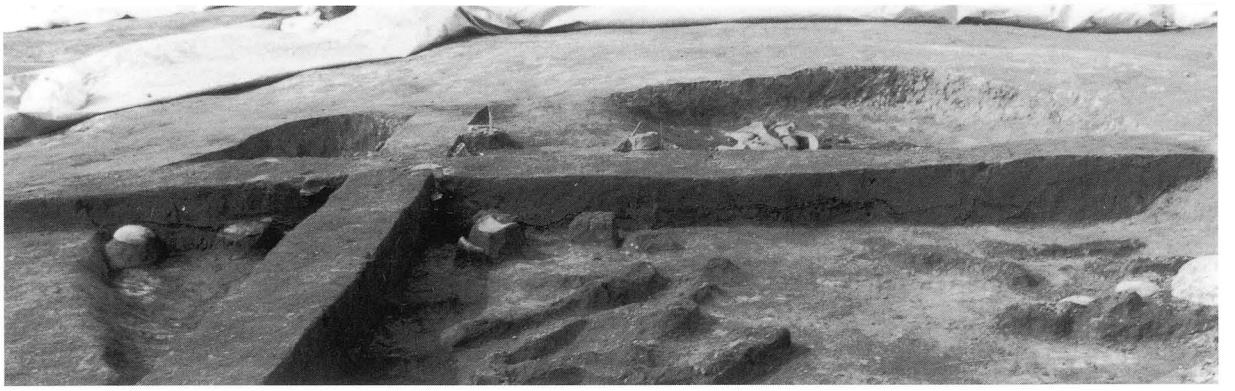


A区基本層序（南北）

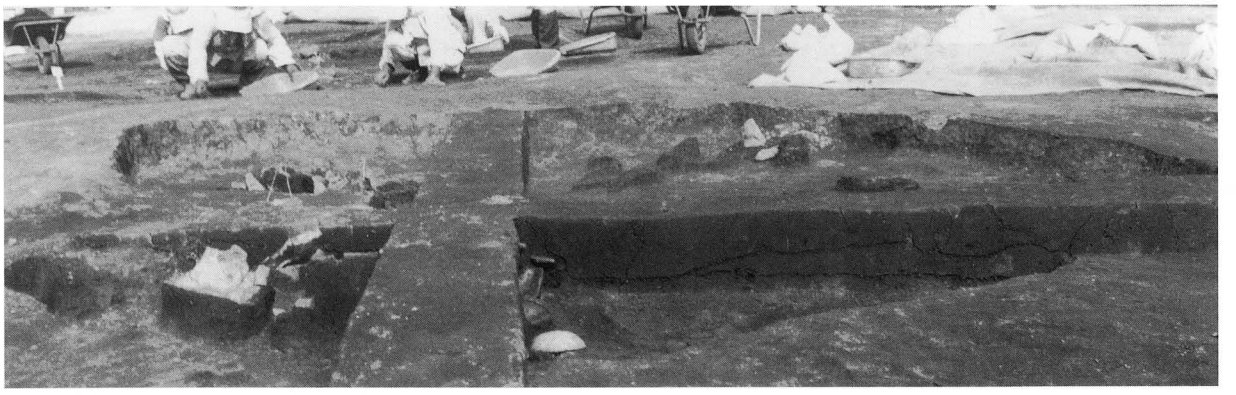
A区基本層序（東西）

写真図版５　基本層序

平面（東から）

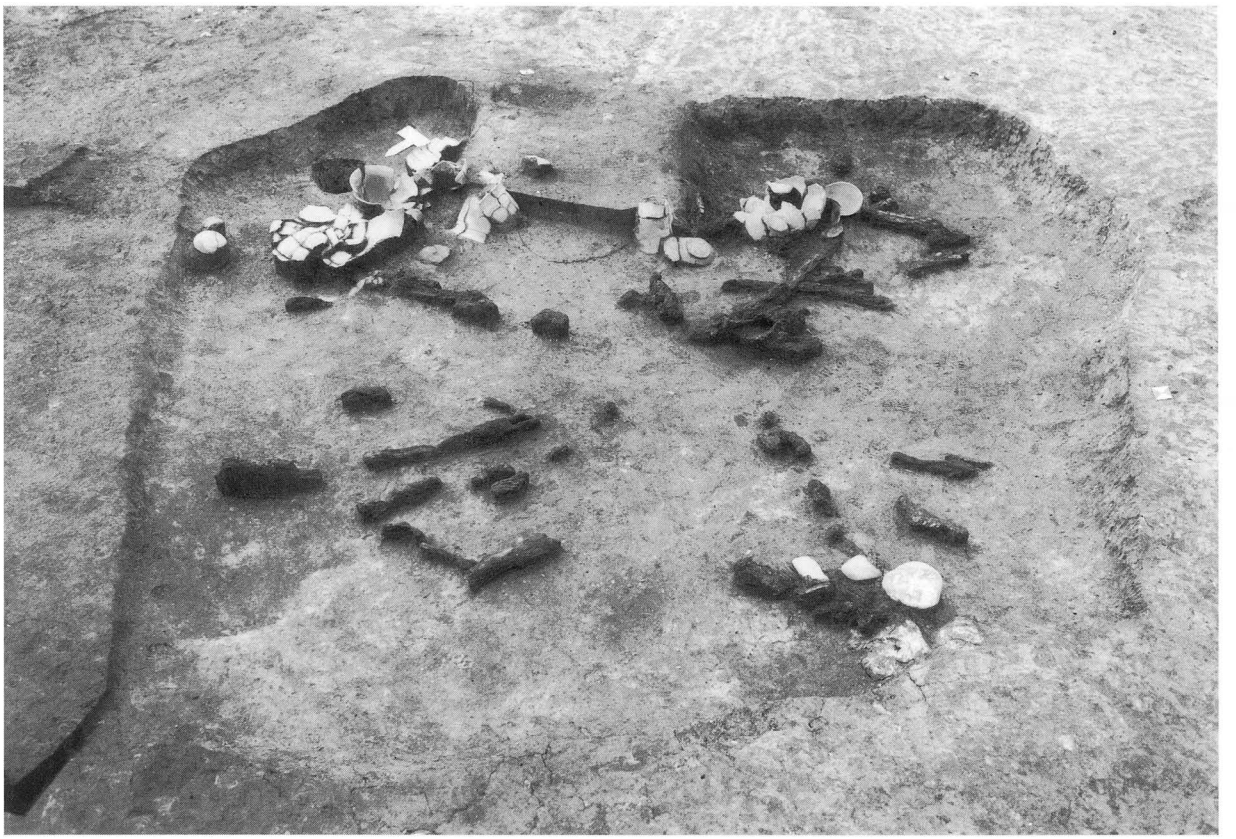


断面（南から）

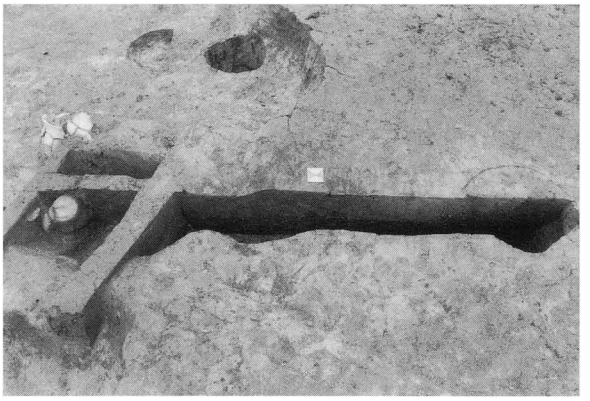


断面（西から）

写真図版６　RA084竪穴住居跡（１）



焼失状況平面（東から）



カマド煙道縦断面（北から）

カマド横断面（東から）

カマド使用状況（東から）

カマド燃焼部断面（東から）

写真図版７　RA084竪穴住居跡（２）

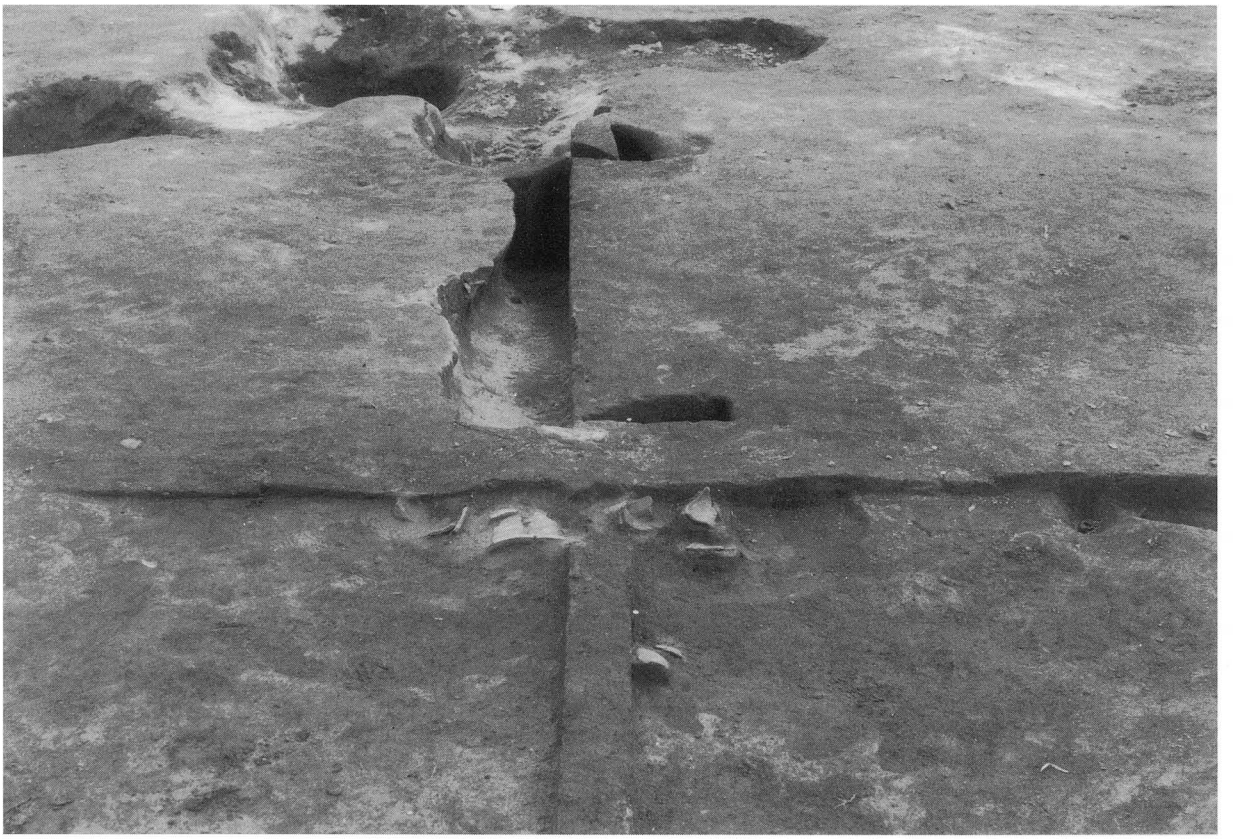
平面（東から）

断面（東から）

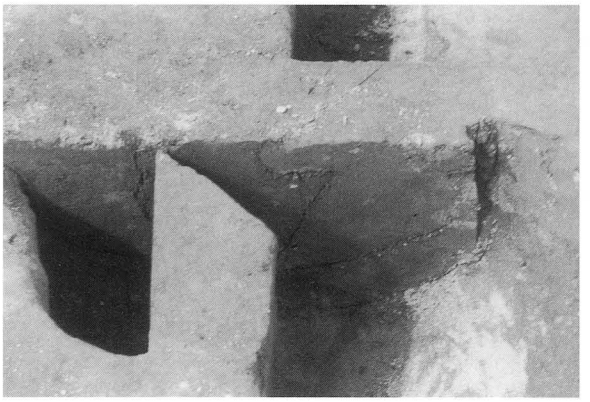
煙道縦断面（北東から）

煙道横断面（南東から）

写真図版 8　RA085竪穴住居跡

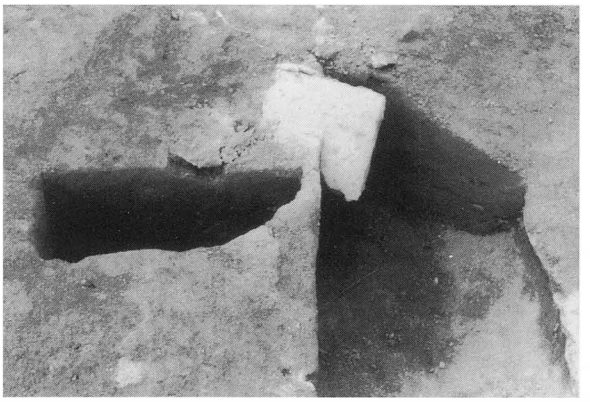


検出状況（西から）



煙出し断面（東から）

煙道縦断面（北から）

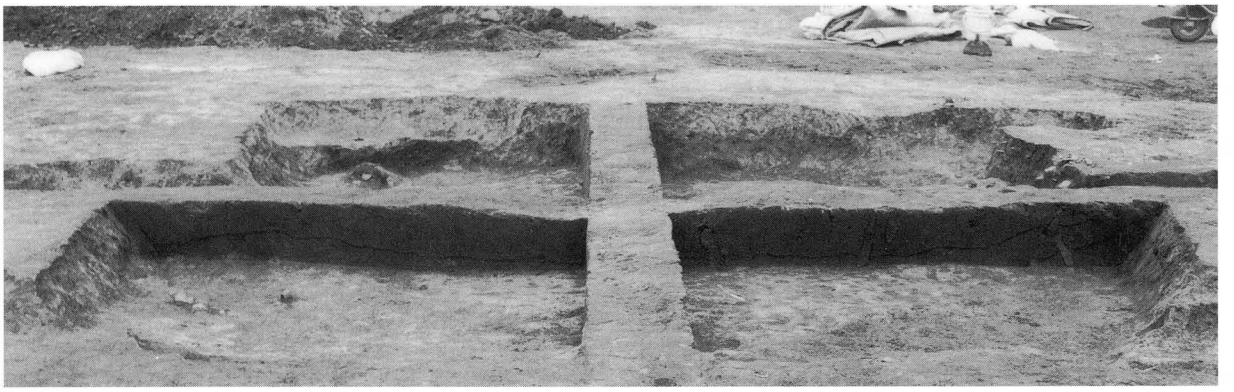


煙道横断面（東から）

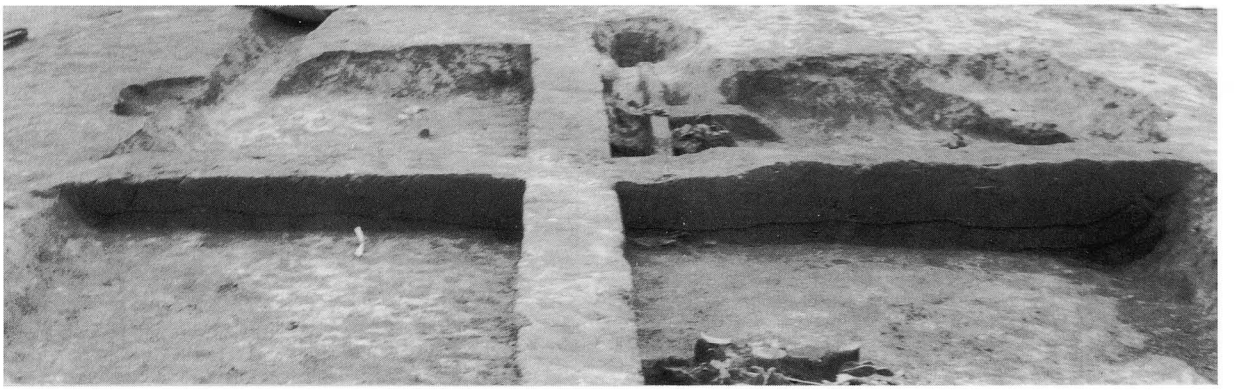
カマド燃焼部断面（西から）

写真図版 9　RA086竪穴住居跡

平面（東から）

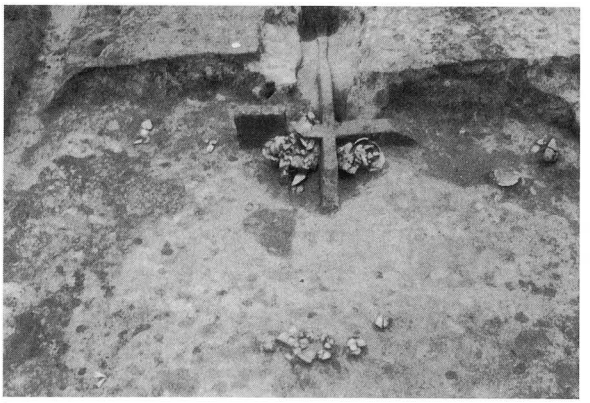


断面（南から）



断面（東から）

写真図版10　RA087竪穴住居跡（1）



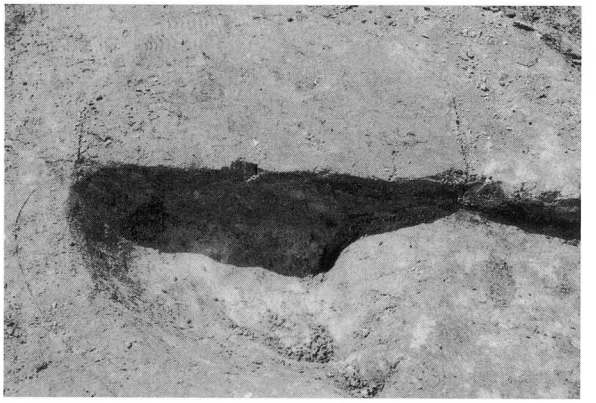
遺物出土状況（東から）

カマド横断面（東から）

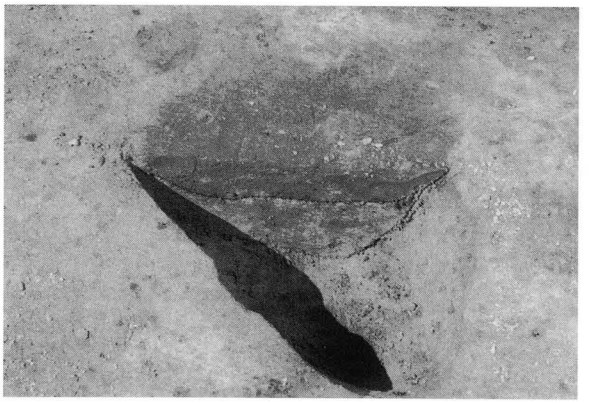
カマド縦断面（東から）

カマド使用状況（東から）

P2断面（南から）



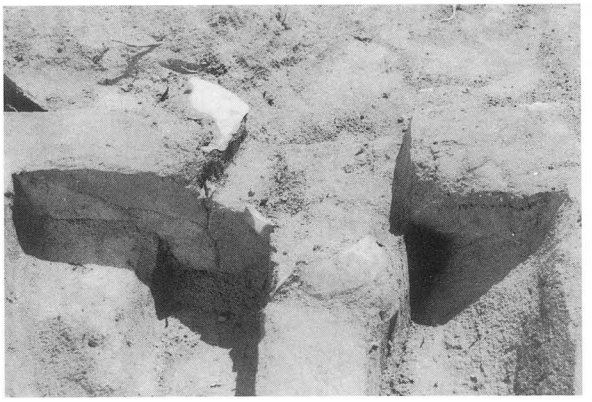
P3断面（南から）



P4断面（南から）

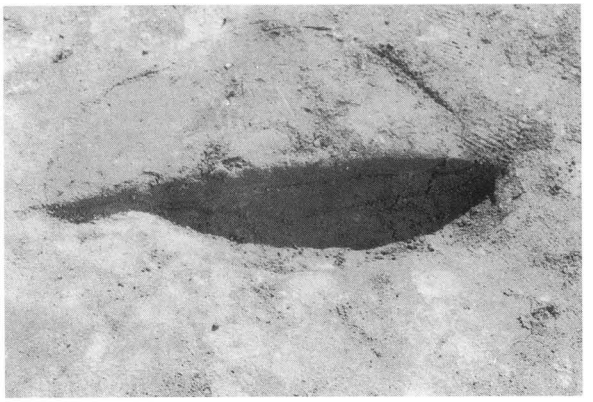
P5断面（東から）

写真図版11　RA087竪穴住居跡（２）



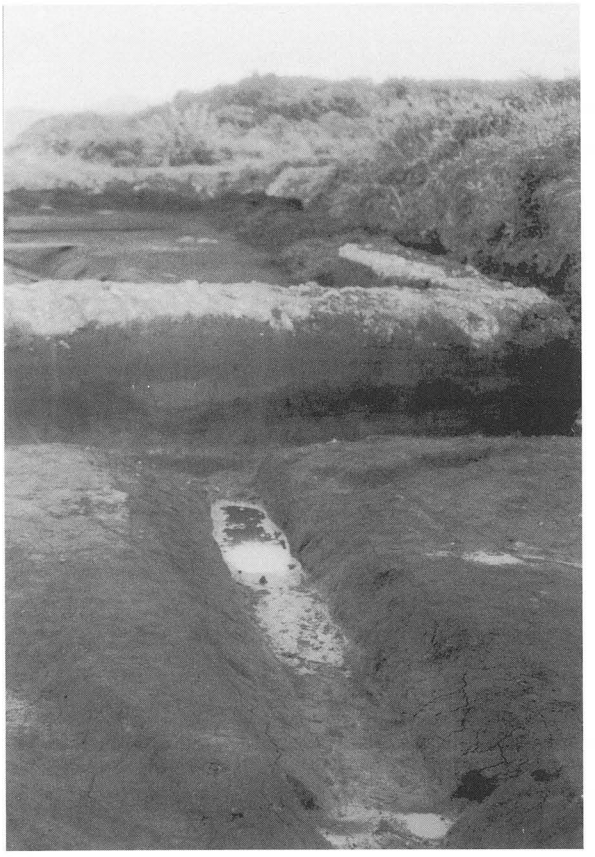
カマド横断面（西から）

カマド縦断面（南から）



P1断面（東から）

P2断面（東から）



A区（土層ベルト含む）調査現状

作業風景

作業風景

写真図版12　RA088竪穴住居跡・作業風景

平面（西から）

南北断面（西から）

東西断面（北から）

P1　断面（東から）

写真図版13　RA089竪穴住居跡

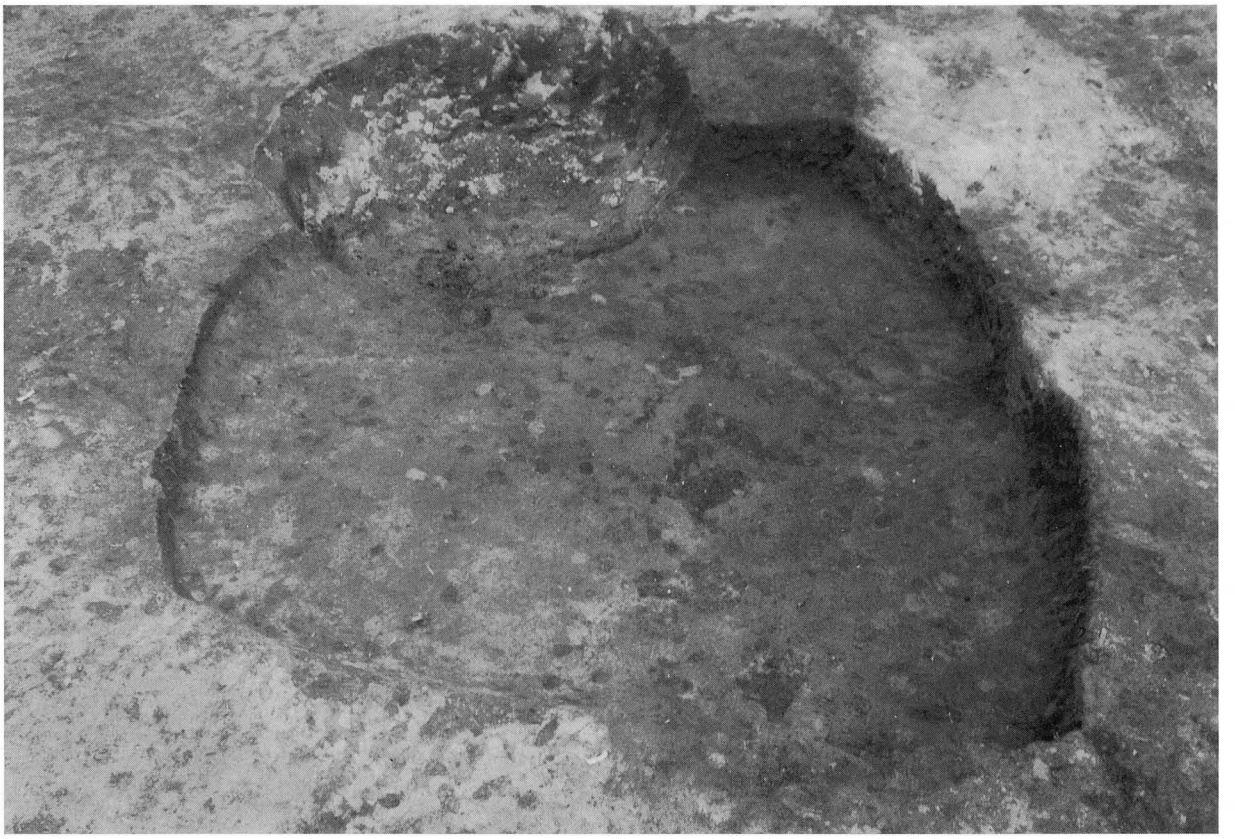
平面（西から）

南北断面（西から）

東西断面（北から）

遺物出土（西から）

写真図版14　RA090竪穴住居跡



平面（南から）

断面（南から）

断面（西から）

写真図版15　RE016住居状遺構

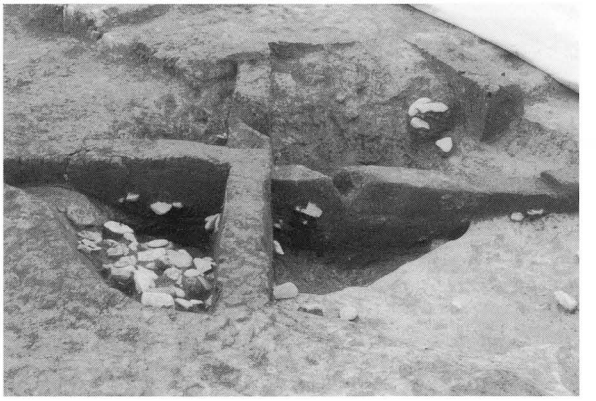
RD187　平面（北から）

RD190　遺物出土状況（西から）

RD188　平面（南東から）

RD188　南北断面（西から）

RD189　平面（南東から）



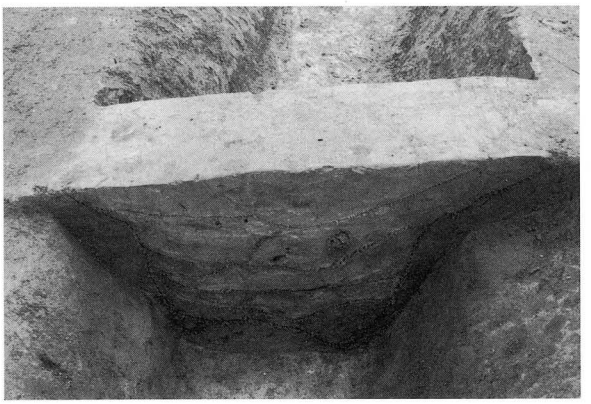
RD189　検出状況（西から）

RD189　南北断面（東から）

RD189　東西断面（南から）

写真図版16　RD187・188・189・190土坑

RG138・139　平面（東から）



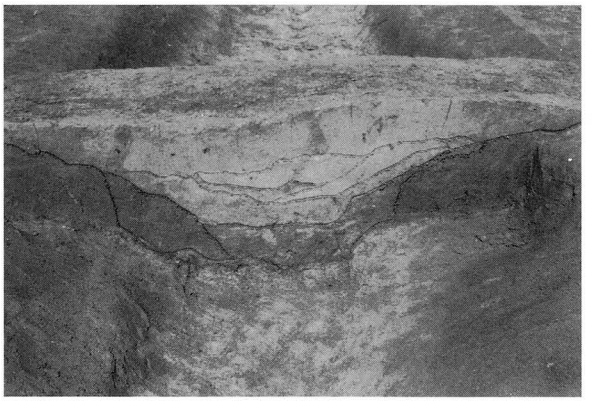
RG138　A－A'断面（西から）

RG138　C－C'断面（西から）

RG138　E－E'断面（東から）

RG138　F－F'断面（東から）

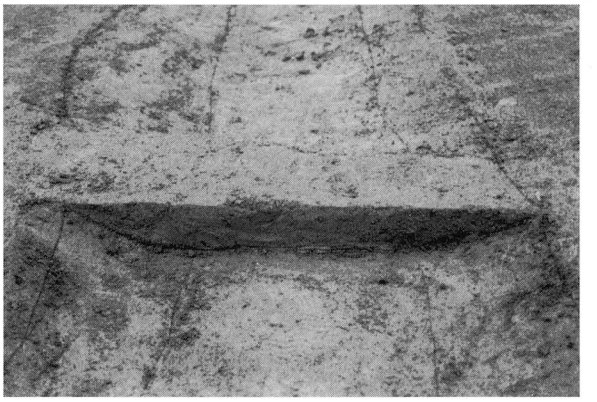
写真図版17　RG138・139溝跡



RG139　G－G'断面（東から）

RG110　平面・断面（東から）

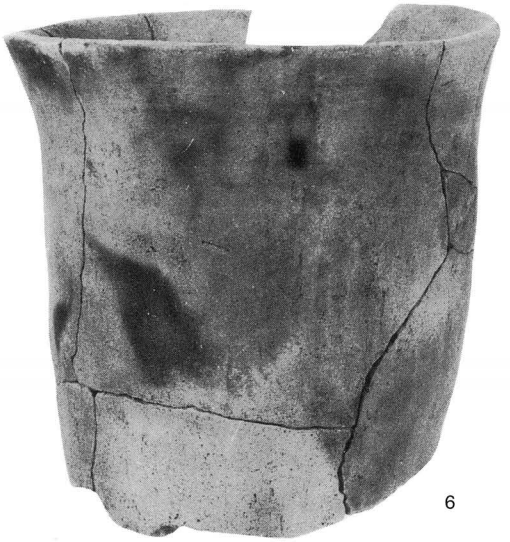
RG140　平面（東から）



RG140　H－H'断面（西から）

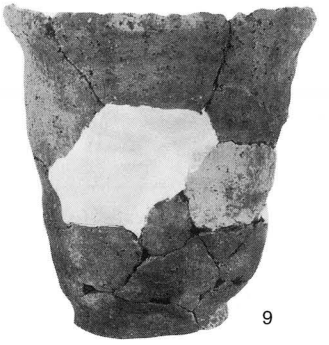
写真図版18　RG110・139・140溝跡

写真図版19　RA084竪穴住居跡出土遺物（1）

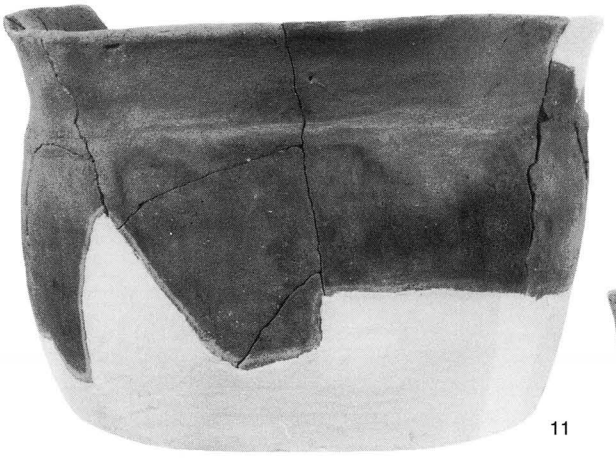

6

7

8

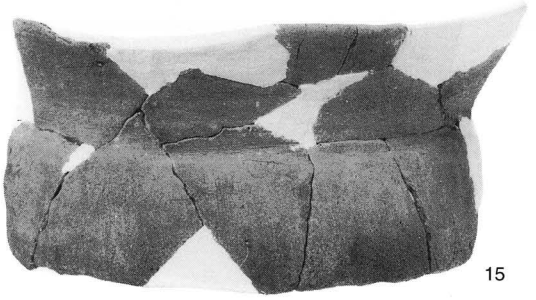

9

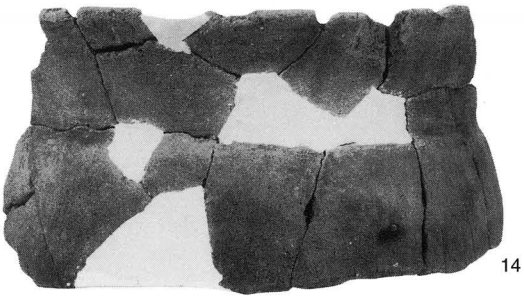
12


11

10

13


15


14

写真図版20　RA084竪穴住居跡出土遺物（２）

写真図版21　RA084（3）・085・086竪穴住居跡出土遺物

44

45

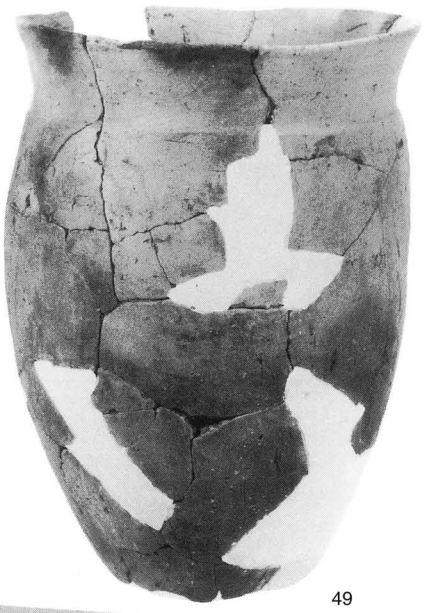
43

46

47

写真図版22　RA087竪穴住居跡出土遺物（1）

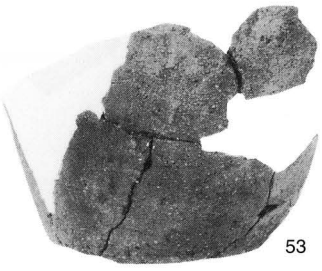
48

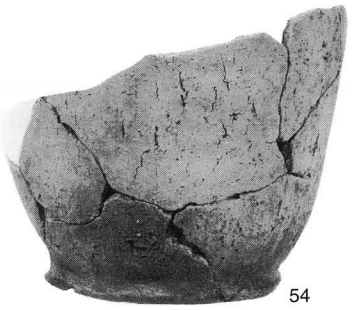

49

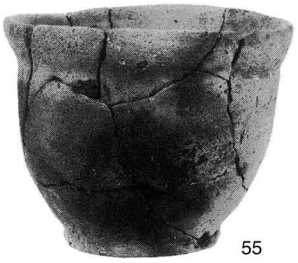
50

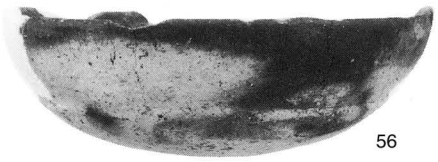
51

52

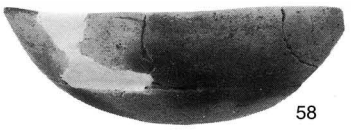

53


54


55

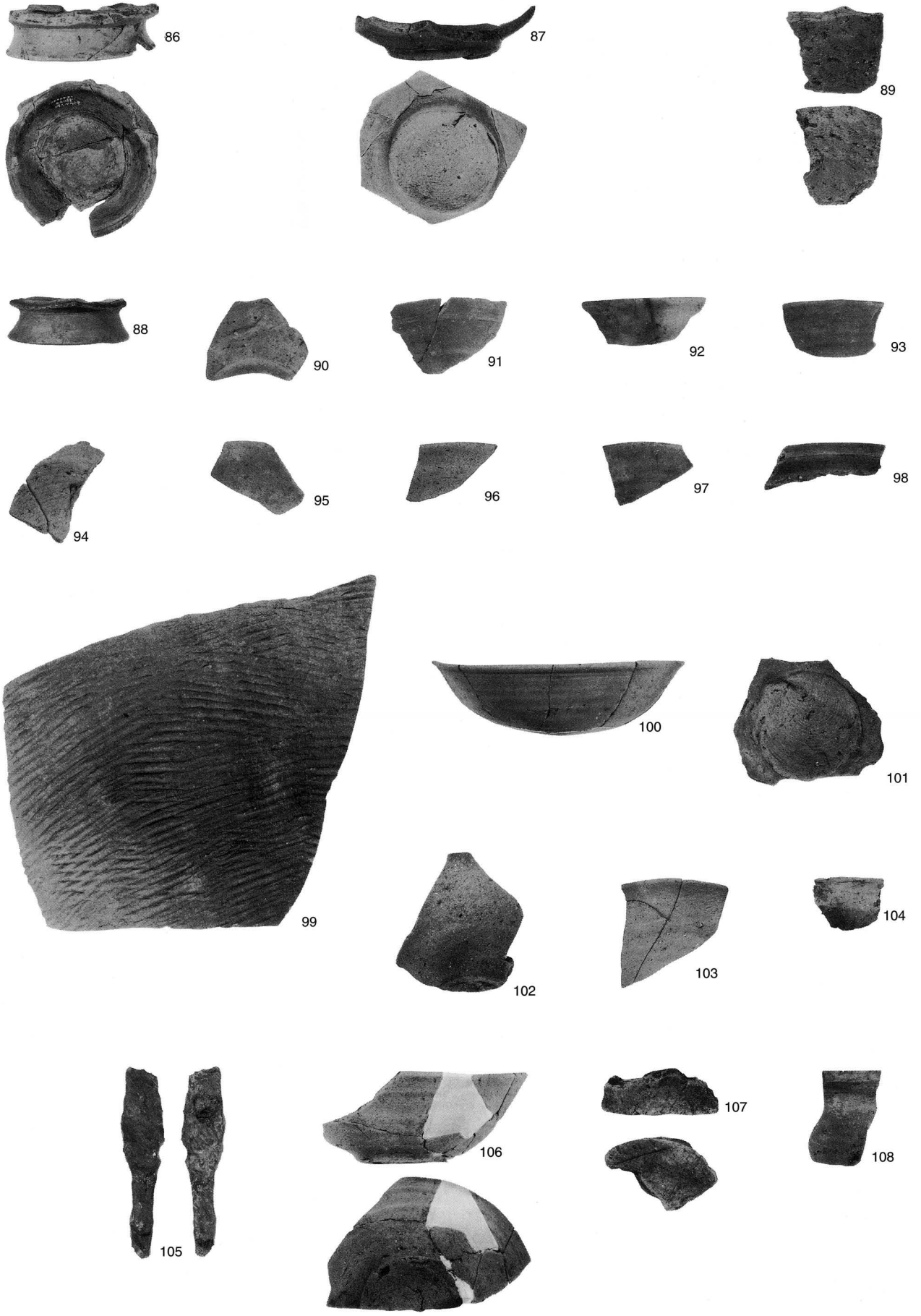

56

57

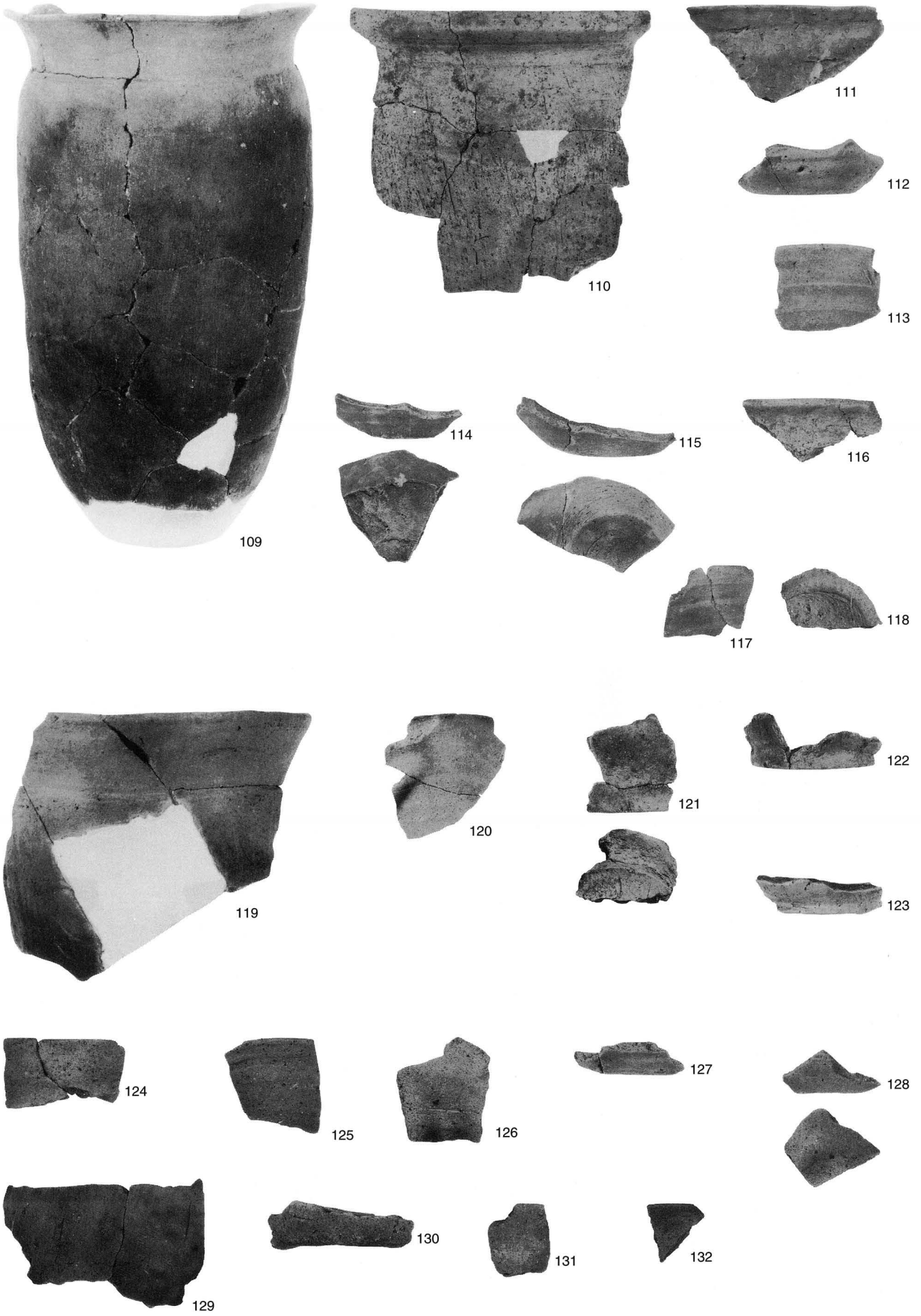

58

写真図版23　RA087竪穴住居跡出土遺物（２）

写真図版24　RA087（3）・088竪穴住居跡出土遺物

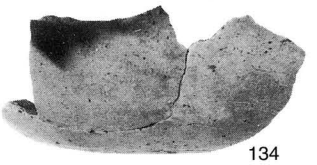


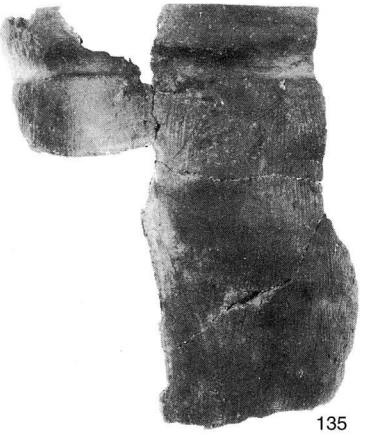
写真図版25　RA089・090竪穴住居跡、RE016住居状遺構出土遺物



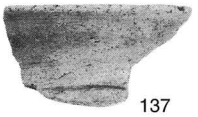
写真図版26　RD188・190土坑、RG138・139溝跡出土遺物

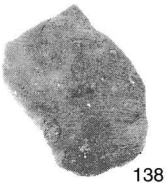
133

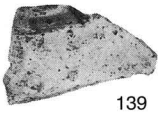

134


135

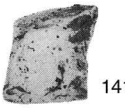
136

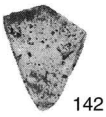

137


138

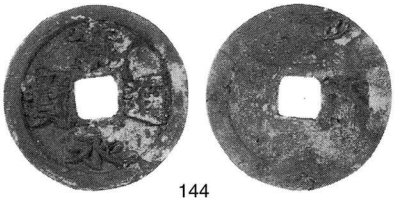

139

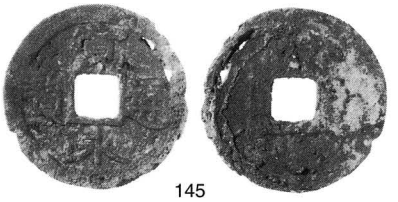
140

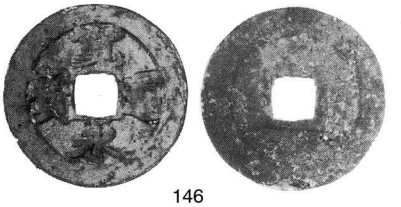

141

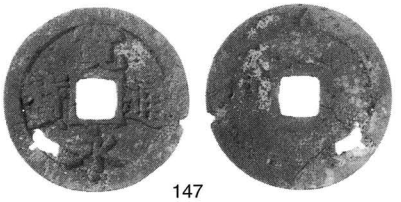

142

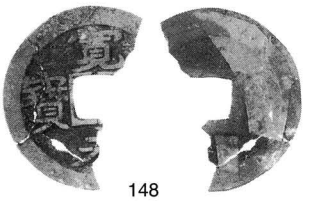
143

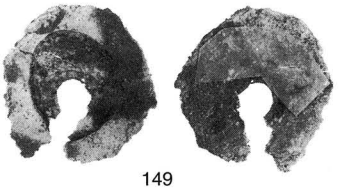

144


145


146


147


148


149

写真図版27　遺構外出土遺物、RD190土坑出土銭貨

報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうびーいせきだいにじゅうななじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	本宮熊堂Ｂ遺跡第27次発掘調査報告書
副書名	盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第487集
編著者名	小松則也
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638－9001
発行年月日	2006年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
本宮熊堂Ｂ遺跡 第27次	岩手県盛岡市 本宮字熊堂38-5 ほか	03201	LE16－2118	39度 41分 06秒	141度 07分 38秒	2004.08.06 ～ 2004.09.14	3,661㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本宮熊堂Ｂ遺跡 第27次	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡　３棟 土坑　１基	土師器（坏・甕・鉢） 須恵器	奈良・平安時代の集落跡
		平安時代	竪穴住居跡　４棟 住居状遺構　１棟 土坑　１基 溝跡　３条	陶器 鉄製品（鋤先・角釘） 土製品（紡錘車・土錘）	
		時代不明	土坑　１基 溝跡　１条	石器（凹石）	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第487集

本宮熊堂Ｂ遺跡第27次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成18年３月９日
発　行　平成18年３月15日

発　行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　（019）638－9001
ＦＡＸ　（019）638－8563

印　刷　有限会社　博光出版
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号
電　話　（019）641－0671

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006